

アジアの人々の協働から学ぶ

XXX



第30回国際ワークキャンプ報告書(インドネシア)

A REPORT OF INTERNATIONAL WORK CAMP (INDONESIA)

2016

桃山学院大学



**COMMITTEE of 30th
INTERNATIONAL WORKCAMP**
"WIDYA ASIH - ST. ANDREW'S UNIVERSITY"



24 of AUGUST - 10 of SEPTEMBER

Indonesia

IWC30

ワッキー



日本食



Koneksi

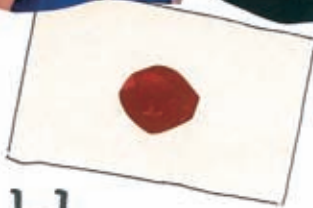
つながり



Panas
あついな



Fight!



Enjoy Perfect Human.



ワッキー



交流会





Work



Senyum 😊



Terima kasih 🇲🇵



ゆふい



Japanese Program



目 次

第30回IWCテーマ	1	
第30回IWC途中帰国について	清水 真一	2
異国の地を甘く見てはならない。でも、困ったときに助けてくれる人はたくさんいる。		
	巖 圭介	4
インドネシアの風を感じて.....	宮 嶋 真	7
沈黙の美学.....	長 崎 励 朗	10
インドネシアワークキャンプを終えて.....	前 田 隆 伸	12
第31回IWCに参加する学生へのメッセージ	14	
スケジュール.....	15	
第30回メンバー紹介.....	18	
事前研修.....	22	
合宿.....	23	
Tシャツ班	24	
募金活動.....	25	
入村式・定礎式.....	26	
プリンピンサリ村.....	27	
アスラマについて.....	28	
アスラマの子どもたち.....	30	
ホストファミリー.....	31	
第30回IWC記念祝賀会	32	
交流会.....	33	
日本食.....	35	
日本語班.....	36	
ワーク内容.....	37	
離村式（フェアウエルパーティー）	38	
エヴァリユエーション.....	39	
第30回IWC途中帰国	41	
帰国後の活動		
ゴミ拾い.....	42	
アスラマの子どもたちへの贈り物を作る.....	43	
募金活動.....	44	
東光学園.....	45	

参加学生のレポート

「IWCでの軌跡」 キャンプ長 南 秀 樹 46
「インドネシアでの考察」 高 岡 玲 矢 48
「国際ワークキャンプを終えて」 松 並 翔 太 50
「今回のプログラムに参加して」 井 方 優 花 53
「インドネシアの実情」 山 本 陽 奈 55
「日々感謝、日々成長」 副キャンプ長 前 平 朱 理 58
「IWCの活動を終えて」 大 隣 光太郎 60
「色々なことを感じられたIWC」 副キャンプ長 植 田 哲 平 63
「このままでは終われないIWC」 河 本 寧 66
「異文化に触れて」 井 上 愛 琴 68
「インドネシアで感じたこと、学んだこと」 五十 殿 詩 織 71
「学びと逞しい子どもたち」 吉 木 美 友 73
「koneksi つながり」 副キャンプ長 藤 崎 優 華 76
「初めての海外」 木 村 純 菜 79
「途中帰国と人のタイプ」 市 村 ひろみ 81
「感謝」 平 野 将 大 84
「初めての異文化体験」 小 出 栞 奈 87
「国を超えてなにかをする難しさ」 河 野 満 ちる 90
「私が学習したこと」 小 泉 涼 92
	Nurrahman Andriant 95
	Gade Indeo Mario Agastian 98
	I Nyoman Susila 99
「THE REPORT OF IWC 30 “いろいろお世話になりました”」		
	Kadek Asti Sukreani 101
	Hanna Christmas Ngongo 102
「Hello everyone ..」	Ni Kadek Dearly Yuliantari 104
第31回国際ワークキャンプ参加者募集要項	 106

IWC30th テーマ

つながり

つながり = Koneksi

IWC (International Work Camp)

30年という長い歴史。

30年間も続けてこれたのはこれまでこのプログラムに関わった方の想いが積み重なったものであるだろう。それは小さな想いが集まってできるものである。このIWCは、人と人との思いやりという温かいものが感じられる。そしてこの歴史とともに改めて人に感謝をしたい。

なぜテーマが「つながり」なのか。

このIWCの歴史が、これからもさらに10年、20年、30年と続いてほしいものであるから。

国が違って、「家族」のようになれる。

アスラマを必要とする人がいつか安心して笑顔になれるようなものになってほしいと願ったものである。

第30回IWC途中帰国について

第30回国際ワークキャンプ実行委員長 清水 真 一

第30回IWC隊は8月24日に関空を飛び立ち、8月25日に現地に到着した。同日、デンパサールからワークの現地プリンビンサリ村に到着。26日、ワーク隊は入村式のあとワークに着手し、午後4時から村のプリンビンサリ教会で開催された第30回記念式典にも参加した。ワークも順調にすすむかと思われた矢先、8月27日に一名がアメーバ赤痢を発症、つづいて8月31日に今一人がアメーバ赤痢を発症し、加えて、食中毒を患うものが数名出た。大事には至らなかったがデング熱に一名が罹患している事も判明。8月31日に、即刻途中帰国の決断が対策本部によりなされ、デンパサールでの全員健康診断（検査）を経て日本時間9月4日午前9時に帰国（関空着）するに至った。

第30回IWCワーク参加への事前の取り組みは、4月22日という早い段階から毎金曜日1コマのペースで7月22日まで合計13回おこなわれ、加えて出発直前の8月4日、5日には1泊2日の合宿が学内で実施された。毎週金曜日の事前研修ではインドネシア語7コマを含め、インドネシアの文化・宗教、プリンビンサリ村、健康管理に関する講義など、おおよそワークに参加するための基礎的な知識が教授された。また、健康管理に関わる指導の面でも、A型肝炎、破傷風などを含めた予防接種を受けることについての徹底的な説明をおこなうなど、参加者に対し大学保健室から懇切丁寧な指導をおこなった。しかし、今回現地にて生じた事態は予想だにできなかった結果をもたらした。我々はこうした結果に対し謙虚でなければならないことを学ぶ機会が与えられたとみるべきであろう。

帰国後の事後研修、補完プログラムの取り組みについての詳細は本報告書に譲ることになりますが、事後研修と並行するかたちで、現地で実施できなかったプログラムの補完プログラムを実施し単位認定をおこなう。補完プログラムは、IWCの基本理念である「協働」が所与の条件下で可能な限り具現化しうるように最大限の配慮をいたしました。この中には児童擁護施設（東光学園）での奉仕活動・子どもたちとの交流、同施設長による講話をうかがうこと、大学近隣清掃ボランティア等々が含まれております。また、今回現地でワークをともしたディアナプラ大学の二名の学生がこの秋学期から交換留学生として本学で学んでおります。彼らとの交流もすでに始まっており、補完プログラムの一部をなすものではないですが、その交流の中から新しい何かの「協働」の業が芽生えれば今回のワークキャンプもその意義を大いに見出しうるものと考えます。

他方で、発症原因を推察し今後の対策について検討することが急務であるとの認識の上になら、目下、対策本部の「発症原因の究明と今後の対策」報告部会を中心に鋭意その検討がすすめられています。これには、バリ島の現地スタッフをも含めて抜本的かつ総合的な検討がなされる予定であります。IWC実行委員会もこの報告を受けてその具体化のための作業に入ります。これらの一連の過程を経ることにより、所期の目的を十全に果たしうる学びのより豊かなIWC（インドネシア）の実現が可能となることを願ってやみません。

第30回IWCにおいては、とりわけ、現地スタッフの石井美和看護士には、身を粉にして昼夜を問わず発病者を看護していただき、適切な段階でデンパサールのSurya Fusadha病院へ発病者を送る手配等、特段のお世話になった事、御礼申し上げなければなりません。また、適切な処置・看護をしてくださったデンパサールのSurya Fusadha病院の先生方、同病院の日本人看護士の竹本さくら看護士にも御礼申し上げます。プリンビンサリ村からデンパサールの同病院まで体調のすぐれない学生た

ちを搬送してくださったウィデアシアシ財団職員のフォルマン氏にも御礼申し上げたい。村のホームステイ先のご家族にも御礼申し上げなければなりません。学生たちをおぼえ祈りのうちに支えてくださいました。第30回記念式典の事前準備をも含めその実施に奔走し、また、今回の事態を受けてワーク隊の速やかな途中帰国をさせるための手配・準備等を含め、これまた身を粉にして働いてくださった現地責任者のスイクラマ氏にも特段の御礼を申し上げなければならない。最後になりましたが、学内にあっては現地との連絡、情報収集、途中帰国の手配、帰国後の対応等々、事細かな配慮を払いながら忠実に職務にあたってくださった事務方にもあらためて謝意を表わしたい。

途中帰国になったとはいえ、第30回IWCは多方面からのご支援・ご配慮を賜ったことを報告しておかなければなりません。奨学金返還の問い合わせに対し、JASSO（日本学生支援機構）からは支給済みの奨学金については返金の必要はなしとの回答をいただきました。教育後援会からも寛大なご配慮を賜りました。この紙面をおかりして深謝申し上げます。

異国の地を甘く見てはいけない。
でも、困ったときに助けてくれる人はたくさんいる。



第30回国際ワークキャンプ団長

社会学部 巖 圭 介

長い歴史を持つこの国際ワークキャンプ（インドネシア）（以下IWC）の記念すべき第30回の団長を仰せつかり、前年に引き続き2度目の引率をすることになりました。何度も引率されてベテランだった松平前チャブレンがおられず、経験者が自分ひとりという状況には若干の不安があったものの、同じ場所、同じ行程の旅であるし、現地には頼りになる案内人がいるしと気楽に構えていました。第30回の記念の式典があるだけで、それ以外は前年踏襲でこなしていけるはずだと考えていました。

第30回の学生が、前年の学生に比べてとくにどうだった、というようなことは感じません。とくにはしゃぎすぎているとか、初日から飛ばしすぎている、というようにも思いません。インドネシア学生とも同じようにすぐ打ち解けて仲良くしていたし、子どもたちもしっかり遊んで、しかし目をむくほど羽目をはずしたりすることもなく、おとなしくまじめで普通の学生たちだったと思います。

しかし、プリンビンサリに入って2日目、30周年記念式典と祝賀会が行われた26日（金）から体調不良者が出始めました。最初は風邪、あるいは便秘という程度だったのでたかをくくっていました。しかし翌27日（土）になって、半日寝こむ者が続出。それが寝不足のせいなのか病的なものか、あるいは精神的なものかそれぞれ理由は異なっていたようでしたが、その中であげ下しと発熱で容態の悪い一人をデンパサールの病院に送るかどうかが判断を迫られるに至り、「前年と同じ」などという甘い考えではいけないことを実感し始めました。それでもまだ、片道4～5時間はかかるデンパサールまで連れて行くのもしかしたら大げさかも知れないが、念のための安全策として考え、すぐに戻れるだろうと思っていたのです。

28日（日）は教会の日曜礼拝への出席と、日本食パーティの日。前日の不調者がおおむね回復した一方で、新たな発熱、嘔吐などが発生。29日（月）はおおむね回復に向かったと思いきや、その夜から不調者が続出。あげ下しし発熱する者がゲストハウスに3人連続でやってきて、苦しさにのたうちうめき続ける学生に何もしてやることもできないまま夜が明けるのを待つ事態となったのです。明けた30日（火）早朝、3人をデンパサールの病院へ送り出しましたが、そのうち一人は自力で歩けないほど衰弱しており、長い道程の負担に耐えられるかと気がかりでした。

こうして振り返ってみると、翌31日（水）にワークキャンプの中止が大学によって決定されたのも仕方のないことと思えます。決定を知らされたそのときは、長い準備をしてきた学生たちの無念の想いに共鳴してしまい、悔しくて悲しくて学生以上に泣けてしまって、団長にあるまじき姿をさらしてしまいました。しかし、もし中止か継続か団長として現地で決断することを迫られていたなら、どうしていたか、どうすべきだったか、今でもわかりません。すり切れるほど苦悩したであろうことだけは間違いなく、日本側で決定を下すという判断は正しかったと思います。

結局、入院した学生4名のうち2名がアメーバ赤痢に感染していると診断され、また第2陣に付き添った引率教員が軽いデング熱と診断されました。他のメンバーが同じアメーバ赤痢に感染している可能性を排除するため、デンパサールで3日間滞在し検査を受けました。急遽用意された身分不相応に豪華な

リゾートヴィラで過ごす時間は、プリンビンサリや起きてしまった事態とのギャップが激しく、心乱される学生もいましたが、あわただしく過ぎ去った時間を落ち着いて見つめることができたように思います。そうこうしているうちに入院していた学生たちも回復して合流できることになり、9月4日（日）全員そろって帰国することができました。予定より6日早い帰国でした。

記録上、病名がついたのはアメーバ赤痢が2名、 Dengue熱1名のみ。キャンプが中止されたのは、アメーバ赤痢の集団感染が起きたことが理由とされています。本当にアメーバ赤痢だったのか、他の学生の不調はなんだったのか、現状以上に追求するすべはありません。一般にアメーバ赤痢は潜伏期が2～3週間あるといえますから、普通に考えればバリに着いてから感染し発症したとは考えにくいのですが、病院でそう診断された以上反論はできません。また、29日夜に3人の学生が発病したその同じ夜、施設職員にも同様の症状を示した者がいたということで、夕食に食べたなにかによる食中毒の可能性が高かったと思えるのですが、それも確認しようがありません。もしあのとき病院にかからなければ、アメーバ赤痢という診断名がつかなかったなら、という思いが浮かぶときもあります。しかし、あの夜うめき苦しむ七転八倒していた学生の姿を思い出せば、すべてこうするしかなかったのだと自分に言い聞かせています。

この国際ワークキャンプの歴史上、病人が出て途中帰国したのは今回が二度目です。これより前、第22回の場合は腸チフスでした。後になって、バリでの腸チフスの診断基準が日本とはまったくちがっていて、日本では該当しない症状でもバリでは腸チフスとされてしまうということがわかったので、その教訓から今回病院に収容された者はみな腸チフスの検査を拒否しました。もし検査をしていたなら、もっと大事になっていたのかも知れません。

日本ではほとんど気にすることもないこと、たとえば飲み水、手洗い、虫刺され、提供される食事、そうしたことが異国の地では様々な病気に関係してくる。事前研修で何度も言われたことです。しかし、現地に着いて、意外に快適な生活を送るうちに、そんなことは徐々に頭から抜けていってしまいます。何かが起きるまでは。やはり、慣れない環境を甘く見てはいけません。すべてを未然に防げるわけではないでしょうが、防ぐ努力はしなければなりません。それでも病気になったときは、必要な対処をして、あらかじめ決められた手順で対応する。それは、何が起こるかわからない異国でのプログラムであれば当然織り込むべきリスクでしょう。今回の件で、今後のIWCに求められるリスク管理はより厳しくなるでしょうが、それでもIWCはこれからも続くと信じています。

波乱が起き、ただ翻弄されるがままだった頼りない私を支えてくださったすべての方々に感謝します。まずなにより、看護師の石井美和さんにはこれまで以上に大変にお世話になりました。現地に入って早々から病人続出で、なにかにつけて学生が母親のように石井さんに頼り甘えていましたし、次々病人がやって来た夜にはほとんど寝ずに看病してくださいました。症状の重い病人を病院に送るべきか判断してくださったのも、デンパサールの日本人看護師のいる病院に連絡をとって入院その他の手はずを整えてくださったのも石井さんでした。清水真一IWC実行委員長、朝倉康仁庶務課員、馬詰雅子さん（チャベル事務室）は、危機管理に際し学内とインドネシアの橋渡しで大変なご尽力をいただき、迅速に対応していただきました。文字通りてんでこ舞いだったことと思います。スイクラマさんは、病人が出たと聞いて施設の食事準備の徹底的な衛生改善を速やかに指示してくださったのみならず、急な事にもかかわらず全員が不自由なく安全に滞在できるホテルを用意し、検査の手配まですべてしていただきました。奥様でホテルマネージャーのマリアさんのご尽力で、非常事態が嘘のように快適にデンパサールでの3日間を過ごすことができました。

最後に、今回の事案は残念なことではあったけれど、30年の歴史を持つIWCならではの態勢のおかげで切り抜けられたのだということを記しておきたいと思います。本学には他の国際プログラムもたくさんありますが、IWCのように恵まれた人的資源で運営されているプログラムは他にありません。日本からの引率が教職員4名、加えて現地で合流するのが看護師の石井さんとウイディヤ・アシ財団から2名（今回はステイッティさんとフォルマンさん）。通常の国際プログラムでは、日本からの引率は2名のみで、もちろん看護師などつきません。今回のような事態に際し、もし看護師の石井さんがいなかったらどうなっていたか。病院に送る判断が遅れ重篤化させることになったかもしれず、また近場の日本語の通じない病院で診てもらい腸チフスの診断をされて帰国できなくなっていたかもしれません。あるいは病人を二度デンパサルに送る際、今回はそれぞれ教職員が1人ずつ付き添って行きましたが、もともと引率が2人しかいなかったらそれは不可能でした。そう考えると、起きたことは不運でしたが、事態に対処するための人の助けには恵まれていたと言えるでしょう。

第30回国際ワークキャンプは、参加学生にとっては不完全燃焼な終わり方になりましたが、しかし他の隊にはない貴重な経験ができたのは間違いありません。異国の地を甘く見てはいけません。でも、困ったときに助けてくれる人はたくさんいます。満たされない想いを抱えて、次に目指すものを探して行ってください。

インドネシアの風を感じて



チャブレン 宮 嶋 眞

<事前準備>

桃山学院大学着任早々の4月第1週から、IWCの募集、説明会、選抜試験と矢継ぎ早のプログラム、そして4月22日からは選ばれた学生と共に事前研修へと入りました。

私は、2回ほどチーム・ビルディングの部分の講義を担当しました。

講義といっても、チーム・ビルディングですから、ワークショップ形式で行います。第1回目は、問題解決実習「トシ君のおつかい」を行いました。1年生から3年生まで20名、男8名、女12名のほぼ初対面の学生にとって初めての協働作業を行いました。情報を分かち合って協力しないと完成しないトシ君の町の地図の作成と、トシ君の買い物経路の決定でしたが、見事にやり遂げてくれました。学生相互が少し近づいたように感じた瞬間でした。

第2回目はコンセンサス実習「IWCで大切にしたいこと」。これはIWCのために作ったオリジナルの実習です。一人ひとりが、IWCで大切にしたいことを明らかにし、グループでの目標を決定していくプロセスを通して、IWC参加の動機を語り合い、相互理解を深めることができました。また、あまり合唱の経験がない参加者に、「ハリ・イニ（「この日は主が創られた」インドネシア語）」と「アーメン・ハレルヤ（手話付）」の賛美歌の練習もしてもらいました。現地での交流会や、礼拝などで発表しました。

こうした準備を経て、いよいよ班分け、班長の決定を行いました。班長は立候補制とし、立候補した班長は、それぞれ、自分の班に対する抱負をみんなの前で語りました。

5人が立候補しました。それぞれが立候補の決意を語った上で、投票。4人が選ばれました。せっかく立候補したのに落選した人が出ました。うーん残酷やったかなー。でもこの落選した学生は最後まで、他の班長やメンバーをバックアップする仕事をやり遂げてくれました。うれしかったです。ふりかえてみると、こうした準備は、インドネシアでの経験のための大切な準備教育としての「体験学習」でした。自ら経験し、その意味を考え、次に活かしていくという体験学習のまなびのサイクルを回していく重要なプロセスでした。

班分けをし、仕事班も決まったこの頃から、ようやくIWC30のメンバーが機能的に動き始めたように感じます。風が流れ出したといっても良いでしょう。一番早くボランティアで動き出したTシャツ班。最後まで苦勞したしおり班も含め、日本語プログラム、日本食、交流準備班のそれぞれが、それぞれのやり方で取り組みました。みんなで実施したアスラマの子どもたちのための募金活動の成果も含めて、現地ではすべてがとても感謝されました。

そして、8月初めに行った合宿。まだ準備のできていなかった部分、食事作り、踊りの練習など、盛りだくさんの内容でした。合宿中に出発前の一人ひとりの決意表明をビデオで撮映しましたが、「これからはいよいよこの学生たちとインドネシアに行くのだ」という気持ちが高まってきたのを思い出します。

<インドネシアへ>

8月24日（水）数名の学生とともに、和泉中央駅前から関空行きのリムジンバスで出発。

心配していた遅刻者や、忘れ物もなく7時間のフライトでインドネシア・バリ島、デンパサール空港

へ到着しました。飛行機内の寒いくらいの空調ともお別れして、生温かいバリの風に吹かれ、交通事情の悪さ、ストリート・チルドレンや、その他のストリート販売、物乞いの姿などに出会うと、マニラ、ホーチミンといったアジアの大都市を訪れた経験がよみがえり、何とも言えない懐かしさがこみあげてくるデンバサールの町並みでした。それでも、町のあちこちで空高くあげられている「凧」に、新たな風と人々のさわやかなエネルギーを感じました。

翌日、プリンビンサリ村へ向かった学生一行とは別行動で、日本総領事館、バリ島日本人会の事務所を訪ねました。総領事の大変丁寧で慎重な語り口に、外国にあって、日本を代表して行動する人々の、神経をすり減らして行う折衝の姿を垣間見ました。その直後、日本人会の事務所を訪れ、何かほっとする、くつろいだ雰囲気を感じたのは私だけだったのでしょうか。異国で生活する人々にとって、日本人会のような同国人同士の交わりの中で、ほっとして、また、それぞれが遣わされた現場に出て行く元気を得ているのかなと思いました。

<プリンビンサリ村にて>

プリンビンサリ村は、想像以上にフレンドリーなところでした。過去30年という歴史の中で築かれた友好の輪は大変強固なものだと感じました。スタッフ、子どもたち、村人、教会の皆さんも、にこやかに迎えてくれています。流れる空気が、何かゆっくりとしたものを感じます。特に、朝焼けの山々を望むとき、昼下がりの東屋に横たわっているとき、時間の流れは、「古都奈良」を思わせるゆったりさがあります。しかも緑、緑、緑。ワークキャンプに来たことを忘れさせるすばらしい環境です。

20歳の頃から、日本の養護施設や、古い教会、老人ホームなどで、毎年ワークキャンプをしてきた私にとって、とつても懐かしいワーク、石、砂運び、そして一輪車の手押し車でした。もう少しワークの期間があれば、現地の職人さんがやっておられたセメント捏ねや、石垣積みにもきっと手を出していたかもしれません。じりじりした暑さの中、砂や石を運び終えた後、手ぶらでもどるときの脱力感、そして、休憩時の開放感。そうだったなー。

毎朝、朝の集いを行いました。少し身体を動かし（ストレッチ体操やヨガ、簡単なゲームなど）目覚め、聖歌を歌い、聖書を読み、お祈りをする。私にとっては当然のことでしたが、学生の中には「キリスト教を押しくるな」と感じた者もいたようです。はい、確かに押しこみました。こんな機会だからこそ、朝の静かなときに一人になって、自分のあり方を静かにふりかえる時間が、短くてもほしいと思ったからです。若いときに体験した、ワークキャンプの動の部分と、礼拝や黙想、ふりかえりといった静の部分、組み合わせられて、青年時代の私にとっては単にワークをただだけでなく、先輩たちの生き方、考え方を見せられ、自分の生き方、あり方を試行錯誤しつつ深めた場だったと思うからです。

<教会で>

バリ・プロテスタント教会の日曜礼拝には一度しか参加できませんでしたが、バリ・ヒンズーの文化を取り入れた美しいレリーフやデザインにあふれたプリンビンサリ村の礼拝堂、そして、ガムラン、ジェゴク（太い竹製のガムラン。ガムランが金属音なのに対してジェゴクはより低音でふくよかな響きがある。バリ島全体のものではなくて、この地方独特のものでそうです。）などの楽器で演奏される音楽、ダンスも含めた「バリに根ざした」礼拝に感銘を受けました。日本のキリスト教が、いかに西洋のものをそのまま受け入れて、日本の文化を切りすててしまっているのかを考えさせられました。西洋文化のすばらしさはもちろん素敵だと思いますが、もっと日本、関西、大阪、なにわの文化に根ざしたキリスト教というものを工夫していても良いのだとつくづく感じました。礼拝堂の正面祭壇の奥には、小さな滝が作られていました。大きな礼拝堂に沢山の人が詰めかけ、人々の席はかなり暑かったのですが、

真正面で折っておられる牧師さんの後ろだけは、（そこは神さまの席なのかしら）涼やかな風が吹いているようでした。

銭湯にいけば、水風呂に必ず入るし、自宅でも、水浴びをよくするほうのわたしにとって、マンディ（水浴）の習慣は大好きなものひとつです。朝起床後、ワークの後、そして夕方や就寝前など、汗をかいたとき、暑いと思ったときは、迷わずマンディでしたが、バリの神さまは、礼拝中もマンディをしているのかしらなどと、一人夢想しておりました。

こうして書いてくると、学生が、緊張を感じたり、病気、体調不良で倒れているときにも、どちらかという、懐かしさを感じたり、楽しんでキャンプに参加していた自分があったことも事実です。

学生にもっと自分のアジアの経験を話してあげたらよかったのか。いや、バーチャルな世界に慣らされている彼らにとって自分で体験すること、少し厳しいかもしれないけれど晒される体験をすることもまたとても大事なのではと、葛藤を感じながらも、少し離れて、彼らを見守っていたようにも思います。もし、わたしの行動が冷たく感じられたとしたら、どうぞ赦してください。

<そして、これから>

30回という経験を積み重ねてきた国際ワークキャンプ。その厚み、すごさを感じたのは、キャンプの様々な場面や30周年の記念行事においてはもちろんのこと、いざという危機の時でした。体調不良者が続出したとき、危機管理行程表に基づいた情報収集、帰国の判断、しっかりとした帰国の手順作成、全員の健康診断の現地での実施など、必要な対策がとられ、全参加者を安全に帰国させることができました。スムーズにできた帰国の旅の影に多くの方の働きと支え、ノウハウの蓄積の成果があったことを忘れることはできません。本当にありがたうございました。また、帰国後も保護者の方に経緯をしっかりとお伝えする説明会、様々な医療チェックなど、30回の経験が随所で活かされたと思います。

今、学生たちは途中帰国の無念を晴らそうと、事後研修の傍ら、児童養護施設アスラマの子どもたちへ、感謝のプレゼント（学用品、アルバムなど）を送る計画をたてたり、活動報告書作り、写真展の企画、また来年の再訪を願ったりしています。事前研修、キャンプの実施、事後研修も含めると、4単位という時間枠を大きく上回る学習です。さらに、机上の学びだけでない活動、体験を通しての学びは、参加学生の心に響くものであり、「国際ワークキャンプは貴重な人生経験」と言わしめるものになっています。

更に言うならば、国際（インターナショナル）ワークキャンプは、国と国との境を乗り越えてのワークというネーミングですが、学生の動きを見ていると、それをはるかに上回る民際（インターピープル）キャンプ、人と人との間のキャンプと捉えられます。ワークキャンプでありつつ、豊かなヒューマン・リレーションズキャンプなのです。また、同時に自己の成長のための自己啓発キャンプ、アジア体験キャンプ、異文化交流キャンプなどの要素もあり、それらが統合された「総合キャンプ」としてのこのキャンプの意義をさらにこれから深めることができばうれしいと思っています。そのとき、プリンビンサリ村に吹く風はますます心地よく、桃山学院の学生たちへと流れてくることでしょう。

「あなたに与えられている神の賜物を、再び燃えたたせるように勧めます。神は、おくびょうの霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊をわたしたちにくださったのです。」

（テモテへの第2の手紙1章6～7節）

沈黙の美学

社会学部 長崎 励朗



IWCに帯同する教員にとって最大の娯楽の1つは、疑いなく学生たちを観察することである。ワークキャンプの目的地は、発展途上国とされるインドネシアのバリ島。それも中心部のデンパサールから車で4、5時間かかる山奥の村、プリンビンサリである。そんな場所で2週間以上も同じメンバーで過ごしていれば、自ずと人間関係の軋轢も生じてくるし、よそ行きの自分を演じている学生はそれが維持できなくなっていく。引率教員の私から見れば、その有様が時に滑稽に、時に興味深く、そして時には愛おしく思えてくるのだ。

たとえば、当然のことながらやる気を表面にみなぎらせた学生は目立つ。だからその弱点もすぐ目につく。自分の体力や能力の限界を把握していない学生、頑張りすぎて空回りする学生、他人から評価されることを求めすぎる学生。それぞれに未熟さを抱えて参加していることが分かる。その一方、自分のすべきことを文句ひとつ言わず、黙々とこなす学生は目立たない。教員間で情報を交換する際にもほとんど話題に上らない。しかし、何かトラブルが起きた時、最も頼れるのはそうした学生たちであることに、引率者はみんな薄々気付いていたし、学生たち自身もお互いに対するそうした理解を徐々に深めていったように思う。バリに赴いた20人強はお互いのことを手探りで理解しながら、小さな社会を形成していったのである。

そんな中で、私が最も感銘を受けたのはインドネシア人学生たちのコミュニケーション能力であり、優しさだった。そのエピソードをここに書き留めておきたい。

ある時から、1人で過ごすことが多くなった日本人学生がいた。その学生が孤立していったのは、周囲のせいでもあり、本人のせいでもあった。さほど大きないざこざがあったわけでもなく、意識的に遠ざけられていたというわけでもなく、いつの間にか1人になっていた。ひょっとすると、本人も人間関係の濃密さに疲れ、半ば孤立を望んでいたかもしれない。

微妙な位置を占めることになったその学生をしかし、インドネシア人学生たちは放っておかなかった。と言っても無理に話しかけるわけでもなく、他の学生の中に強引に連れ出すわけでもない。彼らがその学生にしたことは1つだけ。ただ横にいるということだった。もちろん、言語がほとんど通じないことがそうさせたという可能性もある。しかし、帰国が早まり、急遽用意された宿泊施設のプールで他の学生たちがはしゃいでいる中、彼らは入れ替わり立ち代わり、その学生の横にただ座るという行為を黙々と、そしてさりげなく続けていた。昨今「コミュニケーション能力」と言われているものとは対極に位置する、「沈黙」という優しいコミュニケーションがそこにはあった。

田舎は人間関係が密だとよく言われる。あるいは都市化が進むことで人間関係が希薄化する、とも。都市部で育った私は従来、このことを都会人の「距離の取り方」のうまさとして捉えてきた。人間関係が密な空間などまっぴらごめんである。お互いにサッと集まっては何か仕事をしたり、娯楽を楽しんだりして、それ以外の時間は人間関係のしがらみに縛られない。そんな生活の方が良いに決まっている、と。しかしそうした人間関係の中に沈黙という積極的な選択肢はない。言葉の不在は単なる欠落であり、気まずいもの、コミュニケーションの失敗を意味するものとは捉えられないのだ。

実はこれこそ、都市化、近代化の爛熟期を迎えている我々が失ったものを雄弁に語ってはいないだろうか。少なくともインドネシア人学生たちの沈黙は絶妙の「距離」と「近さ」を生み出していた。相手のことを思っていることを伝えながらも、「話したくなければそれでもいいよ」と肯定する豊かな「沈黙」がそこには存在していたのである。

おそらく、インドネシア人学生たちのこうした行動に気付いた日本の学生も一定数いただろう。ただそれを不思議に思っただけの学生もいたかもしれない。それでも、日本にいて就活対策やキャリア教育の中で盛んに喧伝される「コミュニケーション能力」とは全く異なるコミュニケーション形態に触れたことは大きな財産になるはずである。

IWCは「沈黙の美学」とでも言えるものを幾人かの心に刻みつけ、幕を閉じた。少なくとも引率教員であった私は、そのうちの1人である。

インドネシアワークキャンプを終えて



財務課 前田 隆伸

今回のインドネシアワークキャンプ（以下：IWC）の帯同が決まったとき、不安ばかりだったことを思い出す。自身にとって初の海外、しかもインドネシア。文化や言葉が異なる国で、多数の参加学生たちをサポートすることができるのか。まず学生とはどのようなスタンスで接していこう。いや、そもそも海外旅行には何を持っていけばよいのか。こうして私にとってのIWCは始まった。

学生たちの事前研修には終わりがけに少し顔を出す程度、しかも数える程度であったため、事前研修期間において学生たちとの距離感をつかめずにいた。しかしそれも最初だけでいつの頃からか自然にコミュニケーションを取れるようになっていたように思う。他人を受け入れる姿勢、もとい参加学生の受容キャパシティの大きさは素晴らしいと感じた。

ワークの拠点はプリンビンサリ村のアスラマで、空港のあるデンパサールからは車で約4時間という場所にあり、決して近い距離ではない。インドネシアの交通事情は、主要道路が一本しかなく移動手段は車かバイクであるため、渋滞が日常茶飯事。しかも舗装状態も日本とは比較にならないほどよろしくない。また、気候も日本とは大きく異なっており、朝の8時頃には既に日差しは強く、木陰に入ればそよ風は吹いているものの、昼を過ぎる頃には少し動いただけで汗が噴き出してくるような気温である。

学生たちは慣れない土地での気候に食べ慣れないご飯、連日の長距離移動で体力的にも精神的にも負荷がかかっていたと思う。そのような状況にあっても自分のできることを精一杯こなし、それ以上のことをやってのけようという気概を持ちあわせていたのなら、今後困難なことに直面してもきっと立ち向かえると思う。なお、IWCをバックアップしてくださったインドネシアの現地スタッフの方々からも、今年の学生さんたちはとても積極的で素晴らしい行動力だ、との評価をいただいた。

文化や言語の違いを抵抗なく受け入れ、協力して活動している姿は、さすがは自ら参加を決めた学生たちだと感心させられた。彼らの積極的な姿勢とよいものを作り上げようという想いは、接する時間がわずかだった私にも十分に伝わってきたし、現地でのワーク活動やアスラマの子どもたちとの交流、プログラム実施のための打ち合わせなど、いずれもその端々に意欲を見て取ることができた。異なる環境で成長してきた人間が20人も集まって何も無いわけがない。何かひとつのことを決めるために、ときには衝突し、多くの紆余曲折と検討を経たことだろう。そういった経験を早い段階からできるということは大変羨ましくもあり、そうして作り上げたものや、その過程で得たものは一生の財産だと思う。

さて、皆さんには今一度IWCの意義を思い返してほしい。石と砂を運んで塀を作る、現地の子どもたちと交流を深める、それが今回のワーク内容ではあるものの、根本にある本来の目的はなにか。きっと人によって答えはまちまちだろうが、それはそれでよいと思う。諸先輩方の活動の蓄積が今にあり、アスラマの環境は徐々に整ってきている。そのような状況において自分は何を思い、何ができたかを振

り返り、これから何ができるかを考えるきっかけにしてほしい。そうして感じたことや反省を次の世代に引き継いでほしい。

早期帰国という結果はとても残念で悔しいことだと思う。30周年という記念すべき節目の年でもあったから尚更ではないだろうか。ただ、IWCに限った話ではなく、想定外というものは常に付きまとう。後悔しないためにもその日できることを精一杯取り組んでほしい。今回のIWCが参加学生の皆さんにとって、自分を取り巻く環境をはじめ、世界に目を向けて考えるよい機会のひとつとなることを願っている。

参加学生の皆さんに願っておきながら、これは私自身にとっても同じことだ。インドネシアでの一日は長いようで短く、あつという間の出来事で、あらためて自分の無力さを感じさせられた。高度な教育を受けることができなければ貧困から抜け出すことは難しい。だが私がアスラマでできたことといえば、石と砂を運んだだけ。大変な思いをしてようやく高さ1メートルの堀が数メートル出来上がるかどうかといったところであり、それが教育環境を整えることにどれほどの一助となるのか。ただ、今回の作業はどの作業一つとっても決して一人ではできないことは間違いない。結局自分は周囲の多くの人に生かされているということを感じずにはいられなかった。

現地でのご飯や風土は個人的にとってもあっていた。ナシゴレン・ミーゴレン・パピグリンに舌鼓を打ち、バリコーヒーを飲み、現地の子どもたちと交流を深めた。子どもたちは人懐っこく、言語や国の違いなどというものは些細なことだと感じさせられた。日本と比べると至極不便で物足りなさを感じてもおかしくないような環境だったが、不思議と心は満たされていた。私にとってインドネシアはモノの豊かさだけがすべてではないことを気づかせてくれる場所でもあった。

当初感じていた不安など、今となってはなぜ不安だったかを忘れてしまうくらい、素晴らしくかけがえのない体験をさせていただいた。このIWCに関わってこられたすべての方々、本ワークキャンプを支えてくださった方々、本当にお世話になりありがとうございました。そして第30回IWCメンバー、お疲れ様でした。貴重な時間を共にすごせたことを大変嬉しく思っています。そして皆さんのこれからの期待しています。

第31回IWCに参加する学生へのメッセージ

①語学力

海外での研修のため多少の語学力が必要。インドネシア学生は英語が話せるが、ホストファミリーや子どもたちとはインドネシア語での会話になるので、事前研修のインドネシア語講座をしっかりと受け、自分で復習をしておくこと。

②興味を持つ

インドネシア国際ワークキャンプは色々なことを学ぶことができる。例えばインドネシアでの生活や文化、自然環境、政治状況、アスラマの子どもたちの入所の経緯、話を聞くだけでなく自分自身で多くのことを経験してほしい。文化の違いで驚くこともあるかもしれないが、受け入れる姿勢を忘れないでほしい。

③良いチームにする

現地での活動は3週間だが、IWCの活動は春から冬までありとても長い間共に活動することになる。同じ目的に向かって頑張る仲間同士がプログラムをしていく中で声を掛け合い、協力し楽しみながらチームで一丸となって一生懸命活動してほしい。

④積極的に関わる

インドネシアの学生や、ホストファミリー、アスラマの子どもたち、現地の人々と積極的にコミュニケーションを取ろう。英語やインドネシア語を上手く話せなくても、ジェスチャーや辞書を使うなど、自分の思ったことや考えを伝えようとする気持ちを持とう。一生懸命に伝えようとするれば、相手も理解しようとして一生懸命話を聞いてくれる。

⑤責任感を持つ

隊長、班長だけでなく、メンバー全員がIWCに選ばれたメンバーとして責任感を持って活動をしよう。メンバーや引率の先生との報告や連絡だけでなく、現地で一緒に活動するインドネシアの学生とも事前に連絡を取り、意見交換をしておこう。

⑥体調管理

インドネシアでは日中はとても暑い、夜になると少し肌寒くなる。日々の活動や、慣れない海外生活で疲れが出て、体調を崩す可能性があるため常備薬を持参することをおすすめする。また、体調が悪くなった時は無理をせず早めに休むこと。生モノや生水、水道水は口にしないこと。

IWCでは本当にたくさんを経験することができる。わからないことがあればIWCの先輩に積極的にたずねてほしい。目標を持ってメンバー全員で一生懸命取り組み成功させてほしい。

IWC30実施プログラム一覧

日 時		日 程 表
8/24 水	8:30	関空4F国際線出発フロアに集合
	11:00	GA883便にて出国（所要時間6時間45分 時差-1時間）
	16:45	デンバサル空港到着
	17:05	入国手続き
	18:00	ホテル着
	19:00	オリエンテーション・ミーティング （夕食、インドネシア学生と合同オリエンテーション・ミーティング）
	22:00	就寝
8/25 木	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:00	日本・インドネシア学生 ホテルを出発
	10:00	一部引率スタッフ日本領事館、バリ日本人会訪問等
	12:30	プリンピンサリ到着、昼食
	13:30	グループワーク（各グループごとの準備グループワーク）
	16:00	ホームステイ先へ
	18:00	夕食
	18:30	グループワーク
	19:30	帰宅 就寝
8/26 金	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:30	ボランティアワークオリエンテーション（入村式・定礎式）
	9:00	ボランティアワーク
	12:30	昼食
	13:00	歴史・文化体験（実施30回記念式典準備・実施（第30回IWC記念式典））
	17:30	記念祝賀会
	20:00	帰宅 就寝
8/27 土	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:00	ボランティアワーク
	8:30	カレー・白玉団子の材料の買出し
	12:30	昼食・休憩
	13:30	グループワーク
	18:00	夕食
	19:00	日本文化紹介、インドネシア文化の学び（交流会 学生と子どもたち）
	21:30	帰宅、就寝

日 時		日 程 表
8/28 日	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:00	歴史・文化体験
	12:30	昼食
	13:00	日本食準備
	17:00	日本食 食事会
	19:00	グループワーク（高校での日本語プロジェクト準備）
	20:30	帰宅、就寝
8/29 月	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:00	日本語プロジェクト（ムラヤ公立高校訪問）
	12:00	昼食・休憩
	13:30	ボランティアワーク
	18:00	夕食
	19:00	振り返り・グループワーク（絵日記作成、ふりかえり）
	20:00	帰宅、就寝
8/30 火	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:00	休養
	12:00	昼食・昼休み
	12:30	休憩
	15:00	
	16:30	自由・子どもとの交流
	18:00	夕食
	19:00	自由時間
	20:00	帰宅・就寝
8/31 水	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:00	ボランティアワーク
	13:30	昼食（途中帰国決定）
	14:30	ワーク&子どもたちとの交流
	18:00	夕食
	19:00	お別れ会
	21:00	帰宅、就寝

日 時		日 程 表
9/1 木	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:00	デンバサールへ出発
	12:00	ホテル着、昼食・昼休み
	14:30	ふりかえりⅠ、ペアで日程表作成
	18:00	夕食
	19:00	
	20:00	帰宅・就寝
9/2 金	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:00	ふりかえりⅡ
	8:30	
	12:30	昼食・休憩
	14:30	ふりかえり
	18:00	夕食
	19:00	
20:00	帰宅、就寝	
9/3 土	7:00	朝の集い
	7:15	朝食
	8:30	ショッピングモールへ
	12:30	
	15:00	歴史・文化体験（タナロット寺院）
	18:00	
	19:00	夕食
	20:00	
9/4 日	7:00	帰国

IWC30 Member Introduction



Garuda (神鳥)

南秀樹
キャンプ長
リーダー
しおり班

インドネシアはノーブランで応募したとは一言わん。でも毎日履いてるしょぶパンツで夜空に放つホームラン…ってこんな感じでくだらんこと考え、ノリノリで日々を楽しんでる南秀樹です！焼肉が大好きです！

高岡玲矢
日本食班

大型ニシキヘビから毒ガエル、極彩色の凶暴ヤモリからオオトカゲまで、いろんな動物をペットにしてまーす。爬虫類、両生類、魚類のことならお任せあれ！

山本陽奈
日本語班

のんびりきままでよく甲子園のKFCに出没する私。そして、鳥国から未だに出たことがない私。

河本寧
交流班

光太郎君よりフレンドリーで哲平くんよりもハイになれる「ねい」です！テンションは時間帯で大きく変動します！朝はどつかないで下さい！キレます！

小泉涼
しおり班

洋楽とともに19年。人生に3～4分間の幸福を提供します！pop music, country musicが好きです。アメリカのカントリーな道をオープンカーで走っているのを想像しながら聞くのが私のお気に入り。興味のある方は是非。

アステイ

日本語が上手で頑張り屋のインドネシア美人さん！ドラえもとキティちゃんが大好き！

スシラン

とっても力持ちで男らしい:)！写真はプロのように上手い！



Senyum (えがお)

植田哲平
リーダー
交流班

光太郎より人懐っこくて寧より女の子に優しい、で覚えて下さい。根暗なんでテンション上がってる時は無理してます。温かく見守っていて下さい。ちなみに今も無理しています。

吉木美友
日本語班

スイーツ、焼肉、お寿司が大好きで、特にプリンを食べるとテンション上がります。あと、トイストーリーと韓国が大好きでハリドリに乗ると泣きます。笑

平野将太
交流班

福岡生まれの九州男児 平野 将太です。みたらし団子大好きです。しみしょうじゃないです。ひらしょうです。

木村純奈
日本食班

木村純奈です。じゅんちゃんって呼ばれると喜ぶけんがいに呼んで下さい:) 太陽が好きで太陽を浴びたらむつごくらい元気になります。Take it easyでつらいことがあってもkeep my hand upでボランティア、わや頑張ります。子どもたちの笑顔がじゅんなくらい見られますように…以上讃岐弁でした。

河野満ちる
しおり班

未だにピーマン食べれません。不器用ですがいつも明るくニコリスマイル! 関西育ちのお笑い大好き! ちるちる河野満ちる

ハンナ

面白くて優しい女の子beng bengのチョコレートが大好き

デイリ

とてもフレンドリーでお茶目な元気っこ! 笑顔がかわいい~



Matahari (太陽)

前平朱理
リーダー
日本食班

やきとり大好きまえひらです。インドネシアではサテアヤムを食べたいです。

井方優花
日本語班

コントラバスとベースをジャンジャン弾きます。見た目は高校生、中身は男よりも男の子。

井上愛琴
交流班

とっても自由ですが、ちょっとガサツ。京都出身はんなり女子岐阜弁話します！

五十殿詩織
日本食班

食えることが大好きです！人見知りやけどいっぱい喋れるように頑張ります！

森山紗希
しおり班

遊びに本気の写真に本気の完全アウトドア派の人間です！思い出をいっぱい写真に収めて帰っていきたいです♪

アンドリー

日本語超上手い！インドネシア人だけど心は日本人?! (笑)
ダイビングが大好き



Dandelion (たんぽぽ)

藤崎優華
リーダー
日本語班

洋楽が好きでよく音楽を聞く私。でも、あまり英語が話せない私。
一年生だけど班長頑張る！楽しんでいこう！

大隣光太郎
日本語班

植田哲平よりもポジティブで河本寧よりも聞き取りやすい声です！
シャイで恥ずかしがり屋です！冗談を言い合ったり、意味のない
会話を延々するのが好きです！

松並翔太
交流班

和歌山の田舎に住んでるラーメン大好き、遊ぶの大好き、服大好き
きな20歳のガキンチョです笑

市村ひろみ
日本食

名古屋から来た味噌好き！サラダ、ごはん、おでん、カツにも味
噌かけて食べちゃいます！子どもが大好き！ひろみちことひろみ
です！

小出葉奈
しおり班

国民的アイドル。かんちゃんワールドへようこそ！人見知りなの
であまり喋らないけど、喋って見たら、みんなメロメロだぞ！笑
顔でいればなんとかなると思ってます。

デオ

日本語&大阪弁を勉強中！！子どもたちと裸足でサッカーやっちゃ
うよ☆

事前研修

選考に受かってから3ヶ月間、毎週金曜の5限目に事前研修をしました。最初はみんな緊張がちがち。仲良くなれるかとっても不安でした。しかし、私たちは顔を合わせるたびに仲良くなり次第に全体の雰囲気が良くなっていきました。

事前研修では、インドネシア語の授業や歌の練習、インドネシアの現状について学びました。一人ひとりが内容を理解しながら、メモを取るなど、積極的に真剣に取り組んでいました。特に事前研修で学んだインドネシア語は、実際にホームステイ先や子どもたちとの会話でも使うことができ、本当に役に立ち、会話ができたことが嬉しかったです。その他にも各担当に分かれ、授業内だけでなく、空き時間を見つけては、日本語授業の準備や交流会の準備に取り組みました。

毎週の前研修のおかげで準備も順調に進み、日が近づくにつれて意識が高まっていきました。出発の時には最初の緊張した雰囲気が一切なく、みんなが仲良くなることができたのでよかったです。



合宿

私たちは8月4日と5日に事前研修として合宿を行いました。学校の合宿所に1泊2日で泊まりました。

初めに、日本語授業準備のため模擬授業を行いました。実際にインドネシアの小学校、中学校、高校で行うのと同じ様にしました。生徒同士で見合ったり、先生に見てもらったりもしました。時間が決まっているから時間通りに授業を進めていかなければならないし、言葉もあまり通じないので、いろんなことを考えなければなりませんでした。しっかりできるまでしました。そして実際現地では、想像以上に盛り上がり大成功でした。

ダンスの練習もしました。みんなで合わせるが大変でした。なかなかそろわなくて、何回も何回もしました。回数を重ねていくうちにそれぞれも覚えていき、揃ってくるようになりました。

晩御飯はみんなでカレーと白玉団子を作りました。現地の人にも振舞うからです。そのとき作ったのは、インドネシアで作る10分の1くらいの量だったけれど無事時間内に作ることができました。白玉団子はどの味にするか、試作品を味わいながら多数決をとり、あんこときなこに決定しました。カレーも白玉団子もおいしく作ることができました。

合宿に行き、もうすぐだなという実感がますます湧いてきました。不安ももちろんありましたが、その一方で楽しみもいっぱいでした。



募金活動

活動目的 アスラマの子ども達のために使ってもらうこと
活動期間 7月15日から7月22日
活動場所 チャペル前、食堂、噴水前など
活動時間 昼休み12:30から13:20
活動人数 20名

約一週間をかけてIWC生たちは募金活動を行った。情報の行き違いが起こり気分を害する事もあったが、声の掛け合いによりこれだけの金額を集める事ができた。アスラマの子どもたちのために、我々の動いた証が、有益に使われることを願ってやまない。

日付	金額(¥)
7月15日	12,525
7月18日	7,346
7月19日	18,153
7月20日	8,542
7月21日	5,237
7月22日	13,197

合計金額 ¥65,000

たくさんのご協力ありがとうございました。



入村式・定礎式

入村式はワーク隊がプリンビンサリ村に到着した翌朝に行なわれました。教会の牧師さんの歓迎のことば、IWCのキャンプ長南君の決意表明、代表者の挨拶を含め、今年もプリンビンサリ村でワークキャンプが行われることをお互いに感謝し、私たちは健闘を誓いました。その後、ワークで作る石垣の定礎式を行い、代表者数名が土台となる石を持ち、自分の意気込みやワークが無事行われるようにという、それぞれの気持ちを述べ、コンクリートの上に石をおきました。



プリンビンサリ村

私たちが18日間活動し、過ごす予定だったプリンビンサリ村。自然が多く空気や星が綺麗で、道端では鶏や犬が昼寝をしていました。また、ホストファミリーや、村の人たちもとても優しく笑顔で接してくれ、村の雰囲気も非常にのどかな村でした。村の真ん中には私たちが訪れた、バリ・プロテスタント教会の大きな礼拝堂があり、村の人たちは毎週日曜日にここで礼拝をしています。

普段、私たちの暮らしている日本では常に時間に追われている人が多いように感じます。それに比べ、プリンビンサリ村の人たちはお金はないかもしれないけれど、それぞれの時間を笑顔で過ごし、豊かな生活を送り、すごく幸せそうに毎日を過ごしているように感じました。日本にあってプリンビンサリ村にないものもあるけれど、プリンビンサリ村にあって日本にない大切なものもたくさんあると実際に現地に行って感じられました。

第30回のメンバーがプリンビンサリ村で過ごせた時間は少しでしたが、この村で楽しいことや悲しいことなど色々な経験ができました。何より、村の人たちは本当に笑顔で温かく、自然がたっぷり、とても過ごしやすい村でした。



アスラマについて

【アスラマとは】

「アスラマ」（「寮」という意味）は、インドネシアにある児童養護施設です。貧しい子ども、両親のいない子、虐待を受けた子など、この施設で共に生活している。貧しい子どもとは、一日三回の食事が出来ないほど厳しい生活環境の子たちのことです。

バリ・プロテスタント教会が設立し運営しているウィディア・アシ財団がアスラマを運営しています。私たちが活動を行った場所は、プリンビンサリ村の第2アスラマです。この施設は1975年に建てられ、1987年から始まったIWCの活動の拠点となり続けています。

【アスラマの歴史】

アスラマの施設には、長い歴史がある。アスラマの施設が出来る前の現地では、日々の食事が与えられない貧しい子どもや教育を受けることができない子どもがたくさんいました。当時は身分制度である「カースト制度」が強く、カーストの高い身分の人しか教育を受けることができない状況でした。身分が低い子どもたちは、教育を受けることができずに、家で手伝いをするしかなかったようです。

この悲惨な状況に対してアメリカから帰国してきたワヤン・マストラ主教はこの状況を改善するためには「教育」が必要だと考えました。彼がリーダーシップをとって、バリ・プロテスタント教会が発展していき、今のアスラマの施設が出来上がったそうです。

【アスラマのMISSION】

- ① 子どもたちにとって施設が平和できれいな環境（落ち着いた環境で遊び、勉強できる空間）であること。
- ② 子どもたちにとって栄養ある食事を用意する。
- ③ 子どもたちに、年齢にあった教育を受けさせる。
- ④ 子どもたちが1人立ちできるように、技能などを身に付けさせる。
- ⑤ 子どもたちの健康を管理する。



ホール。
ここでご飯を食べたり、
交流会を行います。



子どもたちの部屋。



野菜を育てています。
この時は、
茄子が育っていました。



グラウンド。
バスケットコートもあります。
子どもたちは、
サッカーが大好きです。

アスラマの子どもたち

アスラマの子どもたちは最初から人懐こく私たちが近づいていくと、笑顔で挨拶をしてくれたりハグをしてきてくれました。絵やプレスレットや手紙をプレゼントしてくれ、写真を撮ろうとするとたくさん集まってきて皆で写真を撮ったりしました。

私たちは、あまりインドネシア語ができなかったけれど、子どもたちが教えてくれ毎日インドネシア語を勉強することができました。私がカルチャーショックを受けてしまったときも、子どもたちはずっと手を握ってくれたり「笑顔でいてね」と励ましてくれ、心の優しい子たちがたくさんいるということが私の心に残っています。きらきら光る笑顔のあふれる子どもたちでした。



ホストファミリー

私たちは7日間、プリンピンサリ村のホストファミリーの家でホームステイをさせていただきました。イブ（お母さん）とババ（お父さん）は、ホストファミリーの家に着いた私たちを笑顔で迎えてくれました。私たちは日本のお土産を渡し、イブやババと会話をして交流を深めました。日本食パーティーでは、ホストファミリーをアスラマに招待して、一緒に私たちが用意したカレーライスと白玉団子を食べました。イブもババも、「とても美味しい」と言ってくれました。特にイブは、カレーライスも白玉団子もおかわりしてくれたので、とても嬉しかったです。イブやババはとても優しく、私たちにインドネシア語を教えてくれたり、毎朝起きるとキャッサバを使った料理やピサングレンを用意してくれました。アスラマでも朝食はあるけれど、イブの準備してくれた料理をついつい食べ過ぎてしまうくらい美味しかったです。7日間という短い期間だったけれど、数え切れないくらい楽しい思い出があり、本当に感謝でいっぱいでした。



第30回IWC記念祝賀会

8月26日に記念祝賀会をしました。青銅製の楽器や竹製の楽器で私達を歓迎してくれました。インドネシア楽器の独特な音色がアスラマ全体に響き渡っていました。子供達が歌を歌ってくれたり、インドネシアの伝統である舞踊を披露してくれました。その後、ご飯の時間になり、豚の丸焼きや揚げ物が豪華に置いてありました。やはり香辛料の辛さと日本とは違う味付けに驚きました。左手にスプーンを持ち、右手にフォークを持って食べました。子供達は左手にフォークを持ち、右手は素手で食べている姿を見て、文化の違いを肌で感じました。豚の皮の揚げ物は、毛が生えていると言われ、驚きもありましたが、美味しくいただきました。とても貴重な経験ができました。



交流会

交流会は、現地アスラマの子どもたちによる出し物、IWCメンバーの歌の披露、男子女子それぞれでダンスの披露、「ダルマさんが転んだ」・「メオンメオンゲーム（尻尾取り）」のプログラムを行いました。

歌

「世界に一つだけの花」と「ハリ・イニ（「この日は主がつくられた」）」を歌った。何を歌うか日本で話し合った時、日本で今流行している歌を選ぶようにしました。練習時間が少なくても本番でしっかりとした発表が出来ました。

男子ダンス

男子メンバー全員で、RADIO FISHの「PERFECT HUMAN」を披露しました。事前研修や合宿の段階では、現地の方に受け入れてもらえるか、楽しんでもらえるか不安でしたが、想像以上の盛り上がりで子どもたちがあとからマネをしてくれるぐらいでした。

女子ダンス

女子メンバー全員でグッキーの「GOOD LUCKY!!!!」を披露しました。合宿のときはメンバー全員揃っての練習が出来ず不安もありましたが、当日の直前練習でしっかり練習することができました。体調が悪く参加できなかった生徒もいましたが全員で協力し、その穴を埋めることができました。

曲が同じフレーズを繰り返すのでその繰り返しフレーズを子どもたちに覚えてもらい一緒に歌ってもらいました。本番で成功してよかったです。

だるまさんが転んだ

だるまさんが転んだは、本当はやるはずでは無かったのですが、これは盛り上がるだろうというその現場の判断でやることになりました。不安は大きかったのですが、結果は時間いっぱいまで子どもたちも楽しんでくれて、終わるのが惜しいほどのもりあがりでした！！！！！！

メオンメオンゲーム（尻尾取り）

これはインドネシアの伝統のゲームとして、インドネシアの人と一緒に楽しめるかと第29回の方から教えてもらったゲームです。あとは当日みんなが楽しめるかが不安でした。当日やってみると学生もアスラマの子どもたちも、追いかけたり追いかけられたり、みんな一緒に楽しむことが出来ました！！！！！！子どもたちのすばしっこさには、大学生もついていけないほどでした。

よかった点

昨年度の交流会が反省点が多いものであったと第29回の方から聞いており、その原因として現地スタッフ、メンバー間での情報共有ができなかった点、準備不足などが挙げられていました。

今年度は、事前準備の段階での話し合い、現地についての通訳してくれるインドネシア学生や現地スタッフとの情報共有がかなりしっかりとできていたため、スムーズに交流会を進行することができた。

結果として見ても、みんな大盛り上がりで、満足のいく交流会となりました！

悪かった点

チャブレンや引率の先生が、アスラマの方たちのプログラムを把握してくれているものと思い込んでしまい、前日に何も知らないと言われて、そこから現地の方にどんな出し物をするか聞いてタイムスケジュールを作ることになり、バタバタしてしまいました。

頼るだけではなく、自分たちで考えて行動する意識を持つことが大事だと感じました。

IWC31thへ

スタッフ間での情報共有、当日の予定通りにいかない場合に柔軟に対応する準備をしっかりと、どうやったら現地の人に楽しんでもらえるか考えて行動することが大事です。



日本食

アスラマの子どもたちやホストファミリーの皆さんたちと親交を深めるために日本食（カレー、白玉団子）を私たちが準備して食べていただきました。材料の買出しは前日に高岡、前平、アンドリ、フォルマンさん、イブの5人と子どもが1人ついてきてくれました。なお、カレーのルーと白玉団子の材料は日本から持っていきました。包丁とおたまはアスラマにある分では足りなかったのですが、包丁を10本とおたまを3個買い足しました。

《材料》

- ・ カレー
- 豚肉20kg
- ジャガイモ50個
- 玉葱50個
- 人参30本
- カレールー（日本から）
- ごはんは、食堂でたいていただきました
- ・ 白玉団子（すべて日本から）
- 白玉粉1.6kg
- きな粉400g
- あんこ800g

《感想》

材料を切るのは包丁の数も多くとてもスムーズに進みました。材料ごとに切るグループの役割分担を決めておいてよかったと思います。豚肉は大きいかたまり（ブロック）のままです。切るときは大きな包丁のほうがやりやすいです。カレーを混ぜるときは少数のメンバーが長時間やっていて手余りが出たのもう少し交代でやってもよかったと思います。後片付けが不十分でイブに迷惑をかけたところは改善しなければならないと思いました。カレーも白玉団子も好評だったので満足のいく日本食パーティーになったと思います。



日本語班

日本語班は、実際に現地に行く前にどのようなゲームや日本語の授業を行うかを考案し、資料や必要な物品の作成に取り掛かりました。日本語の授業で使う物品として、あいうえお表、感情・日常動作のことばの表を作成しました。また、小学生に向けた衛生指導のために、手洗いを説明するための紙芝居を作成しました。日本語の授業と同時に行われるゲームは、4択ゲームや、ジェスチャーゲームの内容を各担当が考え作成しました。そのほかには、ボール紙を使い名札の作成を行いました。

アスラマから車で30分くらい離れた高校へ行きました。最初に校長先生が話をしてくれました。そしてみんな高校2年生と3年生のクラスに分かれて日本語を教えに行きました。私のグループは高校三年生の外国語クラスでした。みんなはすでに「あいうえお」表をマスターしていて自己紹介も日本語で出来るレベルでした。みんなとても上手でした。最初はとても緊張していましたがみんながとても楽しそうに授業を受けてくれたおかげでこのプログラムを成功することができました。本当に良い経験ができました。



ワーク内容

私たち、第30回のメンバーが行ったワーク内容は、アスラマの遊び場の部分と畑を隔てる長い石垣を作るための砂、石を運ぶことでした。私たちは、バケツに砂を入れる係、石を下から上に置く係、そしてそれらを運ぶ係で役割を分担しました。砂は、効率をよくするためにバケツと、一輪車を1台使って運び、石は重たい石は目的地まで少し距離があるので、中継ポイントで交代し、細かい石はもう1台の一輪車を使って運搬しました。ワークは日中に行うため日差しが強く、熱中症予防のため30分作業、10分休憩というインターバルでワークを進めました。

ワーク開始のときは皆、楽しそうに取り組んでいたけれど、だんだん疲労が見え始め、作業になれ始めた後半には皆、黙々と作業をしていました。休憩にはアスラマスタッフの方たちが冷たいジュースやお菓子を出してくれました。これらのおかげで皆、元気を回復し、ワークを継続できたと思います。また、学校から帰ってきた子どもたちもワークに参加してくれ石や砂を一緒に運んでくれたこともワークを頑張ることが出来た理由の一つです。

このワークでチームが一つになり、皆で支えあい作業したことによって「チームワークの素晴らしさ」を学びました。疲れていそうな人には声をかけて、ムリをしている人には手を貸すなど、様々な事を学んだと思います。しかし、皆がワークで心残りだったのは、途中帰国でワークが中途半端になってしまい完成を見ることが出来なかった事です。仕方のないことですが私たちはとても残念に思っています。これからのインドネシアワークキャンプでは、途中帰国がなくワークもしっかり完成させてやりきったという気持ちで帰国してほしいです。私たちは、今後のワークでアスラマの子どもたちがより快適に、より清潔な環境で暮らせるような施設が完成できることを心から願います。



離村式（フェアウェルパーティー）

8月31日

途中帰国の知らせを聞き、急遽この日に離村式が行われました。私たちIWC第30回のメンバーがプリンビンサリ村で生活し、ワークをして、子どもたちと過ごす日はこの日で最後になってしまいました。急遽行われた離村式でしたが、アスラマの方々、子どもたちのおかげで最高の離村式になりました。しかし、入院中のメンバーもいたためメンバー全員で離村式に参加することができなかったのが心残りでした。

式では、巖団長、スイクラマさんの言葉、子どもたちには伝統的な演奏、踊りの披露などがありました。子どもたちと関わった時間は短かったですが、時間以上の深い交流があり、演奏とダンスを見ながら涙を流すメンバーもいました。現地の伝統のダンスに日本人のメンバーが一人ずつ呼びだされ、向かいあって踊る「ダンス・バトル」とでも言えるようなダンス交流もありとても盛り上がりました。

式が終わった後も、最後の貴重な時間を笑顔で楽しく過ごそうと、子どもたちとたくさん話し、触れ合いました。最後の夜と感じさせないくらいの盛り上がりでした。しかし、終了の合図が出ると、さっきまでの盛り上がりはなくなり、悲しむたくさんのメンバーがおり、アスラマの子どもたちも涙を流しました。それぞれの家に戻る直前まで、メンバーたちは特に仲がよくなった子どもたちと最後の言葉を交わしました。

この日私たちは、たくさんの「ありがとう」を贈り、そして受け取りました。私たちは最後の最後アスラマの子どもたちに「Sampai jumpa lagi（またお会いしましょう）」ということばを心をこめて贈りプリンビンサリ村をあとにしました。



エヴァリュエーション

1. アスラマ

- ・施設の石の段差の角が危ない。
- ・料理は美味しいけれど衛生面に注意を払ってほしい。(現地の人も含めて全員)
- ・携帯を子どもたちに触らせないでと言われた。
- ・ハエや台所の衛生面が悪い。正露丸より整腸剤の方が必要。
- ・子どもたちが可愛い。みんなたくさん子どもたちと積極的に関われた。すぐに仲良くなれた。

2. ワーク

- ・ほこりが凄いでマスクを持って行くことを勧める。
- ・作業前に分担を決めておいた方が良い。
- ・こまめに水分補給をすべき。
- ・休憩中に飲むのが水と謎のジュースだったのでスポーツ飲料の粉かスポーツ飲料を準備すべき。
- ・みんな一生懸命取り組んでいた。
- ・子どもたちが手伝ってくれたおかげで進むのが早かった。
- ・一輪車を使って作業をしたのがよかった。
- ・仕事内容や人数がよかった。
- ・休憩の時間がちょうど良いと思っている人もいたが体力のない人は休憩の時間が少ないと感じていた。
- ・空き時間が多かった。
- ・現地の写真を事前研修などでほとんど見てなくて現地についた時の驚きがよかった。

3. ホームステイ

- ・ハンガーをたくさん持っていくべき。
- ・服等を洗うバケツを持っていくべき。
- ・ホストファミリーの方々と交流をもっとすべき。(挨拶などでもいいから)
- ・言葉が通じなくても気持ちは繋がれた。
- ・あらかじめ決めたホームステイのメンバーが、あちら側の都合でいきなり変わって戸惑った。
- ・今まではアスラマから家に帰って体調を崩したりした場合ホストファミリーから施設に連絡してくれたようだが今回はなかった。なかったというよりも私たち自身もこのことについて知らなかったし、ホストファミリーとのコミュニケーション不足を感じた。
- ・持ち物は万が一のことを考えてたくさん予備を持っていくと良いと思う。(特に日本食)
- ・日本では経験できないようなことができた。(水浴びなど)
- ・ホストファミリーが優しくかった。手土産は喜ばれた。
- ・村の人が優しくて人柄がよかった。

4. その他

- ・暖かい上着が一枚あった方が良い。
- ・ダンスをする場合は合宿のときに念入りに準備する。
- ・夜のホテルではくれぐれも静かに。
- ・言葉が通じると楽しいのでインドネシア語はしっかり勉強すると良い。
- ・本当に運動している、していたなど体力があり精神的にも安定している人を募集する必要がある。
- ・集合写真をたくさん撮るべき。(アスラマの人もいれて色々な場所で)
- ・しおりに簡単なインドネシア語の単語が載っていると便利。
- ・事前研修内でもう少し日本語プログラムや交流プログラムなどの準備期間があれば合宿でもいろいろなことを詰めていけたと思う。
- ・Tシャツ班の頑張りのおかげでTシャツが良いものになった。
- ・インドネシア語の会話は挨拶などしか使えなかった。
- ・体調管理ができていなかった。
- ・遅刻が多かった。疲れが出て、寝過ごしたということもあるが周りが心配する。

第30回IWC 途中帰国

誰もが悔しい思いをした。

全員がいろんな想いがあった。

現地でしかわからないものがあった。

第31回にこの想いをさせたくない。

学生レポートをひとつでも読んでもらいたい。

第30回のメンバーは本当に優しい明るさと笑顔で一杯です。

ゴミ拾い

私たちが行った補完プログラムである大学周辺でのゴミ拾い活動では引率先生を含め4人～5人で行いました。一人一つずつゴミ袋とトングを使い、大学周辺を歩きながらゴミを拾い集めました。ゴミの8割はタバコの吸殻。残念な事に大学キャンパス内にも多くの吸殻を拾いました。私はもっと「ポイ捨て禁止」「ゴミはゴミ箱へ」というような立て札などを設置すれば少しはよくなるのではと思いました。大学内だけではなく地域にも設置をすれば良いのではと感じました。他にはタバコの吸殻用のゴミ箱を設置するとかポイ捨てできないような工夫が必要かと思いました。その他のゴミはペットボトル、カン、お菓子の袋などでした。「ゴミはゴミ箱へ」という基本的なことが出来ない人間がいると言う事に残念な気持ちになりました。もっと意識を持たないといけないと感じました。

この活動は地域に貢献でき、街もゴミの無いきれいな街になるし自分自身も気をつけなければならないと再確認できるいい機会だと思いました。



アスラマの子どもたちへの贈り物を作る

きっかけ

途中帰国し何日か経ったところに、もう少しアスラマの子ども達に何かできないかという声が上がりましたのがきっかけだ。

活動内容

話し合った結果、子ども達へ鉛筆、消しゴム、ノートといった文房具、日本のおもちゃとしておなじみのブンブンゴマやブーメランと、IWC1~30回の写真を載せたアルバムを送ることとなった。そのための準備と送料にかかる資金集めのために2回目の募金活動を昼休みに行った。文房具回収ボックスを作り、学内5ヶ所に設置しチラシを配り協力を呼びかけ寄付していただいた。募金いただいたお金で鉛筆やノートなどの文房具と、アルバム用の台紙を購入した。おもちゃのブンブンゴマやブーメランはみんなから集めた牛乳パックで、昼休みの時間を利用して作った。

アルバムは写真展に用いた写真を活用し、最後に表紙、裏表紙をデコレーションし、仕上げた。協力してくれた方や私たちの気持ちが、2つのダンボール箱に一杯になった。喜んでくれるかな？



文房具回収ボックスでたくさんの文房具が集まりました。



昼休みの時間を利用して玩具作り

募金活動

私たちIWC30回メンバーは事前研修でも募金活動をさせて頂いていました。しかし、帰国後私たちにまだアスラマの子どもたちに何かできることがあるのではないかと考え、もう一度募金活動をしようということになりました。今回の活動では事前研修のときより金額は集めることが難しかったとメンバーは痛感しました。厳しいかもしれませんが、日本はやはり恵まれ、その恵まれた環境に浸っているように感じました。本当の貧しさ、貧しい厳しさを知らない人が多いのだと思いました。自らそんな環境を作る必要はないですが、そういう国や人がいるという認識が薄いのだと感じます。正直、厳しい募金活動でした。



東光学園

11月12日土曜日、補完プログラムとして日本の児童養護施設東光学園を訪問しました。そこで施設長の大久保さんから東光学園の成り立ち、日本の児童養護施設の方針、現状のお話を聞かせて頂きました。社社会福祉法人 東光学園は、戦前に英国宣教師ジョージ・デンプセイが公娼制度の犠牲となった婦女子と乳幼児を救済した事業の取り組みから発展し、現在は児童養護施設『東光学園』と高齢者複合施設『ふれ愛の家』の2つの福祉事業を担っています。法人は、創設の精神であるキリスト教の“隣人愛”を土台に、その時代のニーズに応え、常に助けを必要とする人々に寄り添った最善の支援に努めています。

現在の児童養護施設は小規模化にし、子供たち1人1人と向き合い養育するようにはなくてはならないようです。また、子どもたちが心身ともに健やかに養育されるよう、より家庭に近い環境での養育の推進を図ることが必要です。しかし、社会的養護を必要とする児童の約9割が施設に入所している現状です。そのほか、従業員の人数が最低限なので休みが十分に取れないそうです。インドネシアでは貧困が児童養護施設に入る一番の理由でしたが、日本の児童養護施設に入ってくる子どもたちの多くの理由は親からの虐待が原因であると仰っていました。東光学園の子どもたちは私たちを見つけると笑顔で話しかけてくれました。世界には貧困やいろいろな事情で家族と一緒に暮らしたくても暮らせない人たちが沢山いるのにどうして大事な家族を傷つけるのだろうかと思いました。私たちはこのお話を聞いて少しでも多くの人にこの現状を知ってもらいたいです。それが今の自分たちに出来ることなのだと思います。



参加学生のレポート

IWCでの軌跡

経営学部 3回生 南 秀樹



私は、インドネシア・ワークキャンプに1人の学生としてリーダーとしてそして、重要なキャンプ長として参加できたことに本当に心から嬉しく思っています。実際に行くまでや行ってからでは様々な体験があり沢山の経験をする事ができました。私は、正直リーダーをすることなど全く考えていなく、ただ気楽に楽しく活動ができれば良いと思っていました。私はワークキャンプに対して特別な意味はなくただ夏休みを過ごすぐらいなら海外にも行けるし、何か経験ができれば良いと安易な気持ちでした。しかし、こんな私を変えたのは友達の存在でした。私は、大学生活を振り返ると様々な局面で沢山の友達から助けられてきました。大学三回生の三月まではサッカーをやっていたけれど、辞めることになり何も刺激のない、このままで良いのか考えたところ自分で率先してメンバーを引っ張り、ワークキャンプを素晴らしいものにしたいと、今の自分にはどれだけできるのかを試すチャンスであると考えました。自分がリーダーとして何かをすることは大学生活で一度もなく、そしてボランティアの経験もなく自分が今までにない経験をリーダーとして行動をしていくのはリスクがかなりあるものであると感じたけれど、刺激のない私の大学生活にとっても充実した貴重な経験ができると感じ、更に幸せなことであると思えば強い意欲をもちました。それから、私の考え方は自分自身からメンバーのことを考えるようになりました。その後、グループ決めを行いワー

クキャンプに向けて本格的に活動を行うようになりました。過密日程の中、募金活動を行い慣れない初めての経験にも関わらず積極的に取り組んでいたため目標予算額を上回ることができ、メンバーが力を合わせて一つになることができました。夏休みには、一泊二日の校内合宿があり、合宿では現地での取り組みを想定した事前練習を行いました。校内合宿を行うことでメンバーの一人一人がワークキャンプに対する気持ちや人間関係がよりよくなったと感じました。それぞれがグループの作業をきっちり終え、メンバー全員が元気に旅立つことができました。このとき私は、リーダーとしてメンバーが一人も欠けることなく無事にインドネシアに行けたことで一安心しました。デンパサールの空港に着きバスでホテルに向かいました。食事前に自己紹介があり、インドネシア学生を交えて食事をしました。私の席にはインドネシア学生が加わり楽しく会話ができるであろうと思っていました。しかし、私は、英語もインドネシア語もろくに話すことができなく、インドネシア学生には申し訳ない空気と気持ちにさせてしまいました。このとき、外国語ができることがいかに重要であるかということを感じました。食事の後、私は何も考えずいました。他のメンバーは、部屋に戻らないでインドネシア学生とのコミュニケーションをとり、少しでも距離が縮まるようにがんばっていました。私はリーダーでありもっとよく考え行動すべきだったと反省しました。翌朝にはホテルを出発し私たちが目的としていたプリンビンサリ村に向かいました。バスでの長時間移動でしたが、私は昨夜の反省を活かし少しでもコミュニケーションをとるため、席の横はインドネシア学生にしました。くじけず少しでも自分はそのような人間であり、インドネシア学生はどのような人間であるのかを把握できるようにコミュニケーションをとり続けました。その結果、一人のインドネシア学生と仲良くなることができました。言葉が通じなくても何らかの形で分かり合え

ると学びました。長時間のバスの移動で自分を含めメンバーの体力と精神状態はかなり疲れを感じました。しかし、プリンビンサリ村に着き、アスラマに着くと子どもたちが迎えてくれていて、何か元気をもらい癒されました。初めのうちは少し戸惑った感じはありましたが、純粋で素直で無邪気な子どもたちのおかげですぐに仲良くなることができました。みんなが笑顔になり、そのときのメンバーの顔は今でも覚えています。子どもたちがそれぞれのホームステイ先に案内してくれました。ホームステイ先につくとホストファミリーが笑顔で温かく出迎えてくれました。このときも、言葉が通じないことで散々悩み苦しみました。そして、その日の夜は悩みごともありスピーチの文章作成や緊張もあり中々寝付けませんでした。アスラマを訪れて二日目。午前中には入村式とワークがありました。入村式では私が生徒代表としてスピーチを行いました。人前に出て発表することはそれ程苦手ではない私ですが、このときはとても緊張し舞い上がりスピーチ後、納得のいかない後悔の残るものとなりました。結果は納得いかなかったけれど私はあのような場で代表としてスピーチできたことを誇りに思っています。ワークでは猛暑の中それぞれができることを考え行動し、弱音を吐くのではなくお互いを励まし合い楽しく頑張っているメンバーの姿を見て遅く感じました。記念式典では、バリプロテスタント教会の主教さんの話などを聞きました。記念祝賀会ではブタの丸焼きを関係者一同で囲み30回目を祝して関係者一同で美味しくいただきました。アスラマを訪れて三日目。この日も午前中からワークでした。前日の疲れがある中、メンバーがそれぞれ違うメンバーの頑張りや、良いところを褒め合い意識を高め合っている姿を見ると素晴らしいメンバーであると思いました。午後からは、夜に子どもたちとの交流会があるということで男女それぞれのダンスの練習や交流会に向けての最終確認でした。合宿や自主練など努力してきたことを信じ交流会では全力で悔いのないように楽しく披露しました。子どもたちのパフォーマンスは、元気があり楽しいという気持ちが見ている私たちに伝

わってきました。子どもたちのおかげで交流会は盛り上がり、ますます充実感のある場となりました。男女ともメンバーを信じ全力でやり遂げることで、子どもたちには気持ちが届き、物凄く大盛り上がりでした。交流会は去年のメンバーが反省点を的確に教えてくださったおかげで大成功しました。これは、私たち第30回の頑張りはもちろん、サポートしてくださった第29回のメンバーのおかげでもあると思いました。四日目。午前中は教会を訪れ日曜日の礼拝を体験し、途中で「アーメン・ハレルヤ」を披露しました。午後からは、ホームステイ先の家族に少しでも感謝の気持ちを返せるようにとアスラマに招待し、日本食を召し上がってもらいました。カレーと白玉団子の反応は正直微妙な感じでしたが、「味は美味しい」と言ってもらえて良かったです。このとき、ホストファミリーと話すことで、少し距離が縮まったと感じました。五日目。午前中は、ムラヤ公立高校を訪問し日本語の授業を行いました。私のクラスは優秀なクラスであったため、日本語の基礎やある程度の日本語がわかっており、スムーズに進めることができました。授業を行うことで逆に私たちもインドネシア学生から学ぶこともありました。午後からは、ワークの続きをしました。六日目。体調不良者が続出。この日はメンバーの体調管理や今後の事を考え一日ワークは休みとなりました。この日、私は途中帰国になるのではないのか不安な気持ちやリーダーとしてもっとメンバーのことを気にかけていれば防げたのではないかとひたすら自問自答を繰り返しました。繰り返す中で、これ以上メンバーを減らすわけにはいかないと思い一人ずつ声をかけ体調の再確認など普段あまり会話ができていないメンバーとも会話をするなかで、メンバーのワークキャンプに向けての強い気持ちやそのときのリアルな気持ちを聞くことができました。私は、メンバーのことを気にする事はできていても会話をする時間が足りてなかったと、一番簡単なコミュニケーションをとることをおろそかにしていたと感じ反省しました。子どもたちと遊ぶ時間も大切ですが、一人ではワークキャンプに参加できなかったし、メンバーの有難さを再確

認できたことで、本当にメンバーには感謝するとともに自分の力の無さに腹が立ちました。この日は自分を見つめ直し、メンバーのことを考える重要な一日になりました。七日目。午前中はワーク。その後、先生から途中帰国を知らされました。涙を流すメンバーをただ見るだけで何もかけてやる言葉や行動はできなく、その場を離れ一人になり考えることしかできませんでした。少し時間がかかりましたが私は、メンバーのもとに戻り、昼食を食べることのできないメンバーもいましたが私は、今まで美味しいご飯を毎食作ってくださった方たちに少しでも感謝の気持ちを返したいと思い最後まで笑顔で完食しました。決して食事のせいで途中帰国になったと思わせたくなかったからです。悔しい気持ちはありましたが子どもたちと悔いなく遊び尽くしました。夜には、離村式があり感動の式となりました。メンバーや子どもたちの中で涙を流す者がたくさんいました。私は、このワークキャンプで本当に沢山の経験ができメンバーからも子どもたちからもたくさん学ぶ事ができました。途中帰国という残念な結果になりましたが、世の中には受け止めたくない現実を受け止めなくてはならないときもあり、全てに意味がありその意味をそれぞれが感じどのように今後の人生に活かしていくかであると思います。最後まで何もできないキャンプ長で申し訳ない気持ちですが、メンバーとの時間は間違いなくかけがえのない時間になりました。そして、何よりも第30回のメンバーを支えてくださった関係者やスタッフには本当に心から感謝しています。この経験は一生忘れることなく、私にとって最高の宝物になりました。頼りないキャンプ長でしたがありがとうございます。

インドネシアでの考察

社会学部 3回生 高岡 怜矢



私はこのワークキャンプで、自分の知らない世界に飛び込む経験をしようと意気込んで参加しました。そして自分がどのような長所を持ち合わせているのか、どのような自分を発見できるか、というところが私のインドネシアに行く目的でした。この11日間、自分はどういう世界に飛び込んだのか、またどのような経験を持ち帰ることができたのかを現地での思考、体験及び人間関係を織り交ぜながら考察したいと思います。

私たちが約7時間かけて飛んだその島はバリ島でした。空港を出るなり思ったのは、車の数、バイクの数。とにかく日本の交通事情で慣れ親しんできた私にとっては少なからず衝撃でした。ここで改善しなければならないのは、ヘルメットの普及と車線の増設だと感じました。前の車を追い抜くために反対車線に入ってまで行くのは流石に危険でしたし、実際に危ない！と感じたシーンは少なくありませんでした。現地の方はそれで慣れているとはいえ、車線は増やすべきだと思いました。しかしその分クラクションを鳴らす頻度はとても多かったです。日本では本当に危ないときぐらいしか鳴らさないしそうしないとトラブルの元になりかねないけど、向こうでは追い抜くときに自分の位置を知らせるために鳴らしていました。交通ルールひとつとっても日本とは全然違ったのは大きなカルチャーショックでした。

そうこうして交通事情に衝撃を受けながら到着したのが今回の活動の拠点となるプリンペンサリ村でした。町並みから教会、アスラマの施設まで全体的に小奇麗な村でした。ただ、これもまた全体的にハエがとても多かったです。特にアスラマ

の施設にいたっては常に自分の身体に3～4匹は留まってる状態でした。その分気にしてもキリがないことから、慣れるのも早く15分もすれば頭に留まっていようがどうでも良くなっていましたが、後述の悪夢の原因の一端を担っていた可能性があるとなるとハエの対策も施設の課題の一つであると思います。具体的なことを挙げるならば、施設の食堂は二面が壁のない開放的な場所でした。しかしその分ハエやその他の虫も入り放題でした。ハエがたくさんいたのは日本人に肉料理を出していたからだと聞きました。綺麗な食べ物や食器も、ハエが持ち込む菌や汚れがどんどん付着してしまうような衛生環境です。それならば壁のない開放されている二面に蚊帳の一つでもぶらさげると、幾分清潔になるしハエによる不快感も激減するのではないかと感じました。炊事場の方にも網戸ひとつ取り付けるだけでかなり衛生環境は変わってくるでしょう。日本では当たり前のことがまだまだ定着していなくてその分身体がダメージを受けるというイメージが強かったです。つまり以前は日本もこのような段階があったが、発展がインドネシアと比べて如何に早いかということがとてもよく分かりました。またその分日本での生活のありがたみも痛いほどによく分かりました。

アスラマを語る上でははずせないのは子どもたちです。私はもともと子どもがあまり得意ではなかったのですが、あの子どもたちとはとても遊びやすかったです。言葉も通じないし初対面の子どもたちなのに笑顔で接することができるとは自分でも思ってもみなかったです。おそらく、言葉が通じないからこそたくさん遊べたんだろうと考えました。子どもたちは言葉なんか関係なしに「遊ぼうぜ」という空気感を出してくるし、そこまでしてくれると私も子どもが苦手なんていう感覚はどうでもよくなりました。こんな私でも遊んであげたら楽しそうに笑ってくれて、ただそれだけで私もここへ来てよかったなと思えるぐらいでした。

そして子どもたちとの交流だけではなく、もちろんしなければならぬのはワークです。ワーク

ではメンバーはみんなとても張り切ってやっていました。しかし、「自分のペースこそ大事なのではないか？」とずっと思っていました。女の子がすごく重い岩を運んでいたり、男の子も自分の限界を超えて何個も重い岩を運んで往復していたり。私はというと、皆と比べると手を抜いていたと言っては語弊がありますが、きっちり自分のペースを守っていました。無理をするし、その後の活動に影響が出るし私はせっかく異国の地に来ているんだから、プログラムで予定されているものだけではなくもっと周りのなんでもないようなことも吸収したかったので、そういう体力や余裕を残すためにも周りに影響されず自分の器を超えないで仕事することができました。今回、自分の長所を見つけたくてこのプログラムに参加しましたが、一番大きな収穫だったのはそこだと思いません。周りがちょっと頑張る雰囲気ならそれにペースを合わせて調和を取ることや、ちょうど良い頃合いで休憩の切り口を見つけたりすることができました。

ワークやミーティングが終わってから帰る先はプリンピンサリ村の村人宅です。私たちのホームステイ先のファミリーは英語も話せないし、私たちも研修で事前に勉強をしていたが、インドネシア語をあまり話せないでいました。なので言語によるコミュニケーションはあまり取れませんでした。聞き取るのがとても難しいのです。しかし毎朝、私たちが起きたと分かるとお茶とお菓子を持ってきてくれたり、洗濯物が乾きやすいように干し場所を私たちが知らないうちに変えてくれたり、日本語授業プロジェクトの前日に私たちが準備で帰るのが遅くなったときも帰宅を待って起きていてくれたり、あたたかさがひしひしと伝わってきました。

そこで決定的な親交の証というか思い出が必要だなと考えているところに、ホストファミリーを招いての日本食パーティーが開催されました。このイベントもかなり非日常的な体験がありました。私は豚肉を切っていく役割でしたが、20キロあってとにかく大きかったです。しかし、包丁の切れ味がものすごくよかったですので苦になりません

でした。前日の準備の買出しに行った際にとっても安く買ったものなので期待はしていなかったのですが、こんなに切れるものかとかなり印象に残りました。そして完成したカレー、それに白玉団子をホストファミリーの席へ持って行き一緒に食べるのですが、笑顔でおいしいと言ってくれた瞬間が心に残っています。これは確実にホストファミリーの方々にも、私たちにも良い記憶として残るだろうと確信しました。

しかしそんな元気に楽しく活動していたのもつかの間、ある夜嘔吐と下痢の症状が出て来、寝ることもなかなかできない状態になりました。うめきながら寝ることになるとは思いもよりませんでした。食べていたものは全て戻し、喉が渇いて水を飲んでもその水も吐きました。何もかも吐いてしまうのです。さらに何がしんどいかというと、なにも飲まなくても胃液を吐いてしまうこと。この嘔吐感が何よりもしんどいものでした。でもかえってこれは、何も飲まなくてもどうせ吐くのなら飲んで少しでも水分を取った方がよいということも分かりました。

翌朝、他のメンバーの何人かも同様の症状に陥っており、食中毒の可能性が高いとしてデンパサールの病院へ向けて出発しました。出発する前、異常の出なかったメンバーが私たちのことをあれこれ世話してくれたり、荷物をまとめてくれたり、車の前で見送ってくれたりしました。“うれしい”なんて言葉では表せなくて、なんとというかこれほど人の温かさを感じた場面は私の人生で他に多くありません。これには車の中で涙を流さずにはいられませんでした。もう他のメンバーや、特に同部屋であり夜中にも関わらず私を施設まで連れて行ってくれたり荷物をまとめてくれたキャンプ長には足を向けては寝られません。

約4時間かけて到着したのはプリンビンサリ村とは真逆な、とても近代的で綺麗な病院でした。私は入院自体2才の頃にしたりで記憶もありません。そんな入院生活を、しかも海外でとなるとこれはこれでまたとても貴重な経験となりました。体調不良のほうは採血や検便、その他検査から細菌性の食中毒との診断が下されました。前述

の悪夢というのはこのことでした。しかし病院に来るとこれは楽園でした。空調完備、トイレも綺麗、お湯も出る、ご飯はおいしくて食中毒の心配もない。至れり尽くせりの環境に満足すると同時に、文明のありがたさを切に感じることができました。海外の病院となると日本の病院とは薬も病院食も違うことが分かりました。液体のもので妙においしい薬や、チューイングキャンディーのように噛み砕いて服用するものなどで、日本の錠剤や粉薬のようなものは出ませんでした。病院食ももちろんおかゆなど消化の良いものもありました。しかし、ビーフステーキや牛乳をかけて食べるシリアルなど、おなかの弱っている人には良くないであろうものも選べるようになっていました。どうやらその辺りは日本ほど気にしないのかも知れません。

これらその薬や点滴が効いて、体調不良が長引くこともなく数日で退院しメンバーの元へ合流することができました。日本では感じることをできないことを体験することができました。その上海外で病気になるなければ経験できない時間までも過ごすことができました。バリ島ではプログラムが変更になり予想外の体験をしましたが、これはこれで非常に大きな体験になりました。他の年度のワークキャンプにも引けはとらないと思います。悔しい思いは皆していると思いますが、それはまた次に繋げるエネルギーになると思っています。

国際ワークキャンプを終えて

経営学部 3回生 松並 翔太



8/24～9/4までの12日間、インドネシアのプ

リンビンサリ村にあるアスラマへの国際ワークキャンプが行われた。このキャンプを経て自身が感じたこと、体験したこと、そしてこのキャンプの経験を今後どのように活かしていきたいかなどをまとめる。

まずその前に、このIWCとはどういうものかについて述べる。IWCとは、インターナショナル（国際）ワークキャンプの略である。今回の活動内容としては、現地プリンビンサリ村にあるアスラマという施設の子どものために、遊び場などを作るために壁を作るワーク、アスラマの子どもたちとの親睦を深めるための交流会、現地の高校での日本語の授業、ホストファミリーやアスラマの子どもたちに日本食（カレーと白玉団子）をふるまう日本食、これらが主な活動である。これらの活動毎、さらにこれら以外に印象に残ったことに分けて、ここからは上記で述べたものをまとめていく。

まずはワークからである。このワークでは基本的に自分たちは、グラウンドに置いてある大量の砂や岩を、一輪車やバケツを使って現地の職人の方が壁を作る作業をしている場所まで運ぶというものである。炎天下の中重たいものを運ぶ力作業となるため無理をせず自分のペースで頑張るという事が重要となった。このワーク中もメンバー同士が声を掛け合ってお互いをフォローし気遣いあったりと、個人の作業ではあるがチームワークが重要となるものであった。このワーク中に感じたことは現地の職人さんたちあるいは子どもたちの体力、元気、また過去のIWCのメンバーの凄さである。ワーク中自分は疲れて休憩しながら作業していたのだが、現地の職人の方や子どもたちは見た限りだとほぼぶっ通しで作業を行っていた。これを見てすごいなと思ったと同時に、自分ももっと頑張らなければならないと感じた。また自分たちと同じ作業を過去のメンバーの方たちはこなし、アスラマの風景を作っていたのかと改めて感じさせられ、そこで自分ももっと頑張らなければいけないと感じた。

次に交流会についてまとめる。今期の交流会は、現地のアスラマの子どもたちの出し物、自分たち

日本の学生による歌（世界に一つだけの花、アーメンハレルヤ）、ダンス（男子はRadio FishのPerfect Human、女子はグッキーのGOOD LUCKY!!!）の披露、「ネズミ捕り」（メオンメオンゲーム）と、「だるまさんが転んだ」、を行った。どのプログラムも想像以上にアスラマの子どもたちが純粋に楽しんでくれて盛り上がっている姿を見て、自分たちも交流会をやってよかったと感じた。それと同時に楽しむことが出来た。ネズミ捕り（メオンメオンゲーム）では、音楽が流れたとき、子どもたちがダンスしたり踊りながら歩いている姿が見られて、自分も楽しむことが出来た。ダンスや歌を歌うときに練習を必死にして覚えて良かったと感じた。交流会は特に、以前から昨年度のメンバーに現地スタッフやアスラマの方とのミーティングをしっかりとすると念を押されていた。もちろん事前準備や交流会の内容を考えた上でのことであるが、今回はそのミーティングをしたおかげで、満足のいく内容になったと考えている。そこで感じたのが、やはりコミュニケーションの重要性である。うわべだけで分かっているふりをするだけで情報共有をしなればどんなことでも失敗してしまう。今回はインドネシア学生、また現地スタッフの方とのコミュニケーションを円滑に行う事が出来た為、この交流会が成功したのだと感じた。

ここからは日本語の授業についてまとめる。今回の授業としては、あいうえお表、感情・挨拶表、四択クイズ、告白ゲーム、以上の内容を行った。行く前はみんな無言だったり静かだったらどうしようか、など不安な気持ちでいっぱいだったが、行ってみると生徒たちは元気で純粋に授業を楽しんでくれ、自分たちも楽しんで授業を行う事が出来た。あいうえお表・感情・挨拶表は現地の生徒たちもある程度知っていたみたいだったが、みんな一緒に復唱してくれて嬉しかった。想像以上に告白ゲームも恥ずかしがることなく、みんな盛り上がってくれたので、実行してよかったと本当に感じた。人前に立って話したりすることが今後自分自身の様々な活動で経験することになるので、この経験は大きなものになったと感じている。

つづいて日本食についてまとめる。昨年に引き続きカレーを作るのに加え、30回では新たに白玉団子を作り、プリンビンサリ現地の方に食べていただいた。準備の時、今回自分はニンジン切りを担当していたが作業が早く終わったので、鍋のところで作業をしていた。プリンビンサリ村の方たちにカレーはおいしいと言ってもらえるか不安だったが、イブたちもEnak（おいしい！）と言って食べてくれていて、自分自身も食べておいしいと感じたので、満足する出来になったと感じた。

ここからはこれらの活動以外のことから、印象に残ったことで自身が感じたことなどをまとめていく。初めに印象に残ったのが、デンパサールの空港を出発してからホテルに移動するまでのデンパサールの風景、また車やバイクなどの多さである。日本でもよく車を運転するのだが、デンパサールで、もし自分が車を運転するとすると、すごく怖いと感じた。またバイクが日本よりも多数走っているの、周囲に気を付けなければ事故が起きるような環境で現地の人たちは普通に運転しているのを見てすごいと感じた。

二つ目に印象に残ったのが最初のホテルでデオたちと初めて会った時である。この時はデオとは事前にラインをしりして、アンドリーの事も先輩から聞いていて少しは知っていたのだが、やはり初めて会うし、インドネシアの人と接することが初めてだったので、不安な気持ちでいっぱいだった。だが、会ってみて初めは緊張したのだが、だんだん話せるようになって友達になれて本当によかったと感じている。

三つ目に印象に残ったのはプリンビンサリの風景である。もともと村だから自然が多いと聞いていたが日本では考えられないほどの自然があふれていて、家で牛やサルを飼っていたり、道端にはニワトリや犬がたくさん歩いているなど、衝撃的だった。他の子が泊まっているホストファミリーの家に洗濯機を借りに行ったとき、その家のイブが家の木に生えていたココナッツをその場で落としてジュースとしてふるまってくれた。食感が大根に似た独特な味ではあったが日本に住んでいるだけでは経験できないことであるので、凄いな

と感じながら飲んでいたのが記憶に残っている。

次に印象に残ったのは、式典の後に出てきた豚の丸焼きなどインドネシア独特の料理である。日本ではまず見る事がなく、豚が焼かれて丸焼きになっている姿はインパクトがすごくびっくりしたのだが、食べてみると案外おいしく食べれて、びっくりしたのが記憶に残っている。他にも豚の皮などもあった。

つづいて印象に残ったのがメンバーの何人かが倒れたときである。当初は当然の出来事で自分自身をショックや不安に押しつぶされそうになったり、自分が代わってあげたいと考えたりした。だが自分自身が倒れたメンバーの代わりにもっと頑張らねばと感じ、この後の活動も頑張ろうと決意するきっかけにもなった。

その次に印象に残ったのが、巖先生がIWCの中止を発表した瞬間である。自分自身もこの時はショックであり鮮明には覚えていないのだが、ワーク後は疲れてたので少し寝て休憩をして、起きてから昼食を食べる前に巖先生の表情を見て「何か入院している子たちの身に大変なことが起きたのか」とこの時想像した。IWCの中止を発表された瞬間は、悔しさと寂しさが込み上げてきたと同時に、少し安堵したようなそんな感覚であった。そこからの事はあまり覚えていないが、ただガムシャラに子どもたちと遊んだことは覚えている。

後はプリンビンサリ村を離れてから、検便の為に泊まったホテルである。正直プリンビンサリ村を早く離れることになった事で落ち込んでいたのだが、びっくりするくらいのリゾートでパカンスに来たような気分が陥ってテンションが上がった。だが同時にプリンビンサリ村との格差を感じ、何かアスラマの子どもたちのために何かしたいとこの時に強く感じる事が出来た。一つのエリアが実質貸し切り状態で外出が出来なかったのだが、そんなことは気にならないくらい、おいしい料理、サービスなど、リラックスした時間を過ごすことが出来た。プールにみんなで入って騒いだのは本当に良い思い出になった。

最終日にデンパサール観光をしたのも記憶に

残っている。モールでは日本のイオンや、ららぽーとと似た印象を感じながらもインドネシア独特の店やモノがあったり、日本の飲食店があったりして印象に残っている。化粧品やお土産でパティック（インドネシアの正装のシャツ）を買ったり、楽しい時間を過ごすことが出来た。

最後に訪れたタナロット寺院では、買い物はあまりしなかったのだが初体験の値切りにチャレンジした。緊張したが、いい経験になり楽しかった。海岸に行くと綺麗な風景が広がっていて、記念撮影で写真を撮るたくさん撮ることができた。

いよいよデンパサールでのインドネシア学生とのお別れの時である。突然お別れすることになり、本当にさみしい気持ちになった。だが同時に来年も絶対来ると決心することが出来た。

上記で述べた活動はどれも鮮明に自分の中に記憶として残っているのだが、それでもやはり、自分自身一番印象に残っているのは、空き時間にアスラマの子どもたちと遊んだことである。サッカーやバレーボール、戦いごっこ、時には話で盛り上がりだったり、本当に些細な日常が自身の中で、本当に大切な一生の宝ものとして帰ってきた今でも鮮明に残っている。来年までに何か子どもたちのためにできることはしたいと考えている。

今回のプログラムに参加して

国際教養学部 3回生 井方 優花



今回私たちは8月24日～9月4日の12日間インドネシアに行き、その中で8月26日～9月1日まで、プリンビンサリ村にあるアスラマの施設に滞在した。そこでは、主にワーク活動を中心に活動をし、現地の人々とより交流を深くできるような

様々なプログラムも行った。このプログラムには、各自が日本語班・しおり班・交流会班・日本食班に分かれ、春学期に用意したプログラムである。今回、私たちは半分の生徒が体調を崩し、途中帰国という事態になった。だが、短い時間の中で私は様々なことを学び触れ合うことができた。

まず私は、日本との環境や生活の違いを感じた。現地での交通手段としては、バイクや車を使って移動する人が多い。なぜなら、現地では日本と違い電車が無い事が原因だと思う。なので、バイクを家族で3人乗りをしている人や、数えきれない程のバイクや車が走っている。また、大半は子どもを学校へ送り迎えしている人が多かったと思う。交通のルールもゆるく、前にいる車を抜かして行く人が多く、事故になりかねない状況が多かった。また、交通の道路などを作ったり直したりするのも、工事現場の人が必死に手作業で行っていた。こういう面を見ていると、いかにも日本が便利なのかが分かる。

そして、私たちが一番衝撃を受けたことが、水浴びとトイレである。出発する前に、先生からは聞いていたが、とても衝撃であった。現地ではお風呂がなく、冷たい水で水浴びをする。たいがいはお風呂とトイレが同じ部屋にある所が多かった。私のホストファミリーの家にはシャワーがあったが、シャワーがない家もあった。シャワーがない家では、バケツに水を溜めて桶ですくって洗う形式である。私たちは普段からシャワーではお湯も使えて、湯船に入ることができる。初めて水浴びに挑戦した時は、凍えて今にも風邪をひきそうだった。トイレでは、日本でも使われている座る形式の便座が普及されている。だが、日本とは違いトイレトペーパーを流すことができない。流さずに、ゴミ箱に捨てるのがルールになっている。始めはカルチャーショックになりかけていたが、改めて日本がどんなに恵まれているのかわかり知らされた。また、日本とは違い湿気がなく過ごしやすい気候ではあるが、年中暑いので、アスラマにある遊具や子どもたちの服が日光に耐えられなくなり痛みやすくなっている。今後、子どもたちの服を集めて送ることも良いのではないかと

と思う。

そして今回私たちは、アスラマの施設の成り立ちをSwikramaさんから聞き、施設のことを学ぶことができた。私たちが組んでいた予定にはなかったが、このアスラマの施設のことを学ぶことができ、より皆の施設に対する気持ちが高まり良かったと思う。この話に私自身も影響を受けることができ、とても聞いて良かったと思えた。施設は1975年に建設された。昔は教育を受けることができない子どもたちが多かった。なぜなら、この時のインドネシアではカースト制度が強く、高い身分のカーストだけが教育を受けることができ、低いカーストは教育を受けることができなかった。教育を受けることができない子どもたちのために、マストラ司教が改善していった。また、大規模な火山噴火により貧しい人が増えた。社会の状況が変わり、子どもたちの状況も良い方向に変わった。このような成り立ちから、今の施設で子どもたちの未来が守られたと思ひ感動した。施設へ入ることが出来る子どもたちの基本の順序は、両親のいない子→片親のいない子→虐待・暴力を受けている子→貧しい子である。インドネシアでは、まだ貧富の格差が残っている。このような子どもがいるという情報を受け、施設の卒業生や教会、村の村長からの推薦で入ってくる。施設は、さまざまな団体からの支援金で運営している。だが、資金不足などやきちんと機能できていない施設もあり、閉鎖されている所が何か所もある。また、入りたくても入ることができない子どもたちもいる。この状況を聞いて、日本でも施設や保育園も様々な問題があり、どの国でも子どもたちのために、この問題を改善していくことを考えなくてはいけないのではないかと思う。

そして私はこの活動で、子どもたちと関わるだけではなく、子どもたちからたくさん事を教えてもらい学ばせてもらった。子どもたちは、とても純粋で心優しい子どもたちが多かった。人の言葉を素直に聞き、感動し喜ぶ子どもたちだった。子どもたちと関わり、良い意味で子どもらしさや子どもの良い部分を思い出させてもらった。また、日本では部屋の中で遊ぶおもちゃやゲームがたく

さん増えている。なによりも、小さい頃からゲームに夢中になっている子が多く、外で遊ぶ子どもが減ってきていると思う。子どもが好きなアニメのゲームが多数あり、友達と遊ぶ時もゲームをして遊んだりしている子が多い。アスラマの子どもたちは、ゲームに触れる環境がない分、外で元気に遊んでいたりして、遊びも自分で工夫したり考えるので、自立心の発展が速いと感じた。交流会のゲームで、私たちは「ねずみとりゲーム」を用意した。アスラマの小学校低学年の男の子が、IWCの男子学生に追いつけられる役になったが、男の子はIWCの男子学生よりも足が速かった。きっと、普段から自然に触れ合い、外で遊んでいるので運動能力の発達も優れているのだと思った。

また、子どもたちは物覚えも早いと感じた。私は、日本語班のプログラムで手洗い指導の紙芝居を作った。小学校の日本語プログラムで行う予定であったが、急遽途中帰国になり、IWCの活動が中止になったので、最終日の離村式でアスラマの子どもたちに読ませてもらえる機会があった。子どもたちに分かり易い手洗い指導を見つけ、子どもたちと手洗いの動作を一緒に出来るように紙芝居を作った。紙芝居が終わった後、手洗いの動作を一つずつ覚えているか確認したが、一回の紙芝居で皆全ての動作や手順を覚えていた。私は子どもたちが私の紙芝居を見て、少しでも手洗いの大切さや手洗いの動作を覚えてくれたことが嬉しく感動した。同時に、子どもたちの理解力や記憶力も優れていると思った。

子どもたちは能力だけではなく、本当に私たちや大人のことをよく見ていると思った。途中帰国の知らせを聞いた時、私はとても悔しくて涙が止まらなかった。子どもたちの前では泣きたくなかったのだが、私のことを好いてくれている子どもにその顔を見られていたらしく、名前を呼ばれて犬のぬいぐるみを貰った。その子は、私が泣いていたので、その子なりの優しさで元気づけようとしてくれたのだと思う。子どもは、私たちが思っているよりも考えていて、周りの様子や表情などをよく観察していると思った。

そしてこの活動を通して、一番感じたことは人の思いやりである。この活動は、私たちだけでは実現できない活動であり、たくさんの人に支えられてできた活動であると、現地で改めて感じた。お金じゃなく、ボランティアとして私たちを迎えてくれたホストファミリー、アスラマの施設の方々、美和さん、先生方や両親。そして、6人のインドネシア学生の皆。本当にたくさんの方が私たちを支えてくれたから、この活動は成り立っていると思う。

また、なりよりもこの活動で1番大きな存在は、IWC第30回のメンバーである。合宿で、さらに絆が深まったと思うが、今回の活動でさらに個人の大切さを思い、改めてお互いの存在を感じた。各自、たくさんのお気持ちを持って挑んだ活動であり、それぞれの思いと一緒に活動していく内に感じる事ができたと思う。個性豊かなメンバーだったが、皆がメンバー一人一人の事を見て、思いやりを一切忘れず、メンバーのことを第一に考える子たちばかりであった。私自身、強がりでも負けず嫌いな性格で中々弱さを出せない性格である。だが、このメンバーには本当に心を許せ、家族みたいな存在を感じる。

今回、私たちIWC第30回のメンバーは途中帰国という状況になった。この結末はとても悔しく、たくさんの方々の現地の人々に申し訳ない気持ちでいっぱいである。私自身だけでなく、IWCの皆も悔しい思いでいっぱいであるだろう。何よりも現地で入院をしていたメンバーが一番悔しいと思う。だが途中帰国になった分日本に帰ってからもインドネシアの子どもたちのために何かしてあげたいという気持ちが、私の中で強くなったと思う。来年、絶対にアスラマの子どもたちに会いに行きたい。

私がIWCに参加したのは、日本以外の世界の子供たちと関わりたいと思ったからである。なぜなら、私は将来保育士になりたいと考えている。それも普通の保育士ではなく世界の子供たちと関わり、他の人と違う視野がもてる保育士になりたいと考え、今回の活動に参加した。今回参加して、私の中で子どもと関わり、子どものため

に何かできる仕事に就きたいと改めて考えさせられた。ゴールが保育士なのか何かは定まっていなかったが、今回の活動を通して子どもたちの未来を守りたいと思えた。また、今回は日本語班として物事の順序を決める難しさや、アイデアを考える楽しさを味わった。このような事は初めてだったので、とてもしんどい思いをしたが、この経験があるからこそ、私の中で良い意味で成長できたのと、達成感を感じる事が出来た。また、人間は一人では出来ないこともあること、周りの助けを借り一つの物を作り上げていく、当たり前ではあるが今回の活動で改めて人のありがたさを感じ、実感した。今後の将来のため、私は保育の勉強を頑張りながら保育園に行き積極的に行き子どもたちのことを知ろうと思った。また、インドネシア語をこれから丁寧に勉強し、来年はアスラマの子どもたちとインドネシア語で話したいと思う。

インドネシアの実情

国際教養学部 3回生 山本 陽奈



2016年8月24日(水)、関西国際空港を出発し、無事にデンパサール空港に到着した。バリ島の風は心地よかったが、意外と湿度が高くて驚いた。空港では手荷物がなかなか出てこなく、扱いは結構雑目だった。私はキャリーケースが壊れるという理由が何となくわかった。その後、空港からホテルに向けて出発した。ホテルまでの道のりは私にとって驚きの連続だった。まずバイクの数が日本と比べ物にならないくらい多い事。信号機がほとんど見当たらない。交通の便が悪い。運転が自己流の人が多く危ない。私は電車やバスなどの公共交通機関がないと、このような交通事情になる

ののだと感じた。他には、渋滞し止まっているバイクや車に一台一台声をかけ、「お金を恵んでください」と言っている少女を見た時。私はバリ島の都市でさえ、生活に困窮している家庭があるのだろうかと思った。何とも言えない苦しい気持ちになった。

予定時刻を一時間ほど超過し、ホテルに到着した。インドネシア学生と交流し、夜ご飯を共にした。現地の食事はどれもおいしくいただけた。しかし、ホテルのシャワーは水しか出なかった。ちょっとびっくりした。アメニティーも少なかった。逆に、日本のホテルのサービスが過剰すぎるのかなとも感じた。

8月25日(木)、プリンビンサリ村に向けて出発した。道路はアスファルトで舗装されているが、片側一車線のところが多くあった。相変わらず、運転は荒かった。日本の道路は整備されていて、本当に走りやすいなと改めて感じた。途中の休憩所でトイレに行った。ここのトイレは、本当に衝撃的だった。なぜか、水浴びのマンディーと同じ場所にある。もちろんトイレトペーパーはない。イモリもある。そして、一番強烈だったのが、トイレを流す水は、便器の横に置いてある大きなバケツから桶ですくうことであった。私は、とっさに水に触りたくないと思ってしまった。もちろんトイレは、洋式ではなく、和式のようにしゃがみでするトイレだった。今まで感じたことはなかったが、日本のトイレはきれいなすぎるのだなとこの時初めて思った。

プリンビンサリ村に到着し昼食をとった。この時唐揚げを食べたのだが骨付きで、非常に驚いた。骨付きと言っても、手羽中だけとかそういった感じではなく、ぶつ切りのようなランダムで統一感のない感じだった。気になったので現地に住んでいる方に、鶏肉について質問してみたところ、インドネシアでは日本のように、骨が取り除かれた鶏肉は販売されておらず、骨付きの鶏肉しか販売していないとの事だった。日本は精肉の技術も販売方法も、本当に至れり尽くせりなのだなと改めて実感した。

夕食を食べた後、スイクラマさんからアスラマ

ができた理由や背景について、話を聞いた。私は、バリ島の中には、いまだに貧困で子どもに食事を与えることもままならない家庭が存在していることに驚いた。100年ほど前の日本を見ている気がして、何と表現したら良いのか分からない気持ちになった。今まで、世界の子どもを救おうなどと募金活動をしている団体を見ても気にも留めなかった。だけどこれからは、募金を少しでもいいからしていこうと思った。私は何気なく言われるがまま高校に行き、大学に進学してきたが、教育は非常に大切なものであり、貧困を抜け出すための大きな力になるのだなと強く感じた。私もこれからは真面目に勉強に取り組んでいかなければならないなと考えさせられた。

8月26日(金)この日から、ワークがスタートした。石や土を運んで石垣を作っていた。本当に、石垣なんかできるのかなと疑っていたが、案外順調に石垣が出来上がって行ってよかった。実際に石垣づくりを行ってみて、一人では絶対に作ることができないと感じた。作業も中盤になると疲労がたまってきたり休みたくなるが、みんなも頑張っているから頑張ろうと思えた。私は今まで団体行動をしたことがあまりなかったが、協力して何か一つのものを作り上げることは、案外達成感があるなと感じた。ただ、すごく残念なのは完成しきることができなかった事。「IWC30th」と刻むことができなかったこと。刻んで帰らなかったな…。来年もう一度30回のメンバーでチャレンジしたいなと思った。

記念祝賀会では、豚の丸焼きを食べた。ここで体験したことは、イスラム教の人は本当に豚肉を食べないという事。豚肉は食べないけれど、彼としゃべると関西弁で面白いし、桃山学院大学の授業のことで共通の話題もある。私は宗教というフィルターで人のことを判断してはいけないなと初めて思った。その人の本質を見て判断しなければならないなと考えさせられた。ほかには、言葉の壁もこのころからすごく感じていた。私はインドネシア語がほぼできない。英語も微妙。日本語でしか伝えたいことを伝えられなかった。もっと、勉強しておけばよかったと心底思った。そして英

語である程度のコミュニケーションができるようになりたいと本気で思った。だから私は留学することを決めた。

8月27日（土）この日は、午前中ワークを行った後、午後は交流会のダンス練習を行った。去年の交流会はあまり良くなかったと聞いていたので、交流会がどのようなか少し不安もあった。だが交流会も、日本語を話すことができるインドネシア学生のおかげで、説明がスムーズにでき、一緒になって盛り上がる事ができた。何をすることも、みんなの力が必要なのだと実感した。また、アスラマの子どもたちの歌やダンスも素晴らしかった。特に心に残ったアスラマの子どもたちからの出し物は合唱だ。私たちが元気やパワーをプレゼントしようと思っていたが、逆にアスラマの子どもたちから元気をもらっていたなど思った。それぞれの発表が終わった後、「ネズミ捕り」と「だるまさんが転んだ」のゲームをした。アスラマの子どもたちは、本当に足が速くて驚いた。私が想像していた子どもとは真逆で、とても人懐っこく初対面でもすぐに打ち解けられる雰囲気だった。

この日、IWCメンバーの一人が体調を崩し入院した。他にも数名体調を崩しているメンバーもいた。体調管理は常に気を付けていかなければならないなど、再度思わされた。そして、早く入院したメンバーが帰ってきて、全員そろって活動がしたいとも思った。

8月28日（日）この日は、午前中は日曜礼拝に参加した。そして、午後からは日本食食事会のために、カレー作りを行った。今年はチームワークが非常によいらしく、順調に誰もけがをする事もなく、カレーを完成させる事ができた。今回豚肉を使ってカレーを作ったが、イスラム教の人もいたので次回からは、鶏肉でカレーを作ったほうがいいのではないかなと思った。宗教によって食べ物が制限されるという状況は日本の国内で生活しているだけでは、理解しがたい事だったので、今回はとてもいい経験になった。

夕方、食事会がスタートし、ホームステイ先のパパ（お父さん）と一緒にカレーを食べた。パパ

にとってこのカレーは甘いらしく、とても辛い調味料を足して食べていた。私はこの時パパに、「インドネシアのカレーはふつうチキンを使うんだよ」と教わりました。カレーを食べた後は、デザート白玉団子でした。パパはこの白玉団子をとっても気に入ってくれていた。辛い食べ物が好きなのに、意外と甘党で正直びっくりした。現地に在住している看護師の美和さんが教えてくれたが、インドネシアでは意外と糖尿病の患者が多いらしい。

この日も体調が悪くなったメンバーや、高熱で寝込んでいるメンバーもいた。みんな頑張りすぎているなど感じた。わたしは心の中で、本当に18日間ワークや日本語プログラムを続けることができるのかなと心配になった。

8月29日（月）この日はムラヤ公立高校で、日本語の授業をした。日本語の教材を試行錯誤で作ってきただけあって、成功するかしないか、すごくモヤモヤしていた。しらけてしまうのではないだろうか、面白くなくて寝てしまう生徒がいるのではないかと。ほんとうに、変な心配ばかりしていた。だが、その不安は一瞬でなくなった。同じ班のメンバーが、教材を使って面白おかしく授業を進めてくれたおかげで、教室は常に笑顔が絶えず、盛り上がっていた。頑張って作ってきたなど、この時やっと思える事ができた。授業を終えて、クラスみんなで写真を撮ったのだが、インドネシアの高校生の元気がすごく、圧倒された。本当にたくさんの元気をもらう事ができた。逆に疲れるくらい、たくさんの言葉で表現できないものをもらえた。この日は残念ながら、一緒に日本語の教材を作ってきた同期のメンバーが体調を崩して高校に行くことができなかった。

8月30日（火）この日は、朝から体調を崩す人が続出した。3人のメンバーがデンパサールの病院へ向かった。私も体調を壊し、一日中寝ていた。モチベーションが大きく下がってしまった。なんとかワークを続けたいと思う気持ちと、このままワークを続けていてもいいのだろうかという気持ちが入りみだれ、気が重かった。これに追いつけるように、私と一緒にホームステイをして

いたインドネシア人の学生がケガでデンパサールに帰ってしまいました。

8月31日(水)この日、団長より「先ほど大学から報告がありIWC30回は本日をもって終了します」との報告を受けた。素直に悲しかった。帰りたいという気持ちも少しはあったが、それでも悔しいというか、悲しいというか重たい気持ちになった。私は、体調もあまりよくなっていなかった。

9月1日(木)最後の朝だったので、早めに起きてアスラマの子どもたちの朝食の様子や、学校への見送りに行ってきた。来年必ず帰ってくるからねと約束をした。私は、来年もう一度プリンビンサリ村に帰ってきたときに、たくさんコミュニケーションを取れるようにしておこうと改めて思った。その後、残りのメンバー全員でアスラマを出発しデンパサールへ向かった。

デンパサールに到着後、何とも気持ちが吹っ切れないまま日本へ帰り、今に至っている。

「日々感動、日々成長」

経営学部 3回生 前平 朱理



子どもが大好きな私は、子どもたちと触れ合いたい。笑顔にしたい。体力にも自信がある！そしてインドネシア語を活用してみたい！初めはそんな思いで、IWCへの参加を決めました。楽しみなことがたくさんありましたが、海外に行ったことのない私は、正直不安が大きかったです。それは食事のこと。コミュニケーションのこと。しかし近づくにつれてメンバーとも仲良くなり、楽しみ！全力でやり切りたい！成功させたい！そんな思いでワクワクしていました。そして8月24日。

日本を出発しデンパサールに到着した。初めての海外の景色にやっとはじまる！と実感し気が引き締まりました。

楽しみなことたくさんありましたが、正直見たことのない景色に驚きました。道路はバイクだらけ。シャワーからお湯がでないこと。ハエがたくさんいること。犬やニワトリが村中にあること。衝撃的で戸惑いました。私はそんな環境の中で、過ごしていけるのか不安でした。しかし、プリンビンサリ村を歩けば、子どもから大人の人まで会う人会う人が話しかけてくれます。人と道で出会えば「挨拶をする」という基本的なことも、インドネシアで改めて学ぶことができました。日本で街を歩いてもこんなに笑顔で挨拶をされることはありません。暖かいインドネシアの人々の人柄に私は、惹かれていきました。そして、すぐに安心して故郷のように感じました。

ホストファミリーは素敵な家族でした。初めて会った私をイブは抱きしめてくれ、不安だらけだった私はとても安心しました。私のイブは帰宅の度に私を抱きしめてくれました。そして寝る前には、インドネシア学生のハンナと、イブと少ししか話せないインドネシア語でおしゃべりをする時間が私の一日の最後の楽しみでした。

私がIWCの中で最も印象的だったのは、子どもたちの笑顔です。8月25日デンパサールから車で4時間かけプリンビンサリ村のアスラマに到着し車の窓から外をみた光景が頭から離れません。子どもたちが私たちをキラキラした目で、ニコニコ迎え入れてくれました。本当に楽しみにしてくれていたのだと感ずることができ、それが私にとって一番初めの感動でした。不思議なことに長い移動の疲れが一気に飛びました。私は初め子どもたちを笑顔にしたい！と思っていましたが、逆に子どもたちから私が笑顔をもらうことばかりでした。しかし私は子どもたちの元気に負けられへん！と思い1日目から全力で子どもたちに向き合いました。

最初に女の子が私に近づいてきました。インドネシア語で話しかけると名前を教えてくださいまし

た。「通じた！」私はインドネシア語を勉強していましたが自信がなく恥ずかしいと思っていましたが、子どもと会話ができうれしかったです。そして子どもたちは私の名前を覚えてくれて「あかり、あかり」とたくさん呼んでそして手を繋いできてくれました。そこから積極的に話かけてみようと思い、名前、趣味を聞き、早く覚えるように努力、工夫をしました。慣れない名前を聞き取ること、覚えることは難しかったですが名前を呼ぶと喜ぶ姿を見ると、やる気ができました。『帰るまでに全員の名前を覚える！』これが私の目標にもなりました。

一人の男の子が私に絵を見せてくれました。綺麗な色使いの絵に感動しました。そして私は絵が上手！という、彼は、絵を描くことが好きだから、設計士になりたいと夢を教えてくださいました。夢を語ってくれた子どものキラキラした姿にまた私は感動しました。「私はあなたの絵が好きです。」というと彼は私にその絵をくれました。それが私が、アスラマの子どもたちからもらった一番最初の宝物です。私は本当に嬉しかったです。しかし彼を見てもっと嬉しそうにしていたのが印象的でした。初日から子どもたちの夢を持ったキラキラした姿、キラキラ笑顔に本当にたくさん感動しました。

そして8月26日からワークが始まり、山積みになった石と土をみて、やる気が湧きました。IWCのメンバーも誰一人手を抜かず、子どもたちも小さい体でありながら、すごいパワーで石を運ぶのを手伝ってくれた姿に、負けてられないと思い頑張ることができました。

暑い中のワークや慣れない環境に体調を崩す人が増えてきてとてもみんなが心配でした。そして自分も気を引き締めなければならないと感じていました。

28日。私は日本食班を担当していました。街のスーパーに買い物に行きましたが、スーパーは日本と変わりがありませんでした。しかしとにかく

安い！その安さに驚きました。そしてスーパーマーケットの店員さんとても愛想がよかったのが印象的でした。

私は、日本食班の担当だったので成功させたい気持ちが大きかったです。メンバーのみんなは協力的でスムーズに準備が出来ました。そして招いたホストファミリー、アスラマの子どもたちが喜んでいる姿が本当に嬉しかったです。私のホストファミリーは5人で来てくれました。5人共カレーを2杯食べてくれました。日本の料理を「美味しい、美味しい」と言って食べてくれている姿をみて、私も毎日のインドネシアの料理に好き嫌いせず、感謝して食べなければならないという思いにもなりました。

8月29日。数時間前まで子どもたちと楽しく遊んでいましたが、急に体調が変化しました。あまりにも突然で本当に怖い思いをしました。みんなと同じようにご飯を食べ、生活してただけで、病気になったこと、日本との環境の違い日本の安全性、身をもって痛感しました。そして私は8月30日から病院に入院することになりました。病気は今までで1番しんどかったです。もう2度とこんな思いをしたく無い。そのように思い、そして病気の怖さをとても思い知らされました。しかしこの経験から、たくさん周りの暖かみを感じることができました。病院に向かう前、IWCメンバーが車の外から「頑張れ」と、言ってくれた光景が今も頭から離れません。そして先生方、スイクラマさん、スティティさんには本当にお世話になりました。私は正直本当に辛かったです。まず、アスラマを離れるという気持ちの面。しかし私は、アスラマの子どもたちの為にもIWCのメンバーの為にも絶対治して戻ると強く思っていました。病院では、先生方、一晚中隣の部屋にしてくれたスティティさんが本当に心強かったです。周りの助けが、私を弱気にせず、頑張ろうという気持ちにさせてくれました。病気でしんどかった時も、子どもたちとの写真を見れば励みになり、頑張ることができました。

しかしそれは、叶わず、入院先のベッドで『早

期帰国』と聞いたときは受け入れることができませんでした。とにかく悔しいという思いでいっぱいでした。私は、子どもたち、お世話になったホストファミリーにお別れの挨拶をできなかったことが本当に心残りではありません。そして、ワークを完成させることができなかったこと。計画していたことを全てやり遂げることができない結果になり本当に悔しいです。私たちが来ることを楽しみにしていた子どもたちに本当に申し訳なく思いました。

私が入院をしたと聞いて泣いた子どもがいたと聞きました。私は子どもを笑顔にしたいと思い、来たのに、泣かせてしまったことが本当に申し訳ないです。そして本当に悔しいです。最後に笑顔でさよならを言おうと思っていたのに、それも叶わず残念でした。私は絶対に来年もアスラマを訪れたいです。私にたくさんの元気をくれた子どもたちの笑顔をもう一度目で見たいです。また子どもたちの為にできることはないか、日本で取り組んでいきたいと思えます。IWC30回と記念になる年であったが早期帰国になってしまい、早期帰国でなければ、どんな気持ちで帰国していたのだろうと私は帰国後よく想像します。きっと今とは違い、やり遂げたという気持ちで帰国することができたと思えます。

そして最終日、私はIWCのメンバーから手紙を受け取りました。それは、アスラマの女の子ジャスミンが入院中の私に宛てた手紙でした。私はデンパサルを離れる直前にそれを読み、本当に心が温かくなりました。絶対ここに帰ってこようと思えました。手紙は『I love you akari』で始まり、『私たちは幸せです。心配しないで』と書いていました。病気の私に心配をさせない。きっとそう思って書いたメッセージで、幼いのに、本当に心の優しい子どもたちだということがよくわかりました。

手紙だけでなく私は子どもたちから、たくさんの絵と、ぬいぐるみ、アクセサリーを貰いました。きっとそれぞれ子どもたちの宝物だったと思うの

に、それを「心からあなたに贈る」と言って私にくれました。私が嬉しそうにもらうと喜んでくれたので、本当に大切にしたいと思います。

このIWCから、笑顔の大切さ。言葉が通じなくても、相手の気持ち、優しさが本当に伝わるということ。たくましいアスラマの子どもたちからたくさん学びました。そして日本での生活の贅沢さ、自分の生活の甘さに気づきました。

それもこの経験がなければ気がつきませんでした。蛇口をひねればお湯がでて、生野菜を食べることができる。トイレットペーパーを流せること。綺麗な環境で生活しているということに日々感謝しなければならぬと思えます。モノの考え方が変わるきっかけになりました。

アスラマの子どもたちとの出会いに本当に感謝します。

IWCの12日間は私の大学生活においても、大きく飛躍するきっかけとなりました。この経験から私は成長できたと実感しています。私の携帯にはたくさんの子どもの写真があります。その写真のほとんどは満面の笑顔に向けてくれた写真です。IWC30回生としてこのワークキャンプに参加できてよかったです。インドネシアで実際に触れ合い、目で見えてきた、子どもたちの笑顔が今の私の原動力です。

IWCの活動を終えて

法学部 2回生 大隣 光太郎



今回、私は第30回インドネシア国際ワークキャンプ (IWC) に参加しました。過去29回も続いてきた歴史のある活動に参加できると思い、やる

気と喜びがありました。

出発までに、主にチームビルディング、インドネシア語の授業、そして4つの班（日本語授業班、日本食班、交流班、しおり班）に分かれて作業をしました。私は日本語授業班に携わりました。6月ごろから集まり、どういう授業内容にするか、インドネシアの学生にも伝わるためにはどうすればいいかなど、時間をかけじっくりと悩みながら作業に取り組みました。夏休みの二日間を使って合宿を行いました。主に日本語授業班や交流班をメインに取り組み、夜は日本食班が仕切り、全員でカレーライスと白玉団子を作りました。全員で取り組めたので、より一層チーム全体の仲が良くなったと思いました。カレーライスは少し辛かったけれど美味しく、白玉団子はおかわりをするくらい美味しくできました。合宿棟に泊まってからは、先輩や後輩とたくさん喋り、より親密になることができました。二日間合宿を行うことによって、インドネシアに行くための準備ができ、自信に繋げることができました。

出発当日、みんな元気そうな顔だったので、18日間頑張ろう！と思いました。約6時間半のフライトで、無事にデンパサール空港に到着しました。街の風景は、さすがバリ島、南国だなと実感させてくれるような景色でした。ホテルに着き、インドネシアの現地学生と自己紹介をして晩御飯を食べました。お米が日本と違って少し細長かったのですが、思っていたより料理が美味しく嬉しかったです。晩御飯を食べた後は、各班に分かれてミーティングをしたり、明日の準備をして次の日に備えました。二日目になり、朝食を食べ終わってから30分後にはロビー集合というバタバタした展開でしたが、急いで準備をしてロビーに着きました。しかし、そこから30分間はバスが発車しなかったもので、きちんとスケジュールを把握ができなかったのかなと思いました。約4時間バスに乗り、プリンピンサリ村に到着しました。アスラマに到着すると、子どもたちが遊んでいました。その姿はとても無邪気で、可愛かったです。子どもたちが私たちに「スラムシアン」と言ってくれました。これはインドネシア語で「こんにちは」

という意味で、事前研修で勉強してきたインドネシア語が使われていた事と、子どもたちが挨拶してくれたことに喜びを感じました。私たちは昼ご飯を食べた後にアスラマ内を見学し、それが終わると夕方の4時まで、各自班に分かれて作業をしました。私の班は日本語授業班だったので、より良い日本語授業をするために、教材にアレンジを加えました。また、現地学生のデオに授業の流れを英語で説明して、その英語をインドネシア語で訳してもらいました。4時になり、メンバー各自ホームステイ先に連れて行ってもらいました。私は親友の寧と現地学生のスシラと一緒にでした。寧とは元々仲が良かったので、同じ部屋で嬉しかったです。ホームステイ先の家族は笑顔であふれていて、私たちが快く迎えてくれました。ホームステイ先で少し休憩をした後アスラマに戻り、晩御飯を食べました。晩御飯を食べ終わると、スィクラマさんからアスラマについてのお話を聞きました。お話が終わると各自ホームステイ先に戻りました。宿泊先の家に到着してから私と寧とスシラは家族と会話をしました。事前研修で貰ったインドネシア語の紙を頼りに会話をしましたが、全然通じず、スシラに訳してもらいなんとか会話できました。会話の中で「バリ島の人は、晩御飯が終わると何をしますか？テレビを見たりするのですか？」と聞くと、「全員が全員そうではないが、大体の人は晩御飯を食べるとすぐに寝るよ」と聞いて、「そんなに寝るの早いん!？」と思いました。

3日目は朝食を食べた後、入村式と定礎式を行いました。いよいよワークが始まると思うと、絶対に完成させてみせる！という気持ちでいっぱいでした。多分、メンバーみんなもその気持ちだったと思います。私はメンバーの中で筋力には自信がある方なので、他のメンバーの2倍頑張ろうと思いつつ作業をしていました。ワークが終わると、腕がパンパンになっていて、将大くんと「僕たち頑張りましたね〜!」とお互いを褒め合いました。その後、休憩を挟んでから昼食を取り、4時ごろからプリンピンサリ教会で第30回IWC記念式典を行いました。5時半に終わるはずが6時

半前までかかり、正直、眠たくてあまり記憶がありません。記念式典が終わるとアスラマに移動し、記念祝賀会を行いました。子どもたちのダンスがとても可愛く、印象に残っています。また、晩御飯で出された豚の丸焼きは衝撃的で怖かったです。アスラマで豚を数匹飼っているのも、もしかしてここの豚を焼いたのか…と思いましたが、違うということなので、少し安心しました。三日目が終わり、ここまでをまとめると、少しずつみんなの顔色が悪くなっている印象がありました。特に初日から哲平が体調がすぐれないと言っていたので心配でした。

4日目の朝、アスラマに向かう途中で哲平と将大くんと涼くんとアンドリーと一緒にアスラマに向かいました。親友の哲平が今までで一番しんどそうな顔をしていて、結局哲平は朝食も食べずにゲストルームで寝こんでしまいました。とても不安でした。この日は哲平の他にも寝込んでいるメンバーがいて、環境に慣れていないのかなと思えました。朝はワークをしました。この日も将大くんと二人で「大きい石いっぱい運びましょうね！」と話して獅子奮迅の働きをしました。ワークが終わり昼飯を食べ終わって、3時から交流会の準備をしました。ダンスを完璧にしたいと思い、将大くんがメインとなってダンスの細かいところを修正したり、何回も練習をして本番に備えました。晩御飯を食べている最中、哲平が入院すると聞き、泣きそうなほど悲しくなりました。彼が一番このワークキャンプを楽しみにしていたし、誰よりも頑張っていたので、すごく悲しかったけれど、今は早く体調を治して一日でも早く戻ってきてほしいと思いました。晩御飯を食べ終え、7時から交流会を行いました。歌をうたったり、「だるまさんが転んだ」、「ネズミ捕りゲーム」などをしました。けどやっぱりメインはダンスで、緊張しましたが精一杯やり切りました。その場にいたみんなが盛り上がりすぎて、踊り終わるとたくさんの拍手を送ってくれ、とても嬉しかったです。

5日目の朝はプリンビンサリ教会を訪問しました。みんなの前で「アーメン・ハレルヤ」を歌いました。午後からは日本食の準備をしました。カ

レーライスと白玉団子を作りました。合宿でも作ったけれど、本番では約200人前を作ったので具材を切るのがとても大変でした。夕方の5時から、各ホームステイ先の家族を招いて食事をしました。私の家族は、美味しいと言ってくれて、白玉団子に至ってはおかわりをしてくれました。家族の笑顔が見られてとても嬉しかったです。

6日目は日本語授業をするためにムラヤ公立高校を訪問しました。不安もあり、本当に成功するのかと疑心暗鬼になりましたが、いざ教室に入ると、拍手で迎えてくれて自信がつかしました。学生みんな日本語が上手で、授業が思っている以上にスムーズに進みました。前半と後半の間の休憩時間に写真を撮ったりして盛り上がり、後半もかるたや4択ゲーム、告白ゲームをし、無事に終わりました。アスラマに戻り、昼食を食べてからワークをしましたが、いつもより作業内容が簡単でした。少し記憶が曖昧ですが、この日の晩御飯で出てきた鶏肉のせいかははっきりしませんが、6日目の晩飯後から7日目の朝にかけて数人が下痢や嘔吐にかかり、数人が病院に行きました。7日目の午前中は小・中学校訪問だったけれど、学校側の都合で延期になりました。それで午前中はフリータイムになり、残っているメンバーで体調を確認し合いながら少しノンビリしました。昼食を食べ、午後はワークのはずだったけれど、人数不足のためフリータイムとなり、子どもたちと遊びました。この日の朝、チャプレンが私たちに「このままだと、途中帰国もあり得る」と言った言葉がすごく怖かったのを覚えています。けれども、そんなことは起こらないだろうと思いながら、8日目になりました。前日と同じで午前中はワークでした。昼食の時間になった時、巖先生が放った「本日をもって、IWC30回は終了となります」という一言を聞かされたとき、私たちは言葉が出ませんでした。当然私も、急なその発言に戸惑ってしまい、何が起こったのかが分からない状況でした。泣いてしまったのはもちろん、入院している哲平に伝えなければと思い、すぐに哲平に今日のことを電話で伝えました。哲平は「嘘やろ？」と信じませんでした。私が感情を抑えきれずに泣きながら

話したので信じてくれました。昼からはフリータイムとなり、子どもたちが学校から帰ってくるのと同時に、スシラに訳してもらったインドネシア語で「明日の朝でアスラマを出発します」と子どもたちに伝えました。子どもたちも急な知らせに悲しんでいました。そのあとは最後の自由時間なので、子どもたちと写真を撮ったり走り回ったりして、いっぱい遊びました。4時ごろにホームステイ先に戻り、家族に明日で帰るという報告をしました。イブもパパも悲しんでくれて、イブから十字架マークのネックレスとブレスレッドをもらいました。そのネックレスは今でも大切に付けています。晩御飯を食べた後、7時からフェアウェルパーティをしました。館長さんの挨拶から始まり、歌やダンスをして、最後のアスラマの夜を楽しみました。

9日目の早朝、子どもたちが学校に向かう前にアスラマに行き、最後の挨拶をしました。私と寧の他にも数人いて、笑顔で子どもたちを学校まで見送りました。そして、9時過ぎにアスラマを出発して1時ごろにデンバサールのホテルに到着しました。2日間ホテルで待機と聞かされていたので嫌だなと思っていたのですが、とてもきれいなホテルでプールもあって、10日目も楽しく過ごすことができました。10日目には入院していたメンバーの哲平と朱理さんと怜矢さんが病院から帰ってきたので本当に嬉しかったです。11日目は観光をしました。そこで沢山買い物をしました。夜に空港に向かい、空港で現地学生みんなに感謝と別れの挨拶をしました。12日目は飛行機の中で迎え、学校で話を聞いて、両親と車で会話をしながら家に着きました。インドネシアで体験した出来事は、私にとってこれから生きていくうえでとても貴重な経験となりました。色々なハプニングはあったけれど、メンバー全員で乗り越えていったことで、仲間の大切さに気付くことができました。素晴らしいメンバーに出会えて本当に良かったです。

色々なことを感じられたIWC

経営学部 2回生 植田 哲平



僕たちは、8月24日から9月4日までの間インドネシアのバリ島へ行ってきました。この日のために四月から現地の小学生や学生たちに日本語を教えるプログラムや交流会での出し物、インドネシア語、インドネシアの文化など、ワークキャンプについて必要なことや知識を毎週金曜日の5日目に集まり、考え、学んできました。

IWCのメンバー20人は現地での活動を考えるため出発前に、日本語班、交流班、日本食班、しおり班に分かれました。その中で私が所属していたのは、交流班でした。交流班の活動内容は、子どもたちを楽しませることが大前提なのですが、子どもたちの人数、交流する場所の広さなどが全くわからない状況だったので、内容を考えるのに大変苦労しました。しかし、全メンバーが自分のできることを考えて動き、ダンスを考えるとときもダンス経験者ではないメンバーが教えてくれるなど、みんなの協力があるチームでした。その後合宿で日本語プログラム、交流の歌やダンスの練習、日本食の試食会などを行いメンバーの絆がより深まったところで、8月24日の出発を迎えました。

1日目はほとんど移動の日でホテルに着いたときはもう薄暗くなっていました。ですが、移動中のバスからの光景は日本とは全く違う光景でとても新鮮でした。車やバイクの数がとても多く、よく事故を起こさないと感心しました。ホテルはきれいだったのですが寝る前に入った風呂は水しか出ず辛かったです。インドネシアの人たちはマンディという水浴びをするので仕方ないと思っていましたが、後々インドネシアの学生に聞くとホテルの風呂はお湯も出るはずだから水しか出ない

のはホテルがおかしいんだと聞きました。日本ではありえないようなことを初日から体験しました。

2日目は朝からプリンビンサリ村へホテルから約4時間かけて移動しました。村に着くと向こうのスタッフさんや、幼い子どもたちが「WELCOME TO BLIMBINGSALI」と温かく迎えてくれ、僕たちはすぐに子どもたちから人気の存在となりました。昼食後、子どもたちや、施設の責任者さんたちがアスラマの施設の案内に連れて行ってくれました。一番驚いたのは子どもたちが施設内で豚を育て、ある程度育った豚を業者に売っていたことです。少し状況は違うかもしれませんが、子どもが半年間世話をした豚を売るという、日本では映画化されていたようなことも普通にやっているインドネシアの子どもたちはたくましく感じました。人間が生きていくことには欠かせない大切なことなんだと改めて感じました。見学後、日本語プログラムと交流について約3、4時間のミーティングを行いました。そして、子どもたちとサッカーを楽しみました。個人的にはサッカーで子どもたちが私の名前を覚えてくれ「テッペイ、テッペイ」と呼んでもらえたことがこのワークキャンプの中でも特に印象に残り、嬉しかったことです。サッカーの後も「明日またサッカーしよう!」と話しかけてくれたり、手を繋いで一緒に写真を撮ったりなど子どもたちが懐いてくれて本当に感動しました。

その後夕方頃に、各自ホームステイ先へ移動しました。ホストファミリーとのコミュニケーションは不安だったのですが、同じ家に泊まったインドネシア学生のアンドリーのおかげもあり、各自持っていった日本のお菓子や、カップラーメン、手ぬぐいなどのお土産を無事渡すことができ、喜んでいただけました。

三日目は実質、僕がプリンビンサリ村で活動できた最後の日でした。この日の午前中から僕たちの本当に頑張るべきワークが始まりました。大きい石や、バケツ一杯の砂を約7、80メートル運び続けました。男子も女子も関係なく全員で力仕事をし、さらに子どもたちも進んで手伝ってくれま

した。僕は情けないことにこの日の一回だけしか参加できなかったのですが、みんなすごくいい雰囲気です。しんどかったけど充実した楽しいワークでした。ワークを最後までやり遂げられなかったことは今でもすごく悔いが残っています。昼食後、一度ホームステイ先へ帰り休憩し、夕方に教会へ移動し30周年記念式典と祝賀会に参加しました。その後の夕食時、食卓にはブタの丸焼が乗っていました。昨日生きている豚を間近で見た後だったのでさすがに驚いてしまいました。この日の夕食は一部の子どもたちが民族楽器を演奏してくれながらの食事だったのもあってか、一緒に食べた学生、引率の先生方、子どもたち、現地のスタッフ全員がわいわいして盛り上がり、最高の夕食でした。夕食後、交流班のメンバーは次の日の交流会のために残って現地の子どもたちが披露してくれる出し物などについての打ち合わせをしました。いきなり予想外の注文をされ、大変な思いをしましたがメンバーやアンドリーたちのおかげもあって何とか話をまとめることができホッとしました。次の日の交流会が楽しみだったことを覚えています。

その後から四日目の明け方までは、腹痛や嘔吐でほとんど眠ることができず朝の集合時間に現地の看護スタッフの美和さんに相談したところ、熱を計ってもらい38℃近い熱があったので、夕方から予定されている交流会のために寝させていただくこととなりました。交流会には絶対に出てやると思っていましたが、何を食べても吐き、熱も上がり続け、夕方に村から4時間ほどかかる病院へ点滴を打ちに行くことになりました。僕が病院へ行くと知った同じホームステイ先のメンバーたちがスーツケースなどの荷物の準備をして遠い中持ってきてくれました。出発前にもみんな集まり励ましてくれました。しんどいし何よりめっちゃ悔しかったけれど、みんなの温かい言葉のおかげで自然と元気が出て笑顔になれました。病院への付き添いで来てくれた前田さん、夜中に運搬してくれた現地スタッフのフォルマンさんも含め皆さんには迷惑をかけました。本当に感謝しています。

夜の10時過ぎに病院に着き即入院となり、検査結果からアメルバ赤痢と診断され三日から五日ほど入院が必要といわれました。情けない気持ちになり、かなり落ち込みましたが、同室だった前田さんが励ましてくれたおかげもあって少しずつ気持ちも楽になっていきました。五日目の夕方くらいに交流会も大成功で盛り上がったと聞いた時は本当にうれしく、一人病室で喜んでいました。一人少ない状況でも成功させてくれた交流班、手伝ってくれたほかのメンバー、とにかく全メンバーに本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

入院中のことは毎日同じ場所で同じことの繰り返しだったのであまり覚えていませんが、病院食にステーキとパスタが出てきたときはさすが海外だと感じました。8月30日にほかのメンバーも体調不良で入院してきました。そしてその翌日、大隣くんから電話がかかかってきて途中帰国が決まったと聞きました。他のメンバーもすごく落ち込んでいたらしく、入院してしまった身としてすごく責任を感じました。僕は少しでも早く村のみんなに会うことだけを考えて病気を治そうと入院していたのですが、それが叶わないと聞いて非常につらかったです。何よりプリンピンスリの子どもたちにもう会えないと思うと寂しく、悔しかったです。ですがそんな僕を勇気づけようと、子どもたちからのメッセージ動画や交流会の様子を送ってくれました。同じように悔しい思いをしていたはずのほかの入院メンバーも声をかけに部屋まできてくれたり、本当に色々な人に支えてもらいました。それだけで本当に楽になりました。

明日退院できると三日連続で言われ続けるなど、なかなか退院できませんでしたが、入院七日目の夕方ようやく入院していたほかの学生や先生と共に退院することができました。入院中ずっと同じ部屋で世話をしてくれ、話をしてくれた前田さん、忙しい中わざわざ何度も病院に足を運んでくれたスイクラマさんと現地のスタッフさんには本当にお世話になり、感謝しています。そして退院後、デンパサールのホテルにいた他のメンバーと一週間ぶりに再会したときには、みんな明るく迎えてくれ、すぐに溶け込むことができました。

た。プリンピンスリでの話や交流会や日本食をふるまった時の様子、日本語プログラムで日本語を教えた時の様子などたくさん話を聞き、落ち込んでいた気持ちを少し切り替えて楽しむことができました。

十一日目、最終日、この日はショッピングモールで各自買い物をし、その後タナロット寺院という場所へ行き、市場で買いものをし夕食後空港へ向かい帰国しました。空港で、すごく仲良くなれたインドネシアの学生やスタッフとお別れでした。時間がなかったのかあっさりお別れになってしまい、また、全体での集合写真もなかったのが少し悔いが残っています。

今回のIWCは30回ということもありたくさん関係者の方々にご協力いただき、送り出させていただきました。しかし仕方がないことですが、大学の判断で途中帰国になってしまったことはすごく残念で悔しいことです。このIWCで僕はほかのメンバーができない経験である入院を1週間したことで、気づけたことがあります。それは、僕たちは本当にたくさんの人たちに支えられているということです。同部屋だった前田さんの元に朝早くから、何度もキリスト教センターの職員さん、大学の職員さんから電話がかかってくることも知っています。これだけの多くの大人たちが僕たち学生を支えてくれている、という当たり前のことに僕はこれまで参加してきたプログラムでは気づけていませんでした。そのため、自分たちの周りにいない人への感謝の気持ちは身近な人たちに対してより薄かったです。しかし今回の経験から、僕たちの知らない多くの人が、学生がインドネシアで少しでも良い経験ができるように支えてくれていたことに気づけました。入院している時は、入院してマイナスなことばかりだったと感じていましたが、その点に気付けたことは今ならプラスなことだったと思うことができます。これから生きていく上でも、感謝の気持ちは本当に大切だと感じることができました。今後の事後研修でも積極的に取り組んで、30回らしい元気な姿を見せることが支えてくれた方々への恩返しだと思いつつ頑張っていきたいと思っています。

最後に、迷惑ばかりかけたチームsenyum（インドネシア語で『笑顔』の意味）のみんなをはじめ、日本や現地と一緒に計画した交流班のメンバー、ほかの30回の全メンバー、僕たちを支えてくれた皆様、本当にありがとうございました。

このままでは終われないIWC

国際教養学部 2回生 河本 寧



私は今回IWC30回に参加した。キリスト教センターに初めてみんなが揃い、授業を受けるようになったとき、正直私がこのメンバーとやっていけるのか不安で仕方なかった。去年にIWCに参加した友達から揉め事は必ず起こると言われていたのもあったからだ。最初にしたチームビルディングでまともに他の人と話すことができ、私が思っていたよりみんなフレンドリーでユーモアがあり、なにより自分の考えを持っていた。この人たちとIWC30回を成功させたいと思えたのはこのときが初めてだった。このときに元々仲が良かった同い年の2人と同じチームにならなくて本当に良かった。由比先生によるインドネシア語の授業では、最初の方は本当に使う場面があるのか、など授業に対する疑問の方が大きかったのだが、今思うことは、使うことばかりで、むしろ英語よりもはるかに使う場面が多く、もっとちゃんと覚えていくべきだったと思う。何回かチームビルディングや授業を行っていても個人的にはまだみんなと打ち解けることはできていなくて、打ち解けることができたのはやはり合宿だった。みんなと話す機会がたくさんあり、何より全員で日本食をつくるのが良かった。ダンスの練習でもみんなの新たな一面を見ることができた。将大君のダンスの

実力や、れいやさんが意外とマメな事など、合宿は自分が思っていたより大事な行事であった。班分けでは私は交流班になった。これも去年行った友達から、班では自分たちで決めて何回も集らなければいけないと聞いていて、いまいちびんときていなかったが日が経つにつれてその意味がわかった。交流班では哲平君がリーダーとなった。このときから哲平君がいろいろと引っ張ってくれていた。将大君はアイデアマンで私たちが思いつかないようなことを次々として出してくれていた。愛琴さんは鋭い指摘をしてくれていろいろと改善することができた。将大君はみんながやりたがらないようなことを引き受けてくれて、作業を順調に進めることができた。私は補佐できているかわからなかったが補佐的位置にいた。私にはなにが足りないのかずっと考えていたが、私には決断力が足りないのだと。それも正しい判断ができるようになっていけなと。そのためには周りの状況をしっかりと見ておくことが必要だとIWC中に気づかされた。日本語班の作業を知る機会があったが、日本語班が準備に一番手間ひまをかけていたように感じた。集まる回数も交流班の倍くらい集まっていて、どのように説明すればわかりやすく日本語を伝えられるか必死に考えていた。交流がちゃんとできるかなど不安がたくさんあったが気づけば出発の日がきた。出発のときには馬詰さんが空港までお見送りに来てくださっていてなんとなく緊張がほぐれた。そして、六時間くらい飛行機に乗りバリ島に着いた。降りて思ったのは日本とは少し違った暑さだったことだ。ホテルは思っていたよりはるかにきれいで、プール付きなのが驚いた。夜には30回の記念行事に参加される先生方のあいさつと、インドネシア人学生との顔合わせがあった。このときは緊張してしまってインドネシア人学生と話すことはできなかった。この日の夜に交流班でのミーティングをし、さらに緊張が少し高まった。次の日になり、プリンピンサリ村に移動するバスでようやくインドネシア人学生と話すことができた。このとき初めて喋ったのがデオであった。このときはまだプリンピンサリ村はどういうところなのか全くわかっていなかった

が、子どもたちと仲良くなれるかという不安よりは楽しみのほうが大きかった。そして、プリンピンサリ村に到着し、ホームステイ先を訪れた。ホームステイをするのは高校の修学旅行以来だったし、なにより言葉が通じないというのが不安でしかなかった。一緒にホームステイをするようになったのがスシラというインドネシア人学生で少し喋り、この人はいい人だと直感的に感じた。そしてホームステイ先に行ってまず気づいた事が、会話はほとんどインドネシア語であるということ。スシラはあまり日本語が通じないということ。このときもっと由比先生にインドネシア語を教わっておけばと悔いた。後タイプから聞いたことなのだが、「プリンピンサリ村の人は晩ご飯を食べ終わるとテレビを見る習慣がなく、すぐに寝る」と聞いたときは、隣君と2人して驚いた。インドネシアでは夜に寝るのはとても早く、朝起きるのもとても早いと聞いていたが、そんなことないだろうと少し疑っていた。だが、話を聞いて本当に夜は8時くらいには寝て、朝は4時くらいに起きるのだと思い知らされた。晩ご飯はアスラマの人たちが用意してくれていた。アスラマにいる間ずっと朝、昼、晩、とご飯を用意してくれたアスラマの食事担当の人たちには本当に感謝だ。インドネシア料理は口に合うか不安だったけれど、思っていたよりずっとおいしくてばくばく食べてしまうほどであった。記念式典では豚の丸焼きがでてきてとても驚き、インドネシアでは食に対する感謝を改めて考えさせられた。ここでの秀樹君のあいさつには感激した。自分も彼のように丁寧なあいさつができるようにならないといけないと考えさせられるあいさつだった。ワークは思ったより単純作業だったがこれがなかなかしんどかった。アスラマの子どもたちはグイグイ話しかけてくれるのですぐに仲良くなることができた。ワークを手伝ってくれる子もいて、ジェスチャーや顔芸でもっと仲良くなることができた。次の朝、哲平君が夜に吐き、ワークに参加できないと聞きとてもショックだった。昼を過ぎても体調は良くなり、入院することになってしまった。しかも、この日が交流会であり、それに参加できないと分

かったときは悔しかった。今まで5人でやってきたのだから、本番も5人でやりたかった。そして、哲平君が抜けた分を埋め合わせるためにいろいろと調節し少しばたばたした。ダンスも最終チェックを行ない、本番が近づくにつれ緊張も高まっていった。ついに交流会が始まった。このときに通訳してくれたアンドリーには本当にお世話になった。交流会では、哲平君がでられない分、将大君や愛琴さんが奮闘してくれて、大きな問題もなく交流会を成功させることができた。最初は時間が余るのではないかと心配していたが、そんなことはなく、むしろ足りないほどでもっと遊びたかった。男、女それぞれ頑張ってきたダンスも盛り上がり、とてもテンションが上がった。ダンスの練習を引っ張ってくれた将大君と愛琴さんには感謝しきれないほどだ。無事に一日を終えて夜はグッスリ寝てしまった。次の日は礼拝で、インドネシアも日本とそんなに変わらないだろうと思っていたが、そんなことは無かった。まず、お祈りがとても長かった。インドネシア語だったから何を言っているのか気になりつつ礼拝は終わった。アスラマでは意外と自由時間が多く、子どもとふれあえる時間が多かったので多くの子どもたちと仲良くなることができた。この日は日本食を作る日で、この時は子どもたちよりも先輩、後輩と話すことが多く、さらに仲良くなれた気がした。このときに使った豚の肉がとても大きく、ここでも命について考えることとなった。無事に作り終えて食事が始まった。イブとババは「おいしい」と言ってくれておかわりしてくれた。デザート白玉団子もおかわりしてくれてただただ嬉しく、満足だった。子どもたちもおいしそうに食べてくれていて、見ているこちらまでお腹いっぱいになった。この日も哲平君は帰ってこれず、あとからアメルバ赤痢と知ったときは絶望だった。この日の夜はみんなでミーティングをし、その後もチームガルーダで次の日の高校での授業の最終確認をし、また交流会前のあの緊張感が出てきた。ホームステイ先では朝起きると、テーブルにピサゴレンや焼きそばと温かく甘い飲み物が毎日置いてくれていて、今思い返すととても優しいイブとババ

だった。思い出すと会いたくなってくる。ついに高校の授業の朝を迎え、どうなるかと不安もあったが、同時になんとかなるとも思っていた。実際その通りで、秀樹君のあのノリの良さでクラスのみんなどもノリが良く盛り上がった。授業をしているとだんだん楽しくなってきたあつという間に終わってしまった。最後にみんなで写真を撮ってLINEも交換したりして終始楽しかった。この調子で看護学校の交流会や小・中学校での授業も気合いを入れていこうと思っていた。しかし、その矢先にIWC30thが中止になり、途中帰国が告げられた。何日か前から心配はしていたけれど、さすがに無いだろうと思っていた。このことが告げられたときはまだ本当に帰るとは実感できず、その言葉を飲み込めていなかった。悲しいというより、喪失感の方が大きくぼーっとしていた。周りの先輩や後輩が泣いているのを見て本当に帰るのだと悟った。その時は悲しいというより怒りがこみ上げてきた。それで少しでも後悔しないために子どもたちと目一杯遊んだ。夜には離村式をしてくれたけれど、これでもかというくらい帰りたくなかった。子どもたちから折り紙の手裏剣や手紙をもらったときは本当に嬉しかった。それと同時にワークが完成していないことに対して申し訳なく感じた。その後泊まったホテルは、今まで泊まった中で一番豪華なホテルで正直テンションが上がった。帰るのは嫌だったけれど、もうここまで来たら楽しまねばと切り替えて思いっきり楽しんだ。このときにやっと哲平君が帰ってきて、やっとかという気持ちと悔しいのではと感じた。ここでも先輩、後輩と冗談を言い合えるほどに仲良くなることができた。今回のIWC30回はメンバーにも恵まれたし、リーダーの演説やメンバーの一人一人に気を配ってくれるところなど見習わなければいけないところもたくさんあった。全然やるべきことができぬまま帰ってきてしまい、来年もこのプログラムをもう一回やりたいぐらい悔しかったけれど、来年必ずアスラマの子どもたちに会いに行き少しでもこの悔いを減らしたい。これでIWC30回は終わらないです。

異文化に触れて

国際教養学部 1回生 井上 愛琴



学生20人、引率4人の24人で24日の午前に関西国際空港からインドネシアのデンパサールに向けて出発した。機内食のご飯の味が美味しくなかった。でも隣でしおりさんが間食していてちょっとビックリした。デンパサール空港に夕方に到着しバスに乗りホテルに向かった。ホテルまでの道のりは長かったが車の中から見える景色が新鮮だった。バスはかなり揺れて、道が整備されてないところでは乗り心地は最悪だった。普段は乗り物酔いはしないのに少し酔ってしまった。バスの乗り心地だけで日本との違いを感じた。ホテルに着いて出してくれたオレンジジュースが甘すぎてその甘さが衝撃的だった。ホテルの最初の印象は「意外と綺麗！」だった。部屋に移動して「部屋も綺麗」って思ったが、匂いが何となくトイレ臭かった。夕食前に、現地のスタッフの方とインドネシア学生で自己紹介をした。前研修で勉強したインドネシア語を、初めて使ってあいさつしたが、少し緊張した。「夕食を食べる前のお祈りは長い！お腹が空いてるから早く！」と思った。夕食はそんなに美味しくなくて機内食の時に少し覚悟はしていたけれどあまり食べれなかった。でもかんなさんが大量に取って食べていた。食後部屋に戻って、交流班で日本語の説明文を簡単な英語に訳した。その後シャワーを浴びたが、ホテルだからお湯がでると思っていたが水しか出なくて凍えた。次の日から始まる村でのホームステイが始まるので楽しみだったけれど、少し不安に思った1日目のスタートだった。

2日目の午前、プリンビンサリ村への移動だった。途中の休憩でみた海にテンションが上

がった。プリンビンサリ村到着して、更にテンションが上がった。着いて思ったことは、犬が放されていて少し怖いということ、ハエが多い！小さい子どもが可愛い！ということ。

お昼ご飯は意外に食べられた。その後、アスラマ内の見学をした。子どもたちと一緒に見学した。言葉は自己紹介と名前を聞くことしか出来なかったけれど、ハイタッチしたり握手をしたり、手を繋いだりして子どもたちに癒された。お花をくれて嬉しかった。その後は子どもたちはお昼寝をして、私たちはグループごとに打ち合わせをしたり、インドネシア語を勉強したりした。子どもたちが掃除をしているとき、近くを掃除していた男の子に話しかけてみたら恥ずかしがっていて可愛かった！少し時間が経ったあと、その男の子が来てくれて年齢を聞いたり名前を聞いたりして、仲良くなれて嬉しかった！その子の名前はエクセル。年齢は12歳。英語が少し話せて賢い子だった。エクセルに誘われてサッカーをしている所に行って最終的に大人数でサッカーをした。てっぺいさんが人気者だった。ホームステイ先に行く時間になって、ホームステイ先で過ごすメンバーが変わっていてビックリしたけれど、私はしおりとひろみと一緒にだった。しおりとは元から仲良しだったけれど、ひろみとはそんなに絡んだことがないので、これから一緒にホームステイ先で仲良くできるって考えたら気分はルンルンだった。ホームステイ先には4人の女の子たちが連れて行ってくれた。なぜか女の子たちにめっちゃ笑われた。しおりとひろみには、「メイクが濃い過ぎだから笑われている」とかいじられながら子どもたちと話ながら楽しい移動時間だった。ホームステイ先に着いてホームステイ先の人に挨拶をした。とても良い人そうで安心した。お土産でお漬物をさしあげ、喜んでくれて嬉しかった。美味しかったか感想を聞き逃したのが今思うと心残り。夜は夕食後にアスラマについての話を聞いた。アスラマで受け入れている子どもたちは、両親がいない子、片親がいない子、親から暴力を受けた子、家が貧しい子、ということ。帰国して思うことはどの子どももそんなこと感じないほど元気で笑顔で純粹だった。

3日目の朝は、ホームステイ先でイブが紅茶とお菓子を出してくれた。紅茶が甘すぎて3人で盛り上がった。アスラマに行き午前は入村式があった。女の子が綺麗な衣装を着てダンスを見せてくれた。男の子たちが楽器を弾いてくれた。「これが異文化か、海外に来るとやっぱり日本とは違うことばかりだな。」と思った。その後ワークをして砂と石を運んだ。想像以上に体力を使ったので疲れた。午後は教会でIWC30回の記念式典があった。印象に残っているのは、綺麗な女性が出てきて踊っていたのとチャプレンが登場したシーン。その後アスラマに戻って、昨日より年齢の小さい女の子たちのダンスをみた。夕食は初めて豚の丸焼きをみた。豚の皮に毛が生えていて衝撃的だった。チャレンジして食べてみたが美味しさより毛が気になって味が分からなかった。

4日目の午前はワークだった。子どもたちも手伝ってくれて楽しく作業ができた。午後からは夜の交流会の準備だった。交流班でまとめてくれていたてっぺいさんがいなくて不安だったが、2回生のこうたろうさんが色々手伝ってくれて感謝です。男女に分かれてダンスの練習をした。十分に練習していなかったのと、初めてみんなと踊る子もいて焦った。さきちゃんやゆうかさんがみんなに集まるように声をかけてくれた。急遽変更した振付のところもあったが上手くいきよかった。子どもたちのダンスはすごく可愛かった。歌もとてもよかった。ゲームはネズミ捕りが盛り上がって、だるまさんが転んでも盛り上がって本当によかったし子どもたちと更に仲良くなれて嬉しかった。ちゃんと成功するかどうか心配だったので、成功して良かったし感激した。ひろみとしおりがいつも励ましてくれて「ホームステイ先のメンバーがこの2人で良かった」と思った。

5日目の朝は教会に行った。座った席が南さんとれいやさんの間で、2人とも絡みが面倒だった。説教が正直長くて、何を言っているかわからなくて意識が何度か飛んでしまった。午後からは日本食の準備だった。準備までの間は、ホームステイ先に帰ってイブに日本食パーティーのことを話した。チームMatahariは玉ねぎを切る担当だった。

楽しかった。イブと食事しているときに初めてたくさん話すことができ嬉しかった。インドネシア語は話せないし、英語は伝わらないし、伝えるのは大変だったけれど伝えることの楽しさを知った。こちらが真剣に伝えようとしたら相手も真剣に聞いて理解をしようとしてくれてるところを見ると「私ももっといろんなことを伝えたい！話したい！」と思った。カレーもEnak(=おいしい)と言ってくれて嬉しかった。白玉団子はあんこがインドネシアにも似たようなものがあると教えてくれた。日本食班がすごく頑張っていた。日本食パーティーも成功して良かった！

6日目の朝は前日の日本食パーティーのときにイブと話していたインドネシアのお菓子をイブが出してくれた！話していたことをキチンと覚えていてくれて嬉しかった。午前は高校訪問をした。Matahariはゆうかさんが体調が悪くて参加出来なかった。インドネシア学生はアンドリーが一緒だった。アンドリーは日本人って言われても通用するレベルで日本語が上手い！高校生は想像よりもノリが良くて「絶対シラケそう」と話していたゲームまでが盛り上がってよかった。高校生は基本的なあいさつとお表とかは完璧でビックリした。4択ゲームも盛り上がった。カルタは私は女の子のグループに入った。みんな可愛かった。告白ゲームもみんな照れていて可愛かった。最後に高校生と集合写真を取れて嬉しかった。IWCメンバーでの集合写真も取れてよかったけど、高校での写真が唯一の集合写真になってしまい残念だった。午後は軽くワークだった。

7日目は小学校、中学校訪問が延期になった。途中帰国で最終的に訪問することが出来なくて残念だった。だんだん体調を崩す人が多くなり、雰囲気も少し暗くなり始めた。同じホームステイ先のしおりも体調を崩して病院に入ってしまう心配だった。一番仲が良かったので寂しかった。体調を崩している人が多くこの日はワークはできなかった。

8日目昼食時に、途中帰国することになったと先生から聞きショックだし、とても悔しかった。もっと子どもたちと遊びたかったし、バニユボ村

にも行きたかったし、小学校、中学校訪問も楽しみにしていたので帰りたくなかった。ワークも中途半端な状態だったので最後まで完成させたかった。途中帰国の話を聞いたので、午後は子どもたちといっぱい遊んだ。仲良かったエクセルが手紙をくれたり、インタンという女の子が手紙をくれたり、インドネシアに来て良かったと思ったのと同時に途中帰国が本当に悔しかった。子どもたちと遊ぶのが本当に楽しくて帰りたくなくて気持ちが追いつかなかった。最後のお別れ会のときもエクセルが隣にいてくれて、前で女の子たちが手を振ったり話してくれて、横で男の子が手をつないでくれて、私の中の大切な思い出になった。いっぱい写真を撮ったがそれでも足りなくて、病院で入院している人が復活する前に途中帰国の決断がされて悔しかった。

9日目、最終日は朝からドタバタだった。ホームステイ先のイブにお別れの挨拶をして、イブが本当に優しくてもっといっぱい話したかった。アスラマでお別れをして、バスに乗りデンパサールのホテルに向かった。もう切り替えて最後まで楽しもう！と思った。バスの中でみんな寝ている中、かんさんが賛美歌を熱唱していた。ホテルに着いてバスから降りたら溝にはまり、片足がびしょびしょになった。ホテルはとても綺麗だった。1日目のホテルとは大違いだった。検便採取の説明を受け、即検便を出し気分はスッキリだったが、検査結果がでるのが怖かった。結果が出るまでの何時間かアメーバ赤痢に怯えていた。プールに飛び込んで遊んだり、ご飯も美味しくて久しぶりにちゃんとご飯を食べられた。ホテル2日目もプールに飛び込んだ。マッサージの人をお願いしてマッサージをしてもらい、癒された。最終日、ショッピングモールで買い物をした後、ヒンズー教のお寺を訪ねた。かんなしおりとさきと私は、お店でずっと値切る交渉を楽しんだ。初めての体験だった。インドネシアでは初めての体験をいっぱいした。途中帰国は悔しいけどIWCに参加できて良かったです。

インドネシアで感じたこと、学んだこと

国際教養学部 1 回生 五十殿 詩織



8月24日から9月4日までインドネシアに行ってきました。当初予定していたのは8月24日から9月10日まででした。しかし、体調不良になられた方が多く、アメルバ赤痢という病気になられた方もいたので、早期帰国という形になりました。それでも私にとっては一生忘れられない11日間になりました。

IWCのメンバーが決まったのが4月です。面接と筆記試験がありました。私は4月に世界市民の授業を受けていて、昨年のワークキャンプの様子が紹介されていました。それを見て感動し、行きたいと思いました。そして4月の後半から事前学習が始まりました。毎週金曜日に16時40分から18時10分までありました。保健室の今井さんの健康オリエンテーションだったり、宮嶋チャプレンの授業だったり、由比先生のインドネシア語の授業を受けました。正直私は「インドネシア語って本当に使うのかな～」とか思っていました。けれども、いざ行ってみると本当にたくさん使いました。プリンビンサリ村での子どもたちとの会話や、ホームステイ先のイブとの会話などです。もっとちゃんとたくさん勉強をして、もう少し話せるようになっていたらよかったと思いました。そこは少し後悔しました。でも授業のおかげで、挨拶や単語でコミュニケーションをとれたので嬉しかったです。インドネシアで行動する班決めをする日がありました。私はリーダーがあかりさんの班です。IWC全体のリーダーは南さんになりました。夏休みには1泊2日の合宿もありました。学校の合宿所に泊まりました。合宿ではプリンビンサリ村で作るカレーや白玉団子をみんなで作り晩ご飯に

食べました。時間内に美味しく作れました。だけど本番はその10倍の量を作る予定だったので、時間内に作れるかが心配でした。4月から本当にあつという間でした。ホームステイの時の班も決めました。愛琴と同じ班になり、ホームステイ先へのお土産を買いに行きました。日本っぽいものがありそうという理由で京都へ行きました。お漬物のパックや絵葉書にしました。

1日目は8時30分に関西国際空港に集合しました。遅れてくる人は誰一人いなくて出だしは順調でした。お見送りに馬詰さんと由比先生が来てくださっていました。17時ぐらいにデンバサールに到着しました。時差は1時間、日本が進んでいます。空港からホテルまでの移動は車でした。まず驚いたのは車やバイクの車間距離です。今まで見たことないくらい狭く、バイクの量がとても多かったです。対向車が来ていても平気で追い越していたり、これでよく事故が起きないなと感心しました。バイクに3人で乗っていたり、子どもが大人の前で立ちながらスマートフォンをいじっていたりもしていました。信号待ちで車が止まっているときには、小さい子が車やバイクの間を歩きながらお金をもらうためにうろうろしていました。日本では見たことのない光景を見ながらホテルに向かいました。到着後、これから行動を共にするインドネシア学生の方たちと自己紹介をしました。聞き慣れない名前が多かったので覚えられるかなと思っていたのですが一緒に行動しているうちに、自然に覚えることができました。アンドリーというインドネシア学生の方がいて、日本語の上手さにびっくりしました。そして現地での初めての食事はホテルでの晩ごはんでした。白ごはんは聞いていた通りバサバサでした。でも普通に食べられました。おかずも美味しく頂きました。一番気になっていたのはお風呂とトイレです。お風呂は、浴槽がなくお湯が出ないと聞いていました。その通りでした。トイレはトイレトペーパーがなく、シャワーが付いていると聞いていました。だけどホテルにはトイレトペーパーが付いていて安心しました。水のシャワーは寒くて辛かったです。ドライヤーがなく髪の毛がなかなか乾か

なかったので寒かったです。

2日目からはプリンビンサリで生活させてもらいました。車で移動し施設に到着しました。そして早速子どもたちと一緒に遊びました。サッカーをしたり、おんぶをして追いかけてっこをしたりしました。サッカーが上手くてすごかったです。言葉はあまり通じないけど、思っていた通りとても可愛くて一緒になって楽しみました。施設での食事は前に、おかずを並べてくれていて自分が好きなだけ取るというビュッフェ形式でした。おやつも置いてくれていて、美味しく頂いたものがたくさんありました。ただハエの量は異常な多さでした。ハエが多いとは聞いていましたが、正直ここまで多いとは思っていませんでした。特にごはんの時は多くて常にごはんや、自分にハエが付いていたような気がします。だけど、そのハエにも慣れてきました。そして施設を見学させてもらいました。子どもたちが寝る部屋や図書室を案内してもらいました。食用の豚もいました。見学し終わった後は、子どもたちにそれぞれのホームステイ先へ手を引いて連れて行ってもらいました。10軒あるはずだったホームステイ先が急遽9つになったということで、ひろみちと愛琴と私の3人の班になりました。楽しくなりそうと思いました。私はミシェルという可愛い女の子に連れて行ってもらいました。日本語と一緒に1, 2, 3, . . . と20ぐらいまで何度も数えながら行きました。ミシェルは10以上数えることが出来て心からすごいなと思いました。私はインドネシア語で3までしか数えられません。そうしているうちに10分ぐらいすると到着しました。大きくて綺麗な家でワクワクしました。お隣は南さんとれいやさんのところでした。私たちのホームステイ先の方はブトゥさんという方で、イブが出てきてくれてまず自己紹介をしてお土産を渡しました。優しい方で笑顔の素敵なイブでした。思った通り優しい方でした。部屋にシャワーもトイレもベッドも全て揃っていました。飲料用の水をたくさん用意してくださっていました。ベッドは3人で1つでしたがそれはそれで楽しかったです。シャワーは3日目くらいからはもう慣れて余裕でした。髪の毛が乾かないまま寝る

のも慣れました。部屋に大きなヤモリが普通に張り付いていたり、ベッドの上にアリが歩いていたり初めは嫌だったけど少しは慣れました。イブは毎朝お茶とおやつを出してくださいました。お茶は日本のお茶よりも少し甘かったです。寝坊した日もイブが出してくれたおやつを食べていきました。私はもちもちした食感のおやつが一番好きでした。洗濯物は毎日手洗いだったのですが、こんなにも面倒なことだとは思っていませんでした。洗濯機の有難さが分かりました。プリンビンサリ村の星は今まで見た中で一番きれいな星でした。本当にたくさん星を見ることが出来ました。1日目の夜スイクラマさんからこの施設についてのお話を聞きました。施設には、親がいなかったり、貧しくて生活が困難だったりする子が優先的に入れるそうです。でもまだまだ待機児童がたくさんいるそうです。スイクラマさんもこの施設の出身だそうです。子どもたちは、そんな境遇を感じられないくらい明るいし、よく笑う子たちでいっぱいでした。

3日目からはワークを開始しました。砂を運んだり少し大きな岩を運んだり、ごみを拾ったりしました。私はレーウィという13歳の女の子と一緒に砂を運びました。その時にもっとインドネシア語を話せたら良かったなと本当に思いました。だけど簡単な英語や、簡単なインドネシア語、身振り手振りでもなんとなく伝わっていたのですごく楽しかったです。私よりも小さいのに、英語力は私よりもあり尊敬しました。

記念祝賀会では豚の丸焼きが出てきて驚きました。向こうの方々は、豚の丸焼きが最大のおもてなしだそうです。日本でも豚は食べるけれど丸焼きを見たのは初めてだったので、かわいそうというのが見た感想でした。匂いも気になり、皮を食べようとしたけど毛が見えて食べられなかったです。

交流会は交流班の方たちのおかげで大成功でした。男子のパーフェクトヒューマンはすごく盛り上がっていたし、女子のグッキーは今までで一番楽しかったです。交流会でもずっとレーウィと坐っていました。子どもたちの歌やダンスはたま

らなく可愛く上手でした。「ねずみとり」や「だるまさんが転んだ」をしました。子どもたちが楽しそうにしてくれて嬉しくなりました。

日本食をイブや子どもたちに作ったときは、ジャガイモの数が予定より少ないというハプニングもありましたが、美味しく作れました。心配していた時間も間に合いました。野菜を炒めるときは暑くて汗が出ました。白玉団子も美味しくできました。そして作り終えたらそれぞれの家族が来て、家族ごとで食べました。「エナック」(おいしい)と言ってくれてよかったです。おかわりしている子どもも嬉しかったです。

ムラヤ公立高校に行って授業をした時は、盛り上がるかどうか心配をしていましたがとても盛り上がりました。アンドリーが日本語ペラペラなのですぐこちらの意図が伝わり、スムーズに進めることが出来ました。あかりさんにも頼ってばかりでした。

6日目の夜に体調を崩した私は、愛琴やひろみちやねいさんや隣さんに助けてもらいながら看護師の美和さんの部屋に行きました。美和さんが寝ては具合が悪くて起こし、寝ては起こしと今思えば申し訳ないことを一晩していました。次の日、同じように体調を崩していたあかりさんとれいやさんと長崎先生と私でデンバサールの病院に行きました。車で4時間ぐらいの所でした。そして3日くらい入院することになってしまいました。あかりさんと同じ部屋で言葉が全然分からない私は心強かったです。そして病院で早期帰国が知らされました。このまま子どもたちと会えずに帰ると思うと悲しかったです。また絶対会いに行きたいと思います。

このIWCじゃないと経験できないことをたくさん経験させてもらいました。日本は恵まれていると身をもって感じる事ができました。日本では当たり前なことでもインドネシアでは当たり前ではないことが本当にたくさんありました。この11日間は私にとってとてもいい経験になりました。

学びと逞しい子どもたち

国際教養学部 1回生 吉木 美友



IWCのメンバーになって約3ヶ月間の研修を終えて渡航日が近づいていくたびに虫などの不安要素はありましたが、今の自分が現地の人々に対してどれくらい自分の力を発揮できるだろうかというワクワク感が圧倒的にありました。私はこの大学に入学すると志願し始めてからずっとこのキャンプは1年生の時に参加しようと決めていました。その一つの目標が叶うという嬉しさが一番自分の中で大きい気持ちでした。

8月24日職員さんたちのお見送りと共に私たちはインドネシアへ旅立ちました。デンバサールの空港について初めてインドネシアの国を見たときはタイに似ているなというイメージでした。大量のバイクにガスの臭いや狂犬病があるなどの点はタイの環境にそっくりでした。そしてバスで移動しホテルに着き初めてインドネシア学生と会ってみんな日本語が上手で驚きました。私は正直研修時の授業しかインドネシア語を勉強していなかったので本当に助かりました。まだ十分に日本語を話せない人とは英語でコミュニケーションを取りました。自己紹介の後みんなホテルで夕食を摂りました。お互いの国などの話を交えながら初めて共に過ごした夜はとても楽しかったです。そして翌朝ホテルを出発し4時間かけて私たちがワークをするプリンピンサリ村に向かいました。途中の休憩所でトイレに行ったときとても衝撃を受けました。トイレトペーパーがないのはもちろん、大きいバケツとシャワーのようなものがあり本当にここはトイレをする場所なのかと思ってしまうくらい殺伐としたトイレでした。なぜ、左手が不浄の手と呼ばれるかその時よくわかりました。そ

して、私がここに何しに来たのか現地の人の本当の暮らし方を改めて実感しました。

昼頃にプリンピンサリ村に到着してはじめて子どもたちを目の当たりにしたときは可愛いという印象しかありませんでした。また、ハエが物凄く多いという印象もありました。午後は子どもたちと一緒に館内を案内してもらいました。子どもたちが暮らしている部屋や豚を飼育している場所などを案内してもらいました。自分たちで洗濯したり食器を洗ったり自分で出来ることをこんな幼いころからしていて本当に偉いと思いました。私は今実家暮らしをしているので、母親になんでもやらせてしまっていた自分を恥ずかしく思いました。そしてその日の夕方に各ホストファミリーを紹介してもらい、ホームステイ先に行きました。私のホストファミリーは元校長先生のお家で、息子と孫の三人暮らしのお家でした。私はインドネシア語に自信がなかったため英語が通じるホストファミリーがいいなと思っていたので、イヴとイヴの息子さんが英語が話せて本当によかったです。その他に猫と子猫が5匹くらいと、犬と子犬が4匹と鶏を飼っていました。狂犬病のこともあり犬を飼っていることに不安を抱いていましたが、ホストファミリーが「ここで飼っている犬たちは病院で注射しているから大丈夫だよ」といつてくれたのでとても安心しました。優しい人たちに囲まれいい家庭を提供してもらえ、私はラッキーだと思いました。

8月26日、今日は朝から入村式をしました。アスラマの子どもたちがメイクし、民族衣装に着替えてくれて華麗なパリのダンスを披露してくれました。そのダンスの時に楽器も弾いていてくれてそのメロディーがとても心地良くて今でも耳に残っています。そして現地の牧師さんがお祈りをしてくれたあと各代表者がワークの安全のため、お祈りをし、私たちは初めてのワークを開始しました。今回は石と土で石垣を作るので私たちはひたすら土と石を運び続けました。そして一時間半くらいワークをして昼食を終えた後、フリータイムの時間をもらいみんなマンディーをしに家に帰ったりして各自休憩をしていました。私はマン

ディーをしに家に帰ったあと少し早くアスラマに向かいました。皆も家から戻ってきていて広場で子どもたちと遊んでいました。私もみんなと一緒に子どもたちと遊びました。おんぶして走り回ったりビデオを撮ったりして初めて子どもたちと遊んでとても楽しかったです。そして夕方からIWC第30回記念式典をするために近くの教会に行き、子どもたちや他のアスラマの子どもたちやホストファミリーたちと参加しました。その式の初めにアスラマの子どもたちが楽器で演奏をしてくれてそれに合わせてダンスを踊ってくれました。インドネシア学生が「そのダンスの名前はエンジェルダンスと言ってとても綺麗なんだよ」と教えてくれました。思わず見入ってしまうくらい綺麗でした。そして記念式典を終え第2アスラマで引き続き記念祝賀会を行いました。

記念祝賀会では牧師さんが少しお祈りをしてくれて現地の人たちが豚をまるまる一匹丸焼きにしたものを用意してくれました。この料理はバビグリンと言って滅多に食べれない料理でみなさん喜んで食べていました。私も日本にいるときに去年のこのプログラムに参加した先輩からこの料理はおいしいと聞いていたのでとても楽しみにしていました。この、バビグリンの味も美味しかったです。この日が初めて現地の人たちと交流できたとても良い一日でした。

8月27日は朝からワークをしました。もともと便秘気味だったのでその日は特に体調が悪く消化不良を起こして少し気分が悪かったです。しかし、動けないほどしんどくはなかったのでワークをお昼までしていました。ですが、午後からは体調が悪化し、昼食を食べずにゲストハウスで休憩させていただきました。その後、激しい嘔吐と高熱が出て交流会に参加することができませんでした。合宿でみんなと練習したダンスを披露したり子どもたちと交流することができなくて本当に悔しい気持ちでいっぱいでした。その日の夜にっぺいくんが病院に行くことになり、危うく私も連れていかれることになりそうでしたが、注射が嫌だったので気合いで治しました。その日はゲストハウスでお世話になることになりました。看

護師の石井さんにつきっきりで看病をしてくださったおかげで翌日の夕方にはみんなと合流することができ、軽い程度で済んで不幸中の幸いだったと思います。ホームステイ先やメンバーのみなさんにもご迷惑をおかけして申し訳なかったと思います。

8月29日、この日は私にとってとても大切な思い出です。この日は朝から車に乗り30分くらいかけムラヤ公立高校を訪問しました。日本語プログラムの初めての活動日でした。私のチームは高校3年生の語学コースのクラスに行きました。日本にいるときから日本語プログラム担当としてメンバーの人たちと準備をしてきたのでどんな反応をされるか、ゲームを楽しんでやってくれるかなどいろいろと不安はありましたが、いざ教室に入るとみんな大歓迎してくれてノリがとても良くて、一瞬でいろんな不安が消えました。みなさん本当に日本語が上手であいうえお表も覚えていて、私も同じ語学を学んでいる身としてとても刺激を受けました。そして現地学生の2人が私たちのグループについてきてくれました。彼女たちは日本語を流ちょうに話せませんが、それをできない分お互いに英語でコミュニケーションを取り、日本語の授業やゲームをプログラム通り進めてくれて、本当に助かりました。このプログラムを成功できたのは彼女たちのおかげです。もちろんチームのみんなも盛り上げてくれて、私の指示に意見をくれたり手伝ってくれて感謝しています。このプログラムの担当になって本当によかったと思います。リーダーがいなかった分お互いに協力しあって成功できたと思います。私にとってかけがえのない大切な思い出ができました。そして昼にアスラマに戻り午後はワークを行いました。学校から戻ってきた子どもたちと一緒に施設を回りながら教会までゴミ拾いをしに行きました。このゴミ拾いを機に子どもたちともしっかり仲良くなることができました。みんな私の名前を覚えてくれて、何回も呼んでくれて、少し英語ができる子とは英語でコミュニケーションを取り、手を繋ぎながらいろんなところを歩きとても楽しかったです。

8月30日、朝アスラマに行くときみんなの雰囲気

が暗いのがわかりました。昨夜3人が病気になりゲストハウスで休んでいること、これから車でデンパサールの病院に向かうことを知りました。また、このプログラムが中止になるかもしれないということを知りました。私も同じように苦しんだ身としてとても苦しいことはわかります。ですが苦しんでいる仲間を心配し場の空気が暗くなり、他の方も病気になる悪循環ができてしまうのが一番ダメだと思いました。私は体調が悪い人たちよりもこの場の空気感が一番心配でした。能天気のようにみんなに話しかけて何とか気持ちだけでも楽になってほしい、このプログラムを中止にしたいくないという気持ちで精いっぱいでした。午後は子どもたちが学校から帰ってくるので子どもたちと遊んでいるとみんなも少しずつ元気になってきたので安心しました。まだ、こんなにも元気な人たちが残っている、きっと中止にはならないだろうと思っていました。

8月31日、この日はプリンビンサリ村より貧しいとされているバニユボ村へ見学に行く予定でしたが、人数も減ったことから午前中はワークだけをしました。そして昼食の時に巖先生から中止の発表を受けました。最初は嘘だという疑心しかありませんでした。中止の噂はあっても続くだろうと思っていました。そう思っているときに一人の男の子が「一緒にサッカーしよう」と誘ってくれて、「自分は悲しむ時間なんてない、泣くなら今のうちにできることをしよう」と思いマンディーで家に帰るまでずっと子どもたちと遊んだり写真をたくさん撮りました。夕食を終えみんながサヨナラパーティーを開いてくれて、パリのダンスや音楽でみんなと踊ったり交流会で踊れなかったダンスも踊れて本当に楽しかったです。21時を過ぎ子どもたちは眠たいのに起きていてくれて私たちと一緒に過ごしてくれました。最後はお互いに泣いて抱き合っただけで本当に別れがつかないままです。同時に私たちのために良いご飯を提供してくれたイヴたち、本当ならワークを成功させるはずだったのにその仕事を押し付けることになってしまった職人さんたちに申し訳ない気持ちでいっぱいでした。私たちは遊びに来たわけではありません。奉

仕をしに来たのです。それなのに迷惑をかけに来ただけで本当に情けないです。私は何も子どもたちに教えることができませんでした。むしろ子どもたちが私たちに多くのことを教えてくれました。子どもたちは日々工夫しながら毎日生きています。彼らは決して可哀想なんかじゃありません。私たちが彼たちより少し良い環境で生かさせてもらっていただけです。一人一人心が優しく目をキラキラ輝かせて先進国である私たちより逞しい子どもたちでした。子どもたちの笑顔や涙がとても綺麗でした。この経験は日本で普通に過ごしていたらきっとできない経験だったと思います。私はこの中止でこのプログラムを終わりにしたくありません。無料でホームステイをさせていただいたホストファミリーの人たちが1週間しかいなかったのに「ここはあなたの家よ。来年もおいで。」と言ってくれたこと、何度も私の名前を呼んで一緒に遊んでくれた子どもたち、おいしいご飯に、何も言えないほど綺麗な夜空、すべてが私にとってかけがえのない日々でした。子どもたちが私にいろんなことを教えてくれた分来年は私が子どもたちに何かを教えたいと思います。また、このプログラムに参加させてくれた両親、いろいろ手助けをしてくれたキリスト教センターの職員のみなさんにも感謝しています。私はこの中止がアンラッキーだとは思っていません。何か今後の自分に繋がる、これはチャンスだと思ってこれからも活動し続けます。貴重な日々を仲間と過ごせて幸せです。ありがとうございました。

Koneksi つながり

国際教養学部 1 回生 藤崎 優華



きっかけ

私がインドネシア国際ワークキャンプを知ったのは、桃山学院大学を入学する前のことです。大学の海外留学の説明会を受け、紹介の映像を見ました。このときは、こんなプログラムもあるのかな、という気持ちでした。大学に入学してから少しして今年のインドネシア国際ボランティアの説明会があり、昨年インドネシア国際ワークキャンプに参加した先輩方から体験のお話を聞いて、もともと子どもが大好きで高校生の頃から大学生になったら国際ボランティアに参加したい、海外で日本とは違う文化や歴史、習慣を直接学んでみたいと思っていた私はこのプログラムに私も参加したいと強く思い志望しました。

事前研修

志望動機、自己PR作文の書類提出、面接、試験をして合格することができ、やっとIWC30のメンバーになることができた私は20人の仲間たち、引率の先生方、チャベルの事務の皆さんと事前学習を受けました。内容は、インドネシアの文化や宗教、生活や気をつけなくてはいけない病気、インドネシア語も勉強しました。インドネシア語の事前研修でもらった授業プリントはインドネシアに行ってから役にたちました。特に、Terima Kasih (ありがとう) や、Selamat pagi, siang, sore, malamなど、挨拶が役に立ちました。授業の他にも現地に行ってから行う日本食作り、日本語プロジェクト、交流会、現地での予定を把握するためのしおり作りの準備も役割分担をして進めていきました。また、IWCメンバーの中の3人とチャベル事務室の馬詰さんと一緒にIWC30thのTシャツを作りました。試行錯誤してみんなで意見を出し合いIWC30thを成功させたい、頑張りたい、これからもこの活動を繋げていきたい、そんなそれぞれの強い思いのこもったこだわりぬいた最高のTシャツが完成しました。初めて完成したTシャツを見たときはものすごく嬉しかったです。このときは本当に馬詰さんにお世話になりました。ありがとうございました。本当に最高のTシャツです。事前学習最後の仕上げ、二日間の学

校での合宿では、日本語プロジェクトの実践練習、交流会のダンス・歌の練習、日本食の実践練習、などをしました。合宿をすることによってメンバーのみんなとの仲も深まり、実際に現地で行うことを想定しながらする練習は少し緊張もしましたが自信もつきました。この合宿によって私のIWCへのやる気、インドネシアへ旅立つその日が待ちきれないくらい楽しみになりました。

出発

関西国際空港からデンパサールの空港までは飛行機で6時間半くらいかかりました。飛行機が無事に着陸した際には歓声や拍手が起きました。ついにインドネシアに着いたのだと実感しました。インドネシアについて初めて経験した異文化は現地のトイレでした。トイレトーパーが無く、トイレの便座の横に小さなシャワーがついていました。また空港の建物も日本とは全然違って白と赤茶色のコンクリートで彫刻された大きな門のある空港で植物もたくさん植えられていてとても立派でした。空港を出てホテルへ向かうバスの中で見た光景も日本とはまるで違ってました。道の真ん中に大きな像が立っていたり、インドネシアの国旗がたくさん立ててあったり、バスのすぐ真横にバイクに乗っている人が止まったり、小学生くらいの子どもの女の子が一人でギターを弾いて歌を一曲歌う商売をしていたり、小さなお店がたくさんあって、学生も大人もバイクに乗っている人が多かったです。

インドネシア学生との出会い

インドネシア学生とは1日目のホテルで会いました。はじめはお互いぎこちない感じでしたが、一緒に食事をして、つたない英語で会話をしながら話すうちに打ち解けていくことができ、3日もしたらすごく仲良しになりました。インドネシア学生の皆さんはいつも明るくて、私たちとは比べ物にならないくらい優しく、真面目で英語もとても堪能でした。いつも私たちのことを気遣ってくれました。一年間桃山学院大学に留学したことがあるアンドリーは、日本語もとても流暢に話して

インドネシア語がわからない私たちに色々な場面で通訳をしてくれました。他のインドネシア学生とのコミュニケーションが上手くできないときも手助けをしてくれました。どんな頼み事でも嫌な顔一つせずいつも一生懸命頑張っていてとても尊敬しました。また、私たちが途中帰国することになってしまったとき落ち込んで立ち直れない子には自分も辛いはずなのに元気づけようと励ましてくれたり、優しく話を聞いたり本当にすごいなと思いました。現地でのIWCの活動を進めていく中でアンドリーは欠かせない存在でした。感謝しています。ありがとう。二学期から桃山学院大学に留学するアスティとデオも私たちと日本語で会話していくうちにすごく上手になってすごいなと思いました。アスティはワークで足を痛めたにも関わらずシャベルをもって頑張ってくれました。みんなが疲れたときは優しい言葉をかけてくれる気遣い上手なお姉さんのようでした。

デオは私と同じ班でとても明るく勉強熱心で大阪弁をみんなから習っていました。アスラムの子どもたちにも人気でした。高校での日本語の授業の成功はデオのおかげです。ありがとう。

スシラ、ディリ、ハンナはプログラムが始まる1ヵ月前から日本語の勉強してくれていました。スシラは、静かで落ち着いていて力持ちでワークのときは大きな岩をたくさん運んでくれました。ディリはとてもおちゃめでみんなに笑顔をくれるひまわりのような女の子でした。ハンナは私と同じホームステイ先でとても仲良くなりました。初めてのインドネシアでの生活で不安もあったけどハンナのおかげで毎日元気に過ごすことができました。たわいもない話しや、毎朝イブが作ってくれた紅茶と一緒に飲むのが好きでした。今度会うときはもっと話せるように英語も頑張ろうと思いました。IWC30thの活動をするにあたってこの5人は必要不可欠な仲間でした。素敵な人に出会えたこと、すてきな友達ができたとを心から嬉しく思います。ありがとう。

ワーク

ワークは全部で合わせて4回行いました。壁を

作るための材料の土と岩を運びました。岩や土を運ぶのは重くてしんどかったけどみんなと「頑張れー」と声を掛け合いながら協力して頑張ることができました。学校から帰ってきた子どもたちも私たちがワークをしていたら一緒に運んで手伝ってくれました。中には、土の入った重いバケツを両手で2つも運んでくれる子どももいてとても力持ちで驚きました。しかし、途中帰国することになりワークが終わらないまま帰ることになり、申し訳ない気持ちです。ワークの際、休憩時間が少し長かったと思いました。頑張ってみんなで完成させたかったです。すごく悔しいです。

交流会・アスラマの子どもたち

アスラマの子どもたちは私が思っていたよりもとてもフレンドリーで優しい子どもたちでした。初めて会った私たちに首にかけてあったネームプレートを見て「ユカッ」と名前をたくさん呼んでくれました。交流会では子どもたちはバリの伝統的な楽器演奏や、ダンス、元気いっぱい之歌やとてもかわいいダンスを披露してくれました。私たちは合宿の時に練習した歌や、交流班のみんなが考えてくれたダンスを踊りました。思っていた以上に盛り上がってとても嬉しかったです。アスラマの子どもたちも一緒になって楽しんでくれてよかったです。だるまさんが転んだや、ねずみ取りも全員で楽しく遊ぶことができてよかったです。私たちが途中帰国することになったときもフェアウェルパーティをしてくれて演奏や歌、みんなでダンスもしました。たった7日間しか一緒に過ごすことができなかつたけど、別れを惜しんで涙をながしてくれるようなとても純粋な子どもたちでした。

日本語プログラム

日本語プログラムでは高校に行って日本語をインドネシアの高校生たちに教えました。

何か月も前から日本語班のみんな考えて作った授業を楽しんで受けてくれるか、生徒たちはどんな子たちなのかドキドキしながら教室に行きました。生徒のみんなは私が思っていたよりすごく

元気いっぱい初めの自己紹介からすごく盛り上がって驚きました。あいうえお表の発音練習も私たちの後に続いて大きな声で読んでくれて一行終わるごとに歓声が起こり、日本の高校生とは違うなと思いました。かるたやジェスチャーゲーム、四択ゲーム、告白ゲームなど初めてする遊びも、インドネシア学生の説明を聞いてすぐに理解してくれました。どのゲームもとても盛り上がり生徒たちの盛り上がりように私たちが驚くほどでした。日本語プログラムはその他、看護学校、小学校、中学校にも行く予定でしたが途中帰国することになったため行くことができませんでした。とても悔しかったです。高校での授業はインドネシア学生の説明やサポートがあったからこそ、授業の内容もスムーズに進めることができました。感謝しています。ありがとう。また、授業の準備と一緒にやってきた日本語班のみんなにはたくさんお世話になりました。ありがとうございました。

最後に

今年のインドネシア国際ワークキャンプは体調を崩してしまったメンバーが立て続けに多くでってしまったため途中で中止となってしまいました。インドネシアでの滞在期間は3週間の予定でしたが、現地でIWCとして活動できた日数は1週間でした。私たちは日本では毎日とてもクリーンな環境で生活していたため、菌に対する免疫が少なく現地での日本と違った生活に体が慣れなかったのかもしれないと思います。今後もIWCプログラムを続けていくためにこの問題は解決しなければならぬと思いました。外国では私たちがなかったこともない病気が沢山あります。免疫がない私たちが現地の人たちよりも体調を崩しやすくなってしまうことは仕方のないことですが、自分たちで少しでも体調を良く保つことができるように異国へ行った際は軽率な行動は控え、1つ1つよく考えて行動しなくてはいけないと思いました。途中帰国を知らされた後の二日間はホテルへ行ってアメーバ赤痢という菌が体内にないか検便の検査をすることになりました。そのときにホテルから病院まで便を運ぶために真夜中でも待機し

ていて検体を病院へバイクで届けてくれたインドネシア学生の皆さんには本当に申し訳ない気持ちと感謝でいっぱいになりました。本当にありがとうございました。今回のIWC30回は途中帰国となってどうしても心残りに思ってしまうことが沢山あります。知らせを聞いた時には引率の先生も含め全員で悔し涙を流しました。このような悔しい思いは今年で最後にしなくてはなりません。これからも国際ワークキャンプが続いていくように繋がっていくように心から願います。この11日間は私にすばらしい経験を与えてくれました。毎日が学びと発見で私を成長させてくれました。国際ワークキャンプに関わってくださったすべての人に感謝します。ありがとうございました。

初めての海外

国際教養学部 1回生 木村 純菜



バリの空港に着いて初海外だった私はワクワクと不安な気持ちが混在していました。でもホテルまで移動するときバスから見た光景は日本のテレビで見たことのある雰囲気、自分が今そこにいると思うとやっと、ずっとしたかった現地でのボランティアができる！はやく子どもたちに会いたい！と不安なんか消えてワクワクな気持ちでいっぱいになりました。私はこの国際ボランティア活動に参加するまで世界中でボランティア活動をしたという思いが強くなりました。でも今の自分にはむずかしいということもこの活動で気づかされました。なぜなら少し時間がたってバスの中から小さい女の子が裸足で道路の真ん中に入ってきてお金を下さい。と手をさし伸ばしている姿を現実に見ていると胸が本当に痛くなりその場か

ら世界にはなぜこんなにも格差があってしまうのか、どう考えても自分には解決できないマイナス思考のループに陥ってメンタルがやられてしまったからです。私は人一倍メンタルが弱く些細なことですら深く悩んでしまい次のステップに行くまでに時間がかかります。ですから今の自分には日本を離れてボランティア活動に参加することはそれだけの大きな覚悟とネガティブ志向なところを少し治してからじゃないと出来ないことだと思いました。

ホテルから移動してアスラマでの生活が始まるとその思いを沢山してしまうようになりました。今まで体験したことのない日々がアスラマにはありました。日本に帰りたくてたまらなくて泣いてしまう日もありました。私が一番つらかったのはアスラマの3日目にしてご飯がのどを通らなくなったことでした。朝食をする場所にいくと今まではしょうがないと思って無視できていたハエ集団が急に無理になり、そこからたまっていたものがあふれ出てきて涙が止まらなくなり泣きながらご飯を食べました。洗い場の匂いを思い出してしまうと食べられなくなり、食器を使うことやホームステイ先のベッドで寝ることにさえ抵抗を感じてしまいました。自分が少し潔癖症を持っていることも知りました。でも目の前でご飯もろくに食べられない子どもをこの目で見たにもかかわらずそんなことまでも気にしてしまい、感謝して食事をしなければならぬのに食べることができない自分にとっても腹が立ちました。メンタルが弱くネガティブなことばかり考えてしまう性格が出てしまっていました。

でもそんな自分をアスラマの子どもたちは心配してくれてずっと笑顔で「だいじょうぶだよ。」「えがお」といって励ましてくれました。アスラマの子どもたちは笑顔がとても素敵でした。アスラマに着いてからネガティブなことばかり考えていた自分を少しずつ変えてくれていました。毎日の日記には楽しかったこと辛かったことをメモしていて辛かった日は長い文章で思っていることを書いて、そのあとに自分で自分を一生懸命に励ましている文章がありネガティブながら頑張っ

いこうとしていました。それは100%アスラマの子どもたちのおかげです。

そんな子どもたちの笑顔がたくさんみたくて私は行事に本気で取り組み、本気でワーク活動をし本気で子どもたちと遊び、たくさんの笑顔をみることができました。

交流会では本気で取り組むことがどれだけ楽しいか感じていました。自分たちのダンス発表の時には私はダンスサークルのパフォーマンスで大失敗をしたことがありダンスを人前で踊ることがトラウマになっていて怖く正直ダンスを踊るのが嫌でした。それにIWCの学生の前では最初から友達が少なく恥ずかしい気持ちで、たとえ踊れても本当の自分を隠したままダンスを踊るのかなと不安に思っていました。子どもたちが盛り上がってくれて見て笑ってくれるのが嬉しくて恥じらいも関係なく大好きなダンスをノリノリでミスなく踊ることができました。振り付けは細かくはなかったけれどトラウマになっていた分踊れた時の達成感は大きく、なによりも心から楽しんで踊れた自分がいて、自信に繋がりました。自分は子どもたちの力でこんなにも変えられるんだなと思いました。

こんな風に今まで知らなかった自分のことを知れました。自分とゆっくり真剣に向き合うことができました。嫌いな一面、治さなければならない面 逆に、交流会や子どもたちと触れ合う中で助けってもらいながら、自分もやればできる！と自信を持って好きな一面にも気づくことができました。また、英語がどれだけ大事かということにも気づきました。インドネシア学生とはほぼ英語で会話をしていました。母国語はちがうけれど英語という世界共通語で自分たちの思いを伝えられることはすごいことだと思ったし、伝わったときの嬉しさは大きく、うまく伝えられないときも同じくらい悔しかったです。英語は自分の将来の夢である子どもに教える英会話の先生になるために欠かすことのできないものなので、日本に帰ったらもっと頑張って勉強しようと思いました。インドネシア学生との会話で心に残っている会話は豚の肉を食べたときでした。私が「豚肉が臭すぎて食

べられない。食べたら泣いてしまうくらい嫌だ。」というハンナは「豚も泣いてあなたの命になってくれているんだから食べるべきだよ。」と言われ頑張って食べれたことです。食べ物にきちんと感謝して食べているところが私たちと違うところだと感じました。

途中帰国を告げられたとき最初はあんだけ帰りたいと辛いと言っていたけど、このことがそれ以上にもっと本当に一番辛かったです。とにかく子どもに話すのが嫌でした。アスラマにいる子どもたちの全員の名前を覚えたくて紙に自分の名前を書いてビデオを撮るってということがしたかったけれどできなくなってワークなども中途半端になってしまい子どもたちや現地の人々には本当に申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

イブとは言葉が通じないので「ただいま」「おかえり」「いってらっしゃい」「いってきます」の会話だけでしたが家に帰ると必ず強くハグしてくれたり私が体育座りで音楽を聴いていた時には体調が悪いと勘違いして優しく抱き包んでくれて頭を撫でてくれたりしました。

また今までのIWCの学生の名前と住所をメモしているノートを渡してくれて私の名前もそこに書かせてくれてバリのTシャツもプレゼントしていただきました。

途中帰国を伝えたときにはイブの旦那さんのお嫁さんと英語で話をしてお嫁さんがインドネシア語でイブに伝えてくれて3人で辞書を使いながら必死におたがいに伝えたい事を伝えあいました。

アスラマで出会った人々と急に別れなければならないことは予想外だったし、やり残したことがあります。悔しい思いでいっぱい、いっぱいでした。その中でもある一人の男の子とお別れするのが辛かったです。その男の子はスンギャルタという名前が私が一番仲良くなった子どもでした。スンギャルタとはホームステイ先に送ってもらうときに一緒だった子で少し英語ができたので英語で話をしてインドネシア語と日本語を教えあい一緒に勉強していました。スンギャルタから友達の輪が広まり子どもたちの場所に行くとお決まりのメンバーで時間を過ごすのが日課になっていまし

た。その時にはペータという14歳の男の子がギターの弾き語りをしてくれたりオミンという6歳くらいの人見知りの女の子と仲良くなってちょっかいをだされるまでもなりました。ペータには「flashlight」というjessie jが歌っている歌を歌ってもらってました。日本に帰ってその歌をきくとアスラマにいたころの記憶がよみがえってきて子どもたちに会いたいという思いでいっぱいになります。オミンは私に必死に「アクウダショコダ!!」と言ってきてインドネシア学生のアンドリに聞くと「もう私小学校に行ってるよ!だから子どもじゃないよ!」と言っていたらしくそれには笑いました。私がラララ〜と歌うとオミンはニコッとします。アスラマの施設にいる間、周りにはいつも子どもたちがいてとても幸せでした。スンギアルタとお別れするとき初めて会ったときに会話をすもうの手ぬぐいをプレゼントしました。「ほかの子たちにはないから内緒にしてほしい」といったら次の日の学校のお見送りのときにポッケにいれてるよ!とアピールしてくれて嬉しかったです。お別れするときスンギアルタはとても笑顔だったのに私が一回その場を離れて「まって」といって戻ってきたときにいなくなって自分の部屋で一人で隠れて泣いているところを見て本当に寂しくなりました。できるならあと一日でも延ばせたらいいのにと思いました。

たった8日間の間でしたが何回もつまづいて何回も立ち直っての繰り返しで毎日が濃く、目標にしていた子どもたちのたくさんの笑顔を見る!ということもでき、優しい人々に出会えたことは私にとってかけがえのない時間とかけがえのない思い出です。

さよならをするときは、子どもたちが学校に行く時間だったので「さよなら」ではなく「行ってらっしゃい」と笑顔で見送ることができました。朝の5時にイブの家をでて重いキャリーを日本では見られないほどの綺麗な星空の下運んだかきがありました。この日は5時に起きないと子どもたちに会えないというプレッシャーから一睡もできませんでした。

お別れのあと私たちは高級なホテルへ移動しま

した。でもそこで私はまたネガティブに考えてしまいホテルへついた時、気分が悪くてミーティングに出られませんでした。今まであんなに大変な場所にいたのにそのギャップに耐え切れませんでした。高級なホテルに泊まることができ、はしゃいで子どもたちのこともとっくに忘れているようにみえたIWCの学生たちの顔が見たくありませんでした。ワークも中途半端にして子どもたちとも急にお別れすることになり、なんのためにインドネシアに来たのか自分でもわからなくなってしまいました。でもそのときに現地スタッフの美和さんが相談に乗ってくださって、切り替えて自分も心からではないけれどホテルを楽しむことができるようになりました。私は途中帰国ということになって本当に悔しく思っています。子どもたちにもう一回会いたいです。それでもう一度必ず次は日本食を大量にキャリーバックに詰め込んでマイ皿マイ箸なども持ってアスラマへ行きます。

途中帰国と人のタイプ

国際教養学部 1 回生 市村 ひろみ



8月24日から9月4日まで、私を含む生徒20人がIWCに参加した。本来の予定では9月10日までだったのだが、体調不良を訴える学生メンバーが続出し、さらにアメーバ赤痢にかかり入院することとなってしまった生徒が2人でてしまったため、これ以上増やしてはいけないということで学校側が強制途中帰国という判断をとった。涙を流し村を去ったメンバーの抱える悔しさは計り知れない。彼らはわずかな約一週間の中で、一秒も無駄にせずさまざまなものを吸収した。もちろん私も例外ではない。今回のレポートは、そういった

短い期間で私が見てきた人の動きと変化を、考察も交えてまとめようと思う。

まず印象的だったのは、インドネシアに到着してすぐ、ホテルへ向かう車から見た風景である。全体的な建物の雰囲気や、走っているバイクの量など、その辺は海外に行けば誰しもが感じるギャップだろう。ここで取り上げたいのはそういうのではなく、信号で止まったバイクの間をまだ幼い裸足の女の子が、お金を集めて回っていたことである。隣に座っていた同期の女の子が、その光景に涙を流した。聞けばインドネシアでは、普通に目にする光景であり、もっと小さい子どもが物乞いをしている場面にも出くわすことがあるという。ギターを片手に歌って回り、停車している車からお金を受け取ろうとしている女性もいた。彼らの後には元締めがいたり、親がそうさせている例も多いと聞く。様々な事情を抱えているのだろうが、共通している点は、彼女たちがその行動自体をひとりでやっていること。そして誰一人として見向きもしないことである。まるで日本の東京のようだと思った。

二つ目は、プリンビンサリ村についてからである。遠巻きに様子を伺っていた子どもたちが徐々にこちらに近づいてきて、学生たちのひざの上に座り、その子の携帯を触り、ともに写真を撮っていた。その中でも、子どものよってくる学生と子どものよってこない学生がいることである。その場の違いでは大きく二つ。その学生の携帯を本人が自分で持っているか、それとも子どもが持っているか、である。学生に群がる子どもの手には、スマートフォンが握られ、楽しそうに写真を撮っているのである。ああなるほど、と納得し、暇そうにしている子のほうを見てみた。笑いもせずいすに座り、容赦なく飛び回る蠅を手で追い払いつつ、その視線はスマートフォンに向き顔も上げない。コミュニケーションしやすいのはどこの国にいても、どの年代でも、笑顔を浮かべ腕を広げる人であることがわかった。加えてもうひとつわかったことがある。郷に入っては郷に従えというように、その土地に行ったのならその土地の言語を話すことが重要であり、距離を縮めるのに一

番の近道なのだ。我々IWCの生徒の中で一番子どもに人気があったのは間違いなくまえひらあかりさんだろう。彼女の周りには常に誰かいた。そして彼女は名前を必死で覚え、インドネシア語もしゃべっていた。私は彼女から様々な距離の縮め方を学んだ。

子どもと近づくために私が一番最初に意識したのは、目を合わせ、笑顔を作ることである。それから名前を聞き、覚える。これがなかなか難しい。何度も間違え、何度も謝り、何度も繰り返し、何度も呼びかけた。子どもたちは笑顔で応えてくれていたし、私の名前を覚えて呼んでくれたときは嬉しさがこみ上げ過ぎて奇妙な笑い方をしてしまった。一緒に遊ぶことも大切である。自分から遊びにいらしてもらい、子どもたちと遊んであげるのではなく、遊んでもらう立場となって楽しむのだ。おんぶをしておにごっこをしたときは汗をかきすぎてバテてしまっていたし、普通に鬼ごっこをしたときは子どもたちの足の速さに驚きを隠せなかった。余談だが、男の子たちの足が大きいと思った。年のわりに大きくしっかりしていて、横幅があり安定している。彼らはサッカーをするときに躊躇なくサンダルを脱ぎ捨てる。野生児のような活発さを備えているが、文武両道をかかさないうん賢く真摯な子どもたちだ。

そんな子どもたちは、掃除や片づけを決められた係りで行く。村でみた家は、床がすべて大理石であった。もちろんアスラマの建物も例外ではなく、床はつるつるとした白い大理石だった。そこは箒を使えば一瞬できれいになるし、こびりつくような汚れもつかない。子どもたちは箒で埃や砂を掃き、外に掃きだしてからごみを集める。外の同時には、それにプラス水モップを使って磨く作業が加わる。子どもたちは洗濯も自分たちでやる。彼らが使う洗濯機は古い二層式の洗濯機だ。洗濯物は一回につき日本の二倍の量を入れることができる。洗濯物を入れ、ホースで水を入れる。洗いが終わると脱水機にかけ、すすぎをして、また脱水機にかける。私は二層式洗濯機を始めて実際に使い、その面倒くささにうんざりした。現地の人がいうには、インドネシアでは未だに洗濯機は手

洗いよりも汚れが落ちないと思い込んでいる人が多い。普通の家に洗濯機はなく、少しお金を持っている家庭にたいしては存在しているという。一度、同じホームステイ先の子が倒れてデンパサールに送られたときにだけ、ほかの子のホームステイ先へ行き、たまっていた洗濯物を一掃したことがある。その家はWi-Fiがあり、洗濯機があり、英語が通じるころだと聞いていた。夜のミーティングを終え、野犬のほえる中歩き、その家に着いたときはえらくほっとしたものだ。その洗濯機は日本ではいたって普通の全自動洗濯機だった。

グロテスクなどろみのあるピンク色の柔軟剤が、きっと日本で言うハミングとかのポジションなのだろう。美和さんがおっしゃるには、洗剤を含む高性能な日本の製品は、インドネシアでは3倍の値段がかかる。日本へ帰るのもお金がかかり、2、3年に一度しか帰ることができないのだという。きっとインドネシアの人々から見れば日本は、やたらとお金のかかる印象なのかもしれないと思った。

私のホームステイ先の話しよう。私たち留学生の世話は大体イブがしてくださった。朝になると砂糖が大量に入った甘すぎて飲めないお茶を出して下さる。茶菓子のように添えられたお菓子は揚げたバナナだ。「エナック、エナック」と繰り返す私たちを見て、イブは本当にうれしそうに笑った。どうかして部屋に3人分の洗濯物を干そうと奮闘していた私たちを見かねて、イブは干し場を貸してくれた。窓枠にかけたまま落ちた洗濯物を、何も言わずとも拾い、干し場に持って行き、窓枠を越えて地面に落ちたファブリーズなども気がつけば机上に置いてあった。部屋の掃除をしたいと伝えれば、箒を貸し、水拭き用の汚れたTシャツを貸して下さった。午後10時を過ぎるような夜に、電気のスイッチの場所がわからず困っていたところへ起きだしてきて、笑いながら切ってくれたこともある。同じホームステイの友人が倒れたときも、心配して見に来てくれた。「トゥリマカシー、イブ、トゥリマカシー」とお礼を言うことは忘れないようにしていたつもりだ

が、イブの何気ない気遣いに気づいてお礼を言えた回数は、きっと尽くしてもらった回数にほど遠く届いていないだろう。帰り際、日本の葉書にインドネシア語で手紙を書いて渡してきた。最初から最後まで笑顔で答えてくれたイブに、心から感謝したい。

さて、ここからは途中帰国だと告げられた前後の私の動きを、記憶の新しいうちに書こう。巖先生から中止を告げられる少し前、私は宮嶋チャブレンと現地看護師の美和さん、そして団長の巖先生と過ごしていた。その辺を飛んでいた虫を巖先生が捕まえ、四人でそれを観察した。あり地獄の中に巖先生と宮嶋チャブレンと蟻を投げ込んだり、林の中に入り巖先生と何かいないかと探したりした。そこで巖先生に電話がかかってきて、そこからミーティングに移行した。ちょうどその日は、倒れた子も多く、自由行動が続いた日だったと記憶している。集会を開く場所で告げられた言葉に、誰もが固まり、そして涙した。「各自遣り残したことがないようにすごしてください」と巖先生も宮嶋チャブレンも言った。まず私は体調を崩し寝ていた友人にそれを伝えにいき、その後数人の動ける友人たちを連れ、村を散策しに行った。ホームステイ先に帰り、イブにそのことを伝え、荷物をまとめ、再びアスラマに向かい子どもたちと遊んだ。彼らは「君は明日帰るだろう？」と聞いてきた。誰かがすでにしゃべったのだろう。私は頷き、遊んでもらった。思えば、ほとんどの学生が時間を惜しむように子どもと触れ合っていたように思う。

お別れ会を終え、ホテルで検便検査の結果を待つ我々の中でも、現実を受け止めきれず、ずっと落ち込んでいた学生がいた。インドネシア学生であるアンドリが、とても気遣っていたのを覚えている。ろくに食事もせず、一日中引きこもっていたその学生たちに対して、困惑した目をむける学生もいた。高級ホテルにはしゃぎ騒ぐメンバーに対し怒りと疑問を覚え、「ミーティングに出たくない」と寝ていた学生もいる。現実を受け止め、いちやく切り替えた学生もいる。ここでは大きく二種類のタイプにわかれたと思った。遊んで忘

れるタイプと、時間をかけて忘れるタイプだ。きっと落ち込んでいた学生たちは、後者だったのだろう。私は前者であるが、後者のタイプの人は後になって後悔するのではないかと案じた。不満を口に、周りをにらむことは誰にでもできるが、その場でしかできないことを全力で楽しむことも誰にでもできる。だからこそ、そんな平等に与えられた機会を生かしきれない仲間は後になって「もったいなかった」と嘆くことになるのではないのだろうか。美和さんやメンバーによる賢明な話し合いで、落ち込んでいた学生は調子を取り戻したが、それについて、きっと私にももっとできることがあったように思う。話を聞き、その本人の不満を違うタイプの立場から話してみることが必要だったように思う。今更どうしようもないが、今後そういう機会があったとするならば私は真っ先にコミュニケーションを図るだろう。

インドネシアで私が学んだのはその土地の話ではなく、どちらかといえば人との付き合い方だ。日ごろと違う環境におかれ、平常では体験し得ない状況に置かれたからこそ見えてくるものを見た。これは実際に体験した人間でなければわからない。私はそれを経験し、学んだ。それが一番、今後自分に役立ち、そして成長を助ける土台になってくれると思う。

感謝

経済学部 1 回生 平野 将大



8月24日午前6時、私は一睡もせず朝を迎えた。この日は、私たちの旅を満面の笑みで見送ってくれるぐらいとても良い晴天で、気持ちのよい朝であった。どこか遠出するときは、必ず何か忘

れてしまうので、何度も確認したが、充電器を忘れていた。それも、普段通りのような感じがして、面白かった。バスの中では、大好きな音楽を聴きながら、これからの旅に胸を躍らせていた。空港に着き、メンバーと会い、ほっとしていた。この時私は税関に早く行きたいと思っていた。なぜなら、私は中川家のネタを見て毎回税関を通ってみたいと思っていたからだ。しかし、いざ行ってみると普通の日本人の男性で、とても親切な方だった。後で聞いたところ外国人の税関吏には、外国の空港で会えるとのことだった。少し考えればわかるようなことだが、その時の私は、浮かれすぎて頭が働いていなかった。

空港では、電車が走っていることにとっても驚いた。久しぶりの飛行機、初海外、7時間の空の旅が始まろうとしていた。飛行機の中ではDVDを見ていたが、すぐに寝てしまった。

飛行機内のご飯は、日本食とインドネシア料理の二つから選べた、私は早くインドネシア料理が食べたくて、インドネシア料理を選んだ。少し独特の癖があったが嫌いな味ではなかった。飛行機内は冷蔵庫のようだった。デンパサールに着いたとき第一に感じたことは、沖縄！だった。デンパサールの空港は、日本の空港とは雰囲気がまったく違っていてやけに広く、空港を出たところで、体が女性の上半身裸で、顔が化粧物のような置物が出迎えてくれた。何かの神様かと思っていたが、後で美和さんに聞いたところ、ヒンドゥー教の悪い悪魔のような存在だと知った。年に一度、その悪魔の祭りのようなものがあり、電気が使えなく、外に出られない日があるということも知った。空港にいたインドネシアの人も温かく迎えてくれた、しかし、日本語でしつこく絡んでくるのは、おちょくられているようで、あまりいい気はしなかった。ホテルへ向かうバスの中では、海外のホテルを想像しながら、見たことのない景色を楽しんだ。インドネシアの町の色は、オレンジ、白、緑この3色からできていた。バイクだらけで、三人乗りやヘルメットなしといった危険なバイクが多数見られた。インドネシアでは、法律より宗教が優先されるところがあり、ヘルメットではなく、

宗教の被り物をしていればいいと知った。ホテルでは、てっぺい君と交流会の準備を真剣にした。交流会、セニョームの集まりがあるたび、てっぺい君がリーダーで良かったと思った。交流会の準備は、時間が押した時、早まった時など様々なパターンを考えた。ホテルでは、ナシゴレン、ミーゴレンなど沢山のインドネシア料理を食べたがどれもとてもおいしく、毎回おかわりをした。香辛料のサンバルは辛かった。インドネシアの学生と会ったのはこの日だが、人見知りが出て、話すことができなかった。結局話すことができないまま、プリンビンサリ村へ出発することになった。私が初対面の人と話せなく、年に関係なく敬語になってしまう理由は、いきなりなれなれしくするという行動は、相手のことを見下しているようで失礼な気がするからだ。しかし、18日間という短い期間の中で、良い関係を築くには、自分から行動を起こすしかないと分かっていた。しかし、話しかけることができなかった。プリンビンサリ村へ行くバスの中でも、日本では見ることのできない景色を見ながら、音楽を聴いていた。途中の休憩エリアで初めてインドネシアの物価の安さに驚いた。このバスの移動では町、景色、雰囲気など新しい発見が沢山あり、眠くならなかった。村に着き子どもたちとサッカーをして交流した。サッカーをする子どもたちの顔は、その瞬間のためだけに生き、その瞬間だけを最高に楽しんでいる最高の顔だった。

その裸足で駆ける姿や表情、色、体すべてを見て沢山のエネルギーをもらった。今に全力になれるのは、最高にかっこいいことだと改めて思った。好きなことだけでなく苦手なことにも。しかし、このレポートを後回しにしてしまった。感じたことが沢山あっても変わっていないのはかっこ悪いことだ。部屋割り、当日いきなり変わって動揺したが、てっぺい君と一緒にだったのでほっとした。誰とでもいいという風に言う人はいる、だが、18日間同じ部屋で、気まずい人と生活するのは息苦しいこと。この日、同じ部屋にインドネシア学生のアンドリーがやってきた、年は22歳、見た目はとても渋く日本語がとても上手だ。第一印象はこ

のような感じだった、アンドリーは、最初私たちとホームステイ場所が同じだと決まったとき、「やった！」と言ったが、それは私たちのことを気遣って言ってくれたのだろう。私は、一度も話したことがない人と同じ部屋だと聞き、アンドリーと同じ対応は絶対できないはずだ。このときアンドリーの優しさと、自分の幼稚さに気づいた。ホームステイ先のパパもイブもとても優しくかった。しかし、何を喋っているのかが分からずアンドリーに任せてしまっていた。アスラマで食べたご飯もとてもおいしかった。しかし、子どもたちと食べている料理が違っていたことが、すごく嫌だった。もし自分が、子どもたち側の人間だったら、どういう気持ちだったのか。トイレにもわざわざペーパーを用意してくれていた、もしかしたら、毎日置いているのかもしれない、しかしそうでなかったのなら、甘えていいのだろうか。マンデー初日は、凍えてしまいそうだった。この日の絵日記には仲良くなったエクセルという子どもの絵を書いた。次の日から朝の集いの前に、朝の運動会が始まった、歌を歌い、体を動かすことはとてもいいことだと思った。しかし、すごくキリスト教を推してくるなと感じた。これは、このワーク中ことあるごとに感じていた疑問点だった。宗教については考えさせられることが沢山あった。これはインドネシア限定のことだけではなく日本以外の国に共通することなのだろうが、全てのことが宗教が中心にできているのだと感じた。アンドリーは、ホームステイ初日断食中で何も口にしていなかった。それに、お祈りを食事の前や集会の前などことあるごとくにしていた。左手が不浄な手というのも宗教の考え方だ。私はこのことを今でも考えている。私のように宗教を信じていない人と宗教を信じる人が本当に分かり合うことはできるのだろうか。宗教間での争いも起きている。答えはでない。だが、考えなければいけないと思っている。

待ちに待ったワークでは、石と砂を運んだ、私は、主に大きな石を運ぶ係りをした。アスラマの子どもたちのため、メンバーの役に立てるようにという気持ちで、全力で頑張った。最後になるに

つれ腕の感覚がなくなってきていたが、気持ちで乗り切った。その日は、ワークの疲れを交流会や次のプログラムに残さないようしっかりストレッチとマッサージをした。この日は、記念式典で教会を訪問した。祝賀会では、豚の丸焼きが出てきて、石田副学長先生のスピーチがあった。石田さんとはデンパサールのホテルで、昔話や孫の話で盛り上がり少し仲良くなっていたので、別れが寂しかった。いよいよ交流会の日がやってきた。この日、私にとってすごく悲しいことが起きた。てっぺい君が体調を崩しデンパサールの病院に行かなければならなくなったのだ。私は、ワークが始まってからこの日まで、頭の中に交流会のことがあった。今までで一番の交流会を作り上げたくて不安なことがたくさんあった、そんな状況で、てっぺい君がいなくなるのはとても不安だった、それ以上に一緒に交流会ができないということが嫌だった。しかし、一番つらいのはてっぺい君だから私は笑顔で見送り、絶対に交流会を成功させると誓った。四人で段取りを確認して役割も変えた。任せてばかりいたんだと感じた。与えられた時間でできることは全てした。確認、リハーサル、ダンスの練習、まこっちゃん、ねい君にたくさん助けられた、他のみんなにも。ダンスの練習は直前まで行った。交流会が始まる。いつの間にか不安はなくなっていた。歌は、みんなの心がひとつになった気がしたし、自分もみんなも心のそこから楽しんでた。心から楽しんでいる人のパワーはみんなを幸せにする。子どもたちの出し物も全力で応援した、感動ももらった。ほんの少ししか関わったことがないのにずっと一緒にいた気がした。いよいよダンスだ、ダンスのショーは毎回一瞬で終わる。たった三分ぐらいの時間に本気で取り組む、あの一瞬は、全力だった分だけ幸せな時間をくれる、逆にそうでなかったら、悔いしか残らない。終わった瞬間、私はとても幸せだった、みんなもそうだった、最高の笑顔だったからだ。女子もそうだった。今ではとてもいい思い出になっている。

終わる瞬間までの一時間は、ほんの数分間に感じた。終わりたくなかった。言葉ではなくても相

手を思う気持ちが、その場をひとつにする素晴らしさを感じた。

次の日は、また教会訪問があった。やはり長い。この日は、食事会の日でカレーを作ることにになっていた。久しぶりの日本食、楽しみで仕方なかった。私は、料理は苦手だが、足を引っ張らないよう頑張った。準備は順調に進み、良い形でパパやイブ、ホームステイ先の家族を招くことができても良かった。私のホームステイ先のイブはカレーが苦手だったらしい。カレーのどのようところが苦手だったのか不思議に思っていた。その日のミーティングはすごく長かったのを覚えている。先にすることをして歌を歌えばいいのにチャプレンはいつも自分のことを先にする。ミーティング後私は、アスラマの夜の雰囲気、自然を感じ、ダンスを踊った、周りのさまざまな物にエネルギーやインスピレーションをもらいながら日本とは違う環境で、すごく新鮮で、とても気持ちよく踊ることができた。イヤホンをつけ好きな音楽で回りを気にせず好きにダンスをすると嫌なことがどうでも良くなってくる。新鮮で良い夜だった。

高校訪問の日がやってきた。高校訪問は、みゆとじゅんなに任せていたので、安心して臨むことができた、本番もセニョームのノリと笑顔で楽しく終えることができた。しかし、ここでは沢山のことを考えさせられた。高校生はみんな日本語が上手で、英語も少し話せるということだ、私は、このワークキャンプに行く前は、ジェスチャーやノリで何とかなるだろうと思っていた。だが、実際はアンドリーに頼ってばかりだったし、英語ができるメンバーに任せてばかりで不甲斐なかった。インドネシアの子たちを見ていても自分のかっこ悪さが沢山見つけた。このタイミングの出来事ではないけど、アスラマで、仲良くなったレーウィーという子と、もっと話したかった。言葉が通じ合うことはとても大事だ、日本人同士でも仲良くなるには時間がとてもかかるのに、言葉が通じない人と本当の意味で仲良くなるには、言葉が話せなくてはならない、それと、その国の文化を学ばなくてはならないと思った。

次の日の朝、インドネシアに来て初めてご飯を

食べたくないと感じた、下痢もしていた。私は、よく下痢をするのだが明らかにいつもと違った。それでも気持ちで負けたら終わりだと思い、普通の自分を演じた。フリータイムになった瞬間、家に帰りすぐに寝た、寝たらすぐに治るだろう。しかし、5時に気持ち悪くて起き、吐いた。まじか、と思った。

その日は、アスラマのゲストハウスで寝た、寝ることは好きだが、寝るのが辛かった。早く治すことをひたすらに考え続けた、途中帰国の夢も見た。その日の夜、聞いたことのない変な声で目覚めた。たぶんトッケイ（とかげの仲間）の鳴き声だろう、10回以上聞いたら幸運が舞いこむと言われたが、やはりただの迷信だ。熱はすぐに引いたが、偏頭痛が出て治るのが遅れてしまった。

次の日、帰国の知らせをひろみから聞いた、泣いていた。私は、泣けなかった。夢と同じような光景だった、知っていたようで泣けなかったのかと考えたが、それはとても悔しくて、みんなに申し訳ないと思っていたからだ。秀樹君に会った時目を合わすことができなかった、私が体調を崩していなかったら、帰国せずにすんだのではと考えた。自己管理と体を強くしないといけないと思った。離村式があると聞き、考えるのをやめ、寝た。何とか離村式に間に合った。これに出席しないと一生後悔すると思い気合で治した。

離村式では絶対に泣かないと決めていた。とても楽しくとても悲しい離村式。子どもたちは毎年味わっている、私には無理だ。

朝5時に起き子どもたちと別れの挨拶をして、またここに来ることを誓った。

ホテルは綺麗でマッサージもあり楽しく有意義な生活を送ることができた。普通なら天国のように感じる生活をおくっていたのに物足りなく感じた。アスラマに帰りたい。

タナロット寺院は小さくて正直がっかりだった、心に響くことがなかったのだ。自然にできたもの、人工的に作られたもののどちらも、日本の方がすばらしいと感じた。

飛行機は、相変わらず寒かった。

私は、自分ひとりでは生きていけない。家族、

友達、先生、周りにいる人に支えられて生きている、周りの人もたぶん同じだろう。このワークキャンプに参加して感謝すること、今を大切にすることの大切さを強く感じた。少しずつ恩を返していきたい。

以上で私がインドネシアワークキャンプで感じた思いを終わります。

初めての異文化体験

法学部 1回生 小出 葉奈



今回のIWCに参加できると決まった時は、自分の目で世界を見るということがどのようなものなのか、あの時は検討もつかなかった。とにかく不安という言葉が頭によぎっているのを覚えている。飛行機に約7時間乗って向かうバリ島。バリ島と日本は想像以上に離れていた。デンパサールの空港に着いた時に日本とは全く違う風景を見て、やっとIWCに参加していることを実感した。この時点で、すでに不安はなくなり、ワクワクさが溢れ出していた。デンパサールからホテルに向かう間、ずっと窓を見続けていた。周りはヤシの木が生え、車よりもバイクの交通量が多い。そして、日本では考えられないような交通事情。車の左右からバイクが追い越し、当たり前のように車線の真ん中を走っている。日本の常識とは、大幅に異なっていることが理解できた。危機一髪な場面を何度も目にし、ヒヤヒヤしながら窓を見ていた。そして、ようやくホテルに着き、IWCの引率者やインドネシア学生、その他の関係者と対面し、自己紹介を交わした。インドネシア語でのぎこちない自己紹介は今思えば新鮮だった。それから食堂に移動し、初めて見るインドネシア料理に

興奮した。ここでもやはり日本の料理とは全く違う。インドネシアのお米はバサバサで、香辛料がとても辛く、味付けも変わった味をしている。それに、こちらの国の水は危ないと言われていたので、恐る恐るコップに入っている水を飲んでいても覚えている。日本の料理がどれだけ美味しいかを実感できた瞬間だった。そして、自分の部屋に戻り、シャワーを浴びようと蛇口を回すが、まさかの冷水だった。叫びながら水浴びをし、衝撃と苦痛が混じって、これからやっていけるのかと憂鬱な気分で就寝した。2日目は、ホテルで朝食を摂り、待ちに待ったプリンビンサリ村に向かった。プリンビンサリ村は、デンパサールから約4時間という長い道のりだった。1日目の疲れが取れていないからか窓から外を見る暇もなく深い眠りについた。目覚めた時には、すでにプリンビンサリ村に着いていた。バスから降りて周りを見渡すと、そこには緑に囲まれたグラウンドがあり、犬と鶏が何匹かいた。少し階段を登ると、そこにはアスラマの子どもたちがたくさんいた。日本の顔とは少し違う肌の色やどちらかといえば濃い系統をしている。私たちの顔を見て微笑む姿がとても可愛らしいと思ったのが第一印象である。それとは裏腹に、そこではハエが物凄く集まっていた。日本では考えられないほどのハエの数だった。自分の体のあちらこちらにハエが止まる。何度も追い払うが、またもや自分の体にハエが止まる。ここでも日本とは、違う環境に驚きを隠せなかった。アスラマの子どもたちは、自分の体にハエが止まっても平然としている。ここではこれが普通なのかと思うと、慣れなければいけないと心でそう思った。アスラマを一周して色々な場所を紹介してもらった。子どもたちが寝る場所や水浴び場、トイレなどを紹介してもらった。豚が何匹かいて、そのフンをエネルギーにしてるらしく、匂いがとても悪臭だった。休憩の時間になり、水とジュースが用意してあった。水はぬるく、ジュースは物凄く甘かった。休憩の後は、各自の班でミーティングをし、それを終えてからイブと共にホームステイの家に移動した。家の構造は、日本とあまり変わらない様に思えた。部屋の中は、こじん

まりとしていて、ア리가たくさんいた。こんな部屋で数日も過ごすのかと考えると気持ちが辛くなったのを覚えている。それからアスラマに戻ると、子どもたちがたくさんいて一緒に遊んだ。言葉が違ってこんなにも笑い合えるのかと思うと、初めての経験でとても感動した。その後にご飯をたくさん食べて、ホームステイ先に帰った。家までの道では、たくさんの犬がこちらに向かって吠えている。狂犬病を恐れ、犬が近付いてきても早歩きをし、顔を見ないようにしてホームステイ先に着いた。そこで、パパに日本のお土産を渡したら喜んでくれた。他にも色んな話をして気持ちが少し楽になった。マンディーをしてすぐに就寝。3日目は、朝ご飯を食べて各自の代表者が石を持って誓いの言葉を言い、土台として置くという定礎式をした。これは、作業を行う際の安全を祈る儀式でもあるが、初めて見る儀式だったので不思議に感じた。その後、インドネシアの楽器で子どもたちが演奏を披露してくれた。初めて見る楽器と音色がとても素敵で見惚れていた。ワークが始まって、石と砂を運んだ。暑いのと重たいのが辛かったが、子どもたちも一緒になって手伝ってくれたので頑張れた。それから教会に向かったが、教会の構造がすごく珍しかった。上は狭く下の方は楕円状に広がっていた。踊りを見たり話を聞いて、歌を歌ったりした。その後、祝賀会が始まり、子どもたちがまたもや違う楽器での演奏を披露してくれた。その日は、豚の丸焼きが出てきて、とても迫力があつた。たくさんご飯を食べたが、豚の皮の揚げ物に毛が生えていたらしく衝撃を受けた。それからホームステイ先に向かい、就寝。4日目の朝は、ご飯を食べたり、子どもたちとボール遊びをした。朝から子どもたちの笑顔を見ると、今日も1日頑張ろうと思えた。午前はワークをして、昼から交流会の練習をした。グッキーのダンスを覚えていなかったので何回も練習して覚えた。ご飯をいっぱい食べて、交流会が始まった。最初に子どもたちが歌を歌ってくれたり、踊りを踊ってくれた。とても上手で可愛かった。そして、私たちは世界に1つだけの花を歌ったり、グッキーのダンスを披露した。思ったより反応が

薄かったけど、拍手してくれたりグッキーと声を出してくれてたのでホッとした。その後は、ネズミ捕りゲームをしたり、だるまさんが転んだをした。これが大盛り上がりで子どもたち全員が笑顔だった。一気に距離が近づいたような気がして嬉しかった。交流会が終わってミーティングをした。そして、ホームステイ先に戻り、マンディーをして就寝。5日目は、朝ご飯を食べて、教会に向かった。そこで手話付きのアーメンハレルヤを歌った。それが終わると、日本食のカレーの準備をした。班ごとに野菜を切ったり、調理をしたり、おしるこを作った。一致団結して作ったからかとてもスムーズにできた。ホームステイ先の人と共に食べた。エナツ（おいしい）と言ってくれてたので嬉しかった。子どもたちも次々とおかわりをする姿を見て、やりがいを感じた瞬間だった。夜は図書館でミーティングしてから、ホームステイ先に戻り就寝。6日目は、朝ご飯を食べて高校に向かった。校舎はとても綺麗で、先生や生徒の制服も日本より優れているように見えた。教室に入る前は、緊張していたが、生徒たちがとてもフレンドリーだったのでそれまでの緊張もなくなった。日本語を教えたり、カルタや四択ゲーム、告白ゲームをした。なぜか私の顔が好評だった。「カナッ、カナッ」と声をかけてくれてとても嬉しかった。最後は写真を撮って終了。そして、高校を出てからアスラマに戻り、夜ご飯を食べてミーティングをしてホームステイ先に戻ってマンディーをした。しかし、この日はなぜか寝付けなかった。胸焼けと吐き気と冷や汗と下痢の症状が出た。日本とは別世界のこの国で、病気にかかった自分を想像すると突然恐怖に陥った。急に家族や友人に会いたくなくなった。日本に帰りたくて初めて思った瞬間だった。日本のご飯が食べたい。家族がいる家に帰りたくて。弱音が積み重なって気持ちと体が余計に辛くなった。ベッドに寝転び、無理に目を瞑って睡眠をとった。7日目の朝には、症状がなくなっていたが、気持ちはとても辛かった。そのままアスラマに向かうと、たくさんの人たちが体の不調を訴えていた。やはり昨日のご飯が何かで当たったのかと思った。何人か入院して治療を受けにデ

ンパサルへ。急遽予定変更になり、午前中休養になった。ホームステイ先に戻り、睡眠をとった。昼ご飯を食べて、自分のペースでワークをした。夜ご飯を食べてホームステイ先に戻り、就寝。この時ぐらいから一気に雰囲気が悪くなっていた。いつ自分が病気になるのかと不安になっていた。5人が入院することになって気持ちがドン底まで辛かった。その反面、やり遂げたいという気持ちが強くなっていた。そんなことを考えながらも眠りについた。8日目は、朝からワークをして休憩の時間となった時に、先生から途中帰国の報告を受けた。それを聞いたときは、実感がなかった。とりあえず啞然としていた。アスラマの子どもたちとも今日でお別れ。あと1週間もあったのに急な報告で頭がこんがらがっていた。もう今日で最後なのかと考えると、急いでホームステイ先に戻り、万華鏡などを持って来た。アスラマに戻ると、子どもたちがたくさんいた。子どもたちがこちらを見ていつも通り微笑んでくれる。その姿を見て抑えていた涙が止まらなかった。もっと一緒に遊びたかった。もっと子どもたちに何かしてあげたかった。そんなことを思うたびに涙が溢れ出す。その姿を見て子どもたちが私の方に来る。「カナッ」と抱きしめてくれた。泣かないでというように涙を拭いてくれた。そんな優しい子どもたちを見ると、涙が止まらない。テリマカシーと何度も心で言った。気持ちも落ち着いて、子どもたちとたくさん遊ぼうと心に決めた。大縄をしたり、玉入れをした。子どもたちが笑う姿がとても幸せだった。それから一旦ホームステイ先に戻り、アスラマに向かう。ご飯を食べて、お別れ会をした。子どもたちが踊ってくれたり、私たちも一緒に踊ったりした。笑いが耐えなかった。涙も止まらなかった。それから、写真をたくさん撮ってアスラマの子どもたちとお別れをした。万華鏡をずっと隣で「泣かないで」と言ってくれた女の子に渡した。とても喜んでくれて嬉しかった。ホームステイ先に戻る途中に、いつもように夜空を見上げた。それから最後のマンディーをして就寝。8日目は、朝ごはんを食べて、何人かの子どもたちに会えたのでお別れをしてからデンパサルへ向

かった。バリ島の風景を目に焼き付けるようにずっと窓を見続けていた。ようやくホテルに到着し、周りを見渡すと、とても綺麗な所で驚きを隠せなかった。真ん中にプールがあり、プライベート感とリゾート感が最高だった。ご飯も美味しく味わいながらたくさん食べた。この2日間は、プールに入ったり、スパをしたり、自分たちの時間を過ごした。検便も無事に済まして、異状無しとの報告を聞いて安心した。最終日は、ショッピングモールに行き、お土産を買った。その後の市場でもお土産を買った。そこから空港に向かい、インドネシア学生ともお別れをして日本に帰国した。この10日間は、私にとってとてもいい経験をしたと思う。始めにたくさん食べていたご飯も徐々に減り、匂いやハエが耐えらなかつたこともあった。たった1週間でも弱音を吐いてばかりだった。日本とは違う風景、価値観、文化。それを自分の目で見るということが、こんなにも難しく、素敵なことだとは思わなかった。もっと色々な国を見たい。これから先の人生、この経験を生かせるようにしたい。テリマカシー。

国を超えて何かをする難しさ

国際教養学部 1 回生 河野 満ちる



記念すべき第30回インドネシアワークキャンプ。全員がやる気に満ちていました。必ず一つ一つ確実に成功させたい、最高の30回にしたい。この20名ならできると。出国当日も誰もが強い気持ちで日本を出ました。現地に着き、空港内ではインドネシアらしい建物がたくさんありました。誰かも知らないのにインドネシアの方は温かい笑顔でした。ここで自分自身が最大何ができるのだから

う、できるのか?と不安と楽しさを持っていました。バスに乗りホテルに向かうまでも、たくさんの発見がありました。バイクの多さ、お金を稼ぐために小さな子どもが裸足で危ない車の通るところを歩いたり、歌を歌ったり。日本では考えられません。この場面を見てどうしてこんなに小さな子どもがこんな安全でない場所でお金を稼いでいるのだろう、この子どもはどんな気持ちなんだろう。現地ではインドネシア学生に聞くとバイクは小さい頃から使用しているのが普通なんだそうです。理由はバスや電車がいないからだそうです。ホテルでは全員が自己紹介をし、インドネシア学生の一人Dearly (デリー) と出会いました。一緒にご飯食べたのですが、上手にスプーンとフォークを使っていました。私は上手に使えず感心してしまいました。事前にインドネシア語は勉強していましたが、現地の発音はやっぱり違い、英語を使いながらインドネシア語を教えてもらいました。2日目はホテルを出発し、4時間かけてプリンビンサリ村へ向かい到着すると村の子どもたちがたくさんいました。とても元気な子がいれば、少し恥ずかしがりな子まで。部屋が男の子と女の子で分かれていました。私は女の子のいる部屋に行かせてもらおうと、女の子たちは嬉しそうに迎えてくれました。私はインドネシア語はほとんどわかりません。しかし彼女たちも日本語はわかりません。全然会話は成り立たないけれど、表情はみんなが笑顔でした。空き時間にはそれぞれの班でミーティングをしました。そのときは各自で今自分ができることを探しました。インドネシア学生にわかってもらいたいという気持ちがみんな全面に出ていました。ホームステイがもともと10軒引き受けてくださる予定が急遽9軒となり、ホームステイの相手がDearlyとなりました。とても嬉しかったです。2人で大喜びしました。村の子どもはとても親切です。大きいバックを小さな体で私の荷物を持ってくれます。私が持とうとすると怒ります。ホームステイ先はババとイブが迎えてくださりました。イブは私に自己紹介をしてくれました。ホームステイでは本当にたくさんTerima kasih (ありがとう) と言うことばかりでした。

3日目は入村式をし、初めてのワーク。村の広場にたくさんの岩と砂が運ばれ、皆やる気満々でした。自分も頑張ろうとワークをするたび思いました。午後は30回記念の祝賀会をしました。日本では聴くことのない音や竹を使ったガムランのジェゴグという楽器の演奏や、インドネシアのダンスはとても素敵でした。Dearlyと一緒に電気も灯ってない真っ暗な夜を手をつないで帰ったり、ある日は歌を歌って帰りました。イブやパパが家へ帰ると待っていてくれました。一日の話をしてたくさん笑いました。4日目は交流会がありました。私は今回Tシャツを作る担当をしました。この日みんなが同じTシャツを着ることができてとても嬉しかったです。より一体感ができました。盛り上がるかな、流れがうまくいかなと本番が近づくと緊張してきました。「世界に一つだけの花」を歌ったときは、みんなが一丸になり、「このメンバーで本当によかった、とても楽しい。」と言葉では本当に言い表すことが難しいくらい、皆が笑顔で絆が深まった一瞬でした。自分たちがやってきた日々はこれでよかったんだ。このチームで30回を作り上げているのだと本当に実感しました。インドネシアの方もとても笑顔でした。国は違うけれど、違ってたって幸せで笑顔で過ごす時間があり、それは本当に素晴らしいことなんだと感じました。子どもたちの力でもありました。その帰りに明日はアーメンハレルヤを歌うからと、お風呂に入るときもリビングにいるときもDearlyと一緒にたくさん歌の練習をしました。Dearlyが一生懸命にローマ字で日本語を書き、練習をしていくにつれて、日本語が上手になっていきました。だから私もその日から彼女にインドネシア語を何回も聞きました。彼女は喜んで教えてくれました。お互い違う言語を楽しく学んでいるとき本当に貴重な体験をしてるなと感じました。5日目の午前中はプリンビンサリ教会を訪れました。たくさんの人の前で「アーメンハレルヤ」を歌いました。昨日の練習のおかげで2人とも大きな声で恥ずかしがらず歌うことができました。イブも来てくれて嬉しかったです。そして午後はホストファミリーを迎え日本食を食べていた

だきました。今回はカレーと白玉団子。子どもたちはとてもおいしそうに食べてくれました。本当に子どもの笑顔は嘘がなく、とても素敵でした。イブとパパが忙しいなか来てくれました。会って数日しか経ってないのに、本当の家族のようにイブとパパは接してくれました。6日目はムラヤ公立高校を訪問しました。チームSenyum（えがお）が一丸となって成功させようという気持ちで、チーム全員が気持ちを合わせました。高校生もみんなとても元気でした。盛り上がるか不安だったのですが、高校生自ら盛り上げてくれたことが嬉しかったです。インドネシアの方々は初めて会ったにも関わらず、いつもフレンドリーで温かいです。ゲームを真剣に楽しみ、真剣に理解しようとしてくれて、お互いが真剣に全力で取り組み、相手を思いやり、そうしたことでこれ以上ない達成感と充実感を得られたのかな思いました。終わった後たくさんの高校生と写真を撮りました。元気をもらっている日々でした。7日目は体調の不調を訴える日本人学生が多いためワークは1日休養でした。

8日目のお昼に途中帰国を巖先生から告げられました。正直「なんでその決断なんだと。まだこれからだろう。」と思いました。やるべきことを残して帰るのは違う。この時から短時間で様々な決断をしなければならない連続でした。思い出だけで悔しくて、涙を抑えることができません。それでも、その日残された時間を子どもたちと過ごしました。岩と砂もまだ残っている。私たちがやり遂げるべきだったものを、途中帰国になったという理由で結局投げつけてしまう悔しさ。自分はこのワークキャンプでなにをしに来たんだろうと。皆、それぞれたくさんの思いにあふれていたと思います。子どもたちと過ごしながら、今している行動が本当に正しいのかを問うようになっていました。じっくり悩みたいけれど、今を大事にしないといけないと思う気持ちが交叉し、もがきながら過ごしていました。それは、皆そうだったと思います。しかし私たちが帰国すると告げられた時インドネシアの村の子どもたちは、悲しい顔

を見せる子はほとんどいませんでした。今、この一瞬を大切にしようとしていました。私はその姿を見て、私も、と思い本当に限られた時間を大事に過ごしました。ホストファミリーに告げると、とても悲しそうでした。また家が静かになる。悲しいと。イブとパパは本当に親切にしてくださいました。私が体調が悪いときも、朝アスラマに行くときも笑顔で送ってくれました。もっともっと時間があれば、なにかできたのに、本当ににも返せずお別れになってしまいました。インドネシア語がわからず、本当に少ない会話だったけれど、本当の親子のように毎日過ごしてくださいました。最後の日にパパは私に「扉を開けておくよ。君がいつでも帰ってこれるように」と言ってくださいました。自分自身に悔しさと悲しさが消えません。お別れのときも何が自分にはできませんでしたと自分を責めることしかできませんでした。

最後のお別れの会ではパパが得意なジェゴグを弾きにきてくれました。とても上手でした。とても嬉しかったです。Dearlyとも過ごす時間を大切にしようたくさん話をしたり、インドネシア語を教えてもらいました。彼女は私にとって大切な友達です。出会って間もないのに、彼女は人を尊敬し、何事も一生懸命でした。

もう一人、インドネシア学生にアンドリーという人がいました。彼は私の考えに変化を与えてくれた人です。

彼は日本語がとても上手です。日本人学生からもとても尊敬されていました。

あるとき、私は彼に尋ねました。「アンドリーはどうして日本語がそんなにできるの？すごいね。」と。アンドリーの返事が、「反対にどうしてインドネシア語ができないの？」「日本人はお金持ちだからじゃないの？」と。私は驚き、なにも返す言葉が見つかりませんでした。インドネシア人は必死で頭を使わないとお金が稼げないことや、賃金の安さなどを教えてくれて、私はワークやプログラムのほかにも、インドネシアに住む人や環境の現実の厳しさを知りました。生きること

は簡単じゃない。自分をもっと必死で生きるべきだと思いました。しかし彼は私に、「インドネシア人は貧乏だけどいつも笑顔」だとも言ってくれました。生まれる国は自分では選べません。しかしどんな国に生まれたからと言って何かを決めつけたり、小さくなって生きるべきではないと思いました。逆に私たちのように恵まれているなら、忘れてはいけないこともあるということです。今を一瞬を、支えてくれている人がいるということ。国が違って人間には変わりはないのです。

私にとってこのインドネシアワークキャンプは、ワーク、プログラムを通して、生きていく上での根本、一番大切にしないといけないことを学びました。人はそれぞれ違います。しかし、お金があってもなくても、住む場所がどこであろうと、一生懸命今を生きることが大事なんだと思いました。

そして最後に、今回30回Tシャツのテーマの「つながり (koneksi)」にはたくさんの意味があるけれど、ここまで作り上げてきたこのプロジェクトの歴史、30年間の感謝とこれからも進んでいくという願いがあります。今回の途中帰国は、もう一度皆が根底に戻り、考えなおし、より長くこのプログラムが続くように努力すべきだと思います。

30回はまだ終わっていない。

私が学習した事

国際教養学部 1回生 小泉 涼



私は、インドネシアワークキャンプで様々な事を学びました。私はこのインドネシアワークキャ

ンプを知るまでボランティア活動には興味もなく、参加もした事はありませんでした。しかし、私は大学生のうちに何か一つでも行動しないとイケないと感じ私の人生初のボランティア活動、しかも、海外でのボランティア活動に参加しようと思ったのが参加した一つ目の理由です。このプロジェクトに参加したもう一つの理由は、インドネシアワークキャンプで経験したことを活かせる職に就けたらより一層いいなと思っていました。私は何度か海外へ行ったことはありますが、インドネシアのような発展途上国に行った事がなかったのでいろいろと心配はありました。

インドネシアに着いてはじめに思った事は、やはり暑さでした。インドネシアは赤道直下の国だから一年中この気温だと思うと私には堪えられないと思いました。そして次に思った事は交通量の多さでした。インドネシアの人口は世界第4位なので人が多いのは知っていましたが交通量の多さには驚きを隠せませんでした。特にバイクの多さには驚きました。そのバイクは明らかに一人乗り用なのに最大で3人乗っていました。もう一つ驚いたのはヘルメットを3人とも被っていなかった事です。交通量の多さの他に驚いた事は、野良犬でした。街の真ん中に野良犬が道路を横断していたり、歩道でくつろいでいたり。私は犬が大好きなので私にはとてもショッキングでした。最後に驚いたというよりすごいなと思った所が自動車です。走行している車がほぼすべてが日本車だったことで改めて日本車は素晴らしいと思いました。そんな刺激的なインドネシアの町並みを楽しんでいるうちに一泊だけするホテルに到着しました。そこでインドネシア学生と現地スタッフと顔合わせを行い、インドネシアでの初めての夕食を取り、インドネシアワークキャンプの1日目は終了しました。

2日目、いよいよ私たち、30回のメンバーが活動するプリンビンサリ村にあるアスラマ（児童養護施設）へ向けて出発です。4時間という長時間ドライブでしたが私は車窓からのインドネシアの風景を楽しんでいたのが4時間の間、とても楽しめました。日本とはまったく違った風景を見て

とても興味深かったです。途中でトイレ休憩があり私はトイレに向かいました。私はそのトイレに衝撃を受けてトイレはできませんでした。そのトイレは母が20年前に訪れたバリ島での話とまったく同じトイレの形式だったからです。インドネシアは都市部以外の場所ではまだ、インフラ設備が整っていないようです。それにより、不衛生な状況があり、感染症などの発生につながるのではと思いました。このとき私は、日本の素晴らしいトイレをインドネシアの人たちに知ってもらいたいと思いました。改めて日本ほどトイレにこだわる国は無いと思いました。そんな衝撃的なトイレ休憩が終わり再びプリンビンサリ村へと出発しました。しばらくして、プリンビンサリ村について初めに目に入ってきたのは、やはり野良犬でした。ここにもいるのかと思いました。この村には野良犬と鶏もそこら中にいました。そんな、野良犬と鶏が眺めているとすぐに私たちの活動地であるアスラマに到着しました。すぐに子どもたちが寄ってきてくれました。到着してから時間があつたので子どもたちとグラウンドでサッカーをしました。事前研修で聞いていた通りに男の子は、サッカーがとても好きでした。その後は、子どもたちとホストファミリーの家に行きました。メンバーは4人で、そのうち1人がインドネシア学生でした。そのインドネシア学生は桃山学院大学に1年間留学していたので大阪弁がペラペラでコミュニケーションに困ることはありませんでした。家に着いてイブとパパは初対面の私たちに「もう君たちは家族の一員だ」と言ってくれました。そんな優しいイブとパパに挨拶を済ませ再びアスラマに戻りました。食後アスラマの歴史と現在の現状について聞きました。アスラマにいる子どもたちは片親か親に捨てられたかあるいは貧しくて子どもを養っていけない家庭に生まれたのでアスラマで生活している。その大半は貧しい家庭に生まれた子ども。そして、バリ島にはアスラマのような孤児院が30以上あるがまだ足りていないのが現状であり、さらに、施設に入れない子どもたちもまだいるという現状であるという話でした。私は初めてアスラマの子どもたちを見たとき、この子どもた

ちは親がいない、もしくは捨てられたとは思えませんでした。話を聞いて、大半が貧しいことが理由と聞いて少しは安心しました。しかし、中には本当に親がいないか捨てられた子どもがいるかもしれないということを忘れずにいようと思いました。もう一つ、施設に入れない子どもを一刻も早く助けてあげてほしいと願いました。私たちはバリ島がそんな現状である事を忘れてはいけないと思いました。

3日目、いよいよワークの開始です。第30回が行うワークの内容は遊び場と畑の間の石垣作りでした。石垣を積み上げて固めていく作業は本職の方に任せ私たちは大きな石とセメントの代わりに砂の運搬作業でした。とても単純な作業でしたがインドネシアの炎天下、重たい石と大量の砂を運ぶのは実に大変な作業でした。石と砂が多量に積み上げられているところと、石垣を作る現場まで何往復もしました。午前中はワークであつという間に過ぎて午後にはインドネシアワークキャンプ30周年記念式典があり、夕食はとても豪華でした。夕食前にスピーチで「これが30年の歴史でできた絆か」と思う場面が多くあり、お互い信頼しあっている事がよく伝わりました。私はこの関係がいつまでも続いてほしいと思いました。そんな盛大な3日目は終了し4日目、体調不良者が数名出てしまいました。一人は重症で昨夜、嘔吐と下痢の症状があったのでその学生は4日目、休息を取りました。この日は午前中ワーク、午後は交流会が控えていたので昼食後、男女に分かれてダンスの練習をしました。時間の過ぎるのが早くあつという間に交流会の時間になりました。初めは子どもたちの出し物で歌と踊りを披露してくれました。次に私たちの番で、私たちは、「世界に一つだけの花」を歌いました。その後は、ダンスを披露しました。私たちのダンスはかなり盛り上がりしました。その後はみんなでゲームをしました。「ネズミ捕り」という遊びと「だるまさんが転んだ」をしました。予想以上に盛り上がり、交流会は大成功に終わりました。この大成功は交流班の努力があったからこそだと私は思いました。

5日目の朝、昨日から体調を崩していた学生が

現地看護師の判断でデンパサールにある病院へ行くことになりました。朝、見送った後、午前中の予定であるプリンビンサリ村の教会訪問に行きました。その教会はバリ島独自の教会でバリの文化を取り入れた建物でした。午後は日本食提供のプログラムがあるのでその準備を始めました。私たちは毎年作っているカレーライスとデザートに白玉団子を作りました。しかし私は、準備を始める前に体調不良になりました。私は少し休憩をもらい良くなるのを待ちましたが悪くなる一方でとうとう熱が出てしまいました。結局、日本食パーティーには参加できず、自身の体調管理が出来なかった事を後悔しました。熱は38.0度まで上がってしまいました。しかし、一晩休むと熱は引きました。けれども、まだ動けるような体調ではなかったため私の6日目は休養日になりました。この日の予定は午前中は高校訪問と午後はワークでした。私は日本食パーティーと高校訪問というビッグなイベントを熱のせいで逃してしまう結果になりました。この日には完全に体調が良くなり、明日は頑張るぞと意気込んでいた7日目は、他の体調不良者が続出し、この日3人が病院へ向かいました。これで計4人が病院にいるということになってしまいました。この日は残った全員の休養日になりました。この日予定していたパニュポ村へはいけなくなり予想外の事態にこの先の心配の色を隠せませんでした。休養日と決まったミーティングで「これ以上病人が増えるようであればワークを中止になるかもしれない。」といわれたときは皆に緊張の色がありました。私は最悪の事態だけは逃れたいと思いました。この日は病院へ行った学生の1日でも早い回復を願いました。

8日目。この日は通常通り午前はワークに励みました。この日が最後のワークになる事を知らずに。昼食の時間になりいつも通りにみんなが席に着くと先生が一番前に立って、悲しげな顔をしていたのを覚えています。先生がミーティングを始めると言いました。私はその場面を鮮明に覚えています。私は先生が何を言うのかを察しました。たぶん他のみんなも同じ事を思っていたと思います。先生のはじめの言葉は「今日をもってインド

ネシアワークキャンプ第30回の活動を終了します。」でした。全員が固まりました。私は覚悟していたので何とかその言葉を受け入れる事ができました。このことは昼食後、子どもたちに伝わり、この日の夜に「フェアウェルパーティ」を行う事になりました。パーティはいつも以上に多くの子どもたちと遊びました。子どもたちには「さよなら」を言いませんでした。“see you again”と言ってアスラマを離れました。イブとパパにも同じ言葉を使いました。

私はこのインドネシアワークキャンプに参加できた事を誇りに思います。途中帰国という形で第30回は終わってしまったけれど、いい勉強にもなったし収穫はたくさんありました。私はこの貴重な経験に感謝して、ワークキャンプで学んだ事を今後、活かして行きたいと思っています。

《参加学生のレポート》

Nurrahman Andrianto (Andri)



This is the first time for me to join Momoyama Gakuin University's International Work Camp held in Blimbingsari village. Blimbingsari is a village located in west part of Bali island, where 100% of its citizen is Christian. I knew this program from a friend of mine, Deo. He asked me to join this program. He was the leader of the previous work camp and is the leader of this year work camp too. The first thing that came in my mind was that this would be a good experience volunteering in such program. I also thought that I could improve my Japanese language ability by

joining this program as the most of the participants are Japanese including the students and the staffs as well. As it happens, this year work camp is also celebrating its 30th anniversary. This year's camp consists of 20 Japanese students and 6 Indonesian students.

In the very first day, we met at Puri Sharon Hotel, Denpasar on 24th of August 2016. On that day, I thought that everyone was so quiet at first. But after officially introducing ourselves, some Japanese students came and talked to me. They also asked for taking pictures together. At that time, I felt that the ice was already melted and I believed that we could get along well in this program. Then, we ate dinner together in the hotel's restaurant and had a good time too. In dinner time they also gave us guide book on how the program would go. After that, we called it a day and got ready for the next day. The first day was very awesome because I could meet a lot of new people and got along already with them.

On the next day morning, we directly went to Blimbingsari by bus. It was quite a long ride, taking around 3 or 4 hours. Most of us was sleeping while on the bus, as it was quite far away from Denpasar. But on the half way, we stopped at a rest area to get refreshed, to give some chance for people who wanted to go to toilets, or to shop at a minimarket inside the rest area. Yes, some people bought some souvenirs at the minimarket. Others just bought some snacks or drinks, or both. Then, we continued our journey to Blimbingsari.

We arrived at the village's orphanage at noon. The orphanage is called Widhya Asih 2. There, they already prepared the lunch for us. After lunch, they divided us into groups for homestays. There were 9 homestays, so each group consisted of from 2 to 4 students. As for me, they had me in a group which contained 4

people including me. The other member of my homestay groups were Teppei (2nd year student), Shota and Ryo (1st years). We were the biggest group amongst the others as we were the only one who had 4 people in one homestay. The others had maximum 3. Our homestay's host is called Bapak Gede. He and his wife was very nice to us. We lived in a separate house, just beside theirs. It looked a new house, and they also said that it is for guests who come to their house. Every morning they gave us snacks, and hot water too if we want to make some coffee or tea. I am very grateful to have them as hosts. We also have other groups for school teaching team and cooking team. As for me, I was in a group called Matahari, where I was the only boy in the group. The other members are Akarin, Makoto, Shiori and Saki. Together we taught at school and cooked for people in orphanage as well as for our homestay's hosts.

The next day a commencement ceremony was held at the orphanage. Then, at the end of the ceremony, the first block of rocks were placed by a priest from the village, two representations of Momoyama Gakuin University, staff leader, student leader and Blimbingsari village head. After the ceremony was done, we started our first work. It was a sunny and quite a hot day too. We were to make foundation of a building. Therefore we had to bring some sand and rocks from point A to B. Point A was at the orphanage's field and point B is where the building was going to be made. It was quite a hard work for me as I never brought sand and rocks in my life before. Then we stopped the work at noon and we had free time afterwards. As we got free time from noon, Shota asked me why don't we go to the pool just next door from our homestay. We all had fun at the pool as it

was very refreshing after hard work. And yes, I really felt that I could be friends with these guys. They were all easygoing. Later, in the evening after dinner, we had a meeting to summarize our first day at the village. The first impression was, "all is well". As for Japanese students, they also had preparation for their performance next day. We helped them on thinking what game would make the kids of the orphanage happy. In the end, we decided to play "Mouse and Cat" and "Darumasan Koronda".

The next day, on 27 of August, we continued our work in the morning, and prepared for the performance after noon. But while everyone was working, I was a part of shopping team for Japanese Curry Party the very next day and went shopping in Negara, the nearest city. I saw the Japanese students practicing, and they were really good. The performance started around 7 after dinner. They asked me to do MC part. It was my second time to be an MC in my whole life. My first experience to be an MC was 2 months before this moment and it was a disaster. I could not live up the party and in the end my colleague MC helped me out. But for this time, as an MC in 30th IWC, it was really fun and even I could enjoy myself doing my part. The Japanese students' performances was very good too. They sang together, and dance as well. I was really happy to play my part as an MC there. As the time was up and the kids were already sleepy too, we ended our performances with smiles and happiness in our eyes.

Then, as the next day was Sunday, we went to church to give some performances in front of the audiences who were all from Blimbingsari. The Japanese students also sincerely gave some donations to the church and the village that they gathered in Japan.

After church, we had to prepare for Japanese Curry Party. Matahari group was doing peeling and cutting onions. After done, we prepared tables and seats for the kids and homestays' hosts. It was a quite hard work for us too, as we cooked for hundreds of people. But the hard work paid off as we saw smiles on their faces. The Curry Party was a success hit too.

Most of people say "I hate Monday". But I didn't especially on this Monday. It was a day that we went to school to teach Japanese. For me, it was my first time to teach Japanese to high schoolers. In fact, it was the first time to teach something to high schoolers. Their Japanese skills were really good. They already know most of the words that we taught to them. In the end, we played games and they looked very happy. Studying while playing games is always a fun way to study. I think we should come up with more games to make them want to study Japanese more and more. Or maybe make the class full of games from start to end because I think they are already bored with the normal class. I believe that full of games class would be a good refreshment for the students and make them more interested to Japanese language too.

On the 30st of August, there was unpleasant moment happened. It was when some people had to go to hospital in Denpasar as they were having problem with their health. Because of that, this day's work had to be postponed and everyone had a free time. Apparently some people had problems with their stomach but until now we don't exactly know what caused the problem. Everyone was worried about the people who were sick but we prayed for their health and hoped that they would return to Blimbingsari again to continue the program.

The next day, we continued our work -

bringing sand and rocks - as usual. But at noon before we had lunch, there was an information from Japan due the condition happened, the work camp had to be canceled and all of the members were expected to return to Denpasar the very next day to get checked. Of course we were all shocked because we didn't think that it would go this way. As it was destined to be our last day in Blimbingsari as 30th IWC member, we played with the kids, talked with homestays' hosts, as if there was no tomorrow for us. In the evening, we did the same performance as we did before and the kids were really happy. As for me, Yuka wanted me to read stories she made. It was my first time to read stories in front of kids for me, and they listened until the end. We wanted to make good memories with them, for the last time while we were still there. That's what we thought.

Then we went to Denpasar the next morning. As we arrived there, Japanese students get checked for their health. In the end, everyone was healthy and there were nothing to worry about more. They still looked happy and swam together too as if nothing happened. I am very happy for them. On the very last day, we went to shopping mall and Tanah Lot for sightseeing. It was very fun to go together and we didn't feel that it was the last day. Then later on that evening, we said goodbye at Ngurah Rai International Airport.

On this occasion, I would like to say that "Yes, we smile, we also cry, but there's no regret." I don't regret joining this program. I am feeling very thankful for Momoyama, for Senseis, for Japanese students, for Indonesian students, for the kids, for homestays' host, and every single person in Blimbingsari that I could not mention here, for giving me the chance and unforgettable experience I gain in

this program. I will definitely come back to Blimbingsari, for sure. Thank you, thank you and thank you.

GEDE INDEO MARIO AGASTIAN (DEO)



Iwc Is the best international volunteer program I have been joining ever. In this program I learnt many things, it was the second time for me to joined IWC, but I hope I can join again for the third time on 2017 because I really like this program, and now I want to talk about my experience during IWC 30.

First time I met with japanese student in Puri Sharon denpasari I was shy and nervous because I don't know I can communicated well during the program or not, but I tried to speak with them, and they was very friendly and humorist, and then we have dinner at the restaurant and Shouta Matsunami sit in front of me and we just tried to be know each other, Shouta is really friendly and funny, even when my japanese language is not good but we can laugh together and becomes friend.

On 25 august we went to Blimbing sari to start our program IWC there, from Denpasar to Blimbing sari it takes 3 hours by car, but before we arrived at Blimbing sari we just visited Soka Beach in tabanan for take a rest and take a photo.

When we arrived to Blimbing sari we are sitting there while we waiting the announcemen about the homestay and then the Children accomanied us to the homestay,

the children of widya asih look so fun when we arrived there and they look so excited.

I would like to say Thank you to Mr Sudigda and family who alreedy accept me and shouta as well, who always care and greating us every morning by a cup uf coffee and snack, in Blimbing sari we also celebrated the 30 Th anniversary Of IWC it was fun and great we all ate Balinese food with the children and all japanese teacher.

And then on Sunday we go to the church in Blimbing sari we prayed together with the local people of Blimbing sari and we also performed a song in Church, this song becomes one of me favorite song now the tittle is Amen Haleluya I don't know why but I like this song very much.

Day by day I am with japanese student we can make a joke and laugh together and talk about what is your hoby, what do you like and what you don't like, we becomes friend and care each other we also talk about japan's life style and Bali's life style.

In Blimbing sari we work to build a play ground for Widya asih Childrens. we carry a stones and we carry a sand by a bucket, and then during the work we also make a joke and inspire each other and say "Ganbatte". And then the work becomes fun because the children decide to join with us to work together build the play ground. Even when we feel little bit tired, it doesn't matter because of The Children's smile and their kindness to help us, we can did it very well.

We play with the widya asih Children every day. before we work, during the work and after the work, when we play with widya asih children we do many thing like take a photos together, played ball, throw the frisbee and many more it was so fun I really want to do that again.

And then I remember we also have one night when All IWC' members and widya asih Children performance dance, singing and we also played "Meong - meong" and japanese game. It was the best night during IWC 30 because we are all looks so fun and we have been laugh together even we felt so tired and sleepy but for me it was the best night.

Honestly I know this program finish before the scheduale. I was very sad when this program should be finis before the scheduale. I would like to say Thank you to all Widya asih staff who always cooked for us. From the breakfast, lunch, and dinner. And also I would like to say Thank you Very much to Bapak Sudigda My host family. And also thank you very much to all japanese sensei and IWC'S staff who always care with us during the IWC, and I would like to say domo arigatou gozaimasu to all my japanese Friends. Please always remember me as your brother from Bali, and you are all will always be my brother and sister forever. Thank you so much and for the last, For me IWC is the life changing experience.

I Nyoman Susila



First time I meet Japanese student in Hotel Puri Sharon on august 24th in the event IWC 30th I feel very nervous but I forced myself to introduce myself even though I don't speak Japanese. Maybe it's the first time I followed the IWC made me very nervous, and at dinner

I was still nervous. I feel how friendly Japanese students towards me and friends, we are instantly familiar make me very happy.

On the 25th august we went to Blimbing sari, while half of the trip we stop at Soka beach tabanan, we all got off the bus and the scenery of the beach. Reach us at Blimbing sari 12 pm children of the Panti Asuhan Widya Asih 2 Blimbing sari was already waiting for us and it make sense in our travel weary instantly disappeared. It turned out that at time we had already prepared lunch and incidentally also my stomach has started hungry. At the time of the division of the house, I was the same house with Kotaro and Nei to the east of the Widhya asih in the midst of the family Mr. Rai and Mrs. Ketut. Because I'm from the Blimbing sari so I've known Mr. rai and Mrs. Ketut.

In the morning of 26th august I'm, Kotaro and Nei went to the Panti Asuhan Widhya asih, deo and Shota was waiting for us in front of the house and departing together. Arrived at Widhya asih breakfast is already, it's time to eat together before starting opening ceremony. Opening worship and laying the first stone is served by Mrs. Welda, as we work we are very happy because this is the first activity we did together. Although a bit heavy but we can do it by working together and we work while playing. Maybe that's what makes us not feel tired while doing the work. In the afternoon we take a rest working and the lunch. I think friendship we add the familiar and learn to speak Indonesian and Japanese, it's very make me happy. The kids come home from the school and immediately invited us to play together instantly add to the happiness that I feel. Unconsciously playing time is at 3 pm, I was back to home because 4 pm o'clock opening worship the ceremony

for the 30th IWC anniversary. Finally we arrived at the church with the sweating because we ran out of the house. After the completion of any party in the worship began, the party turned out to be my favorite food, Babi guling come out it makes me immediately hungry. This is a traditional Balinese food is the most delicious.

In the 27th august we get ready for the next activity, continue the work yesterday. Move the stones using the carts are very fun and took turns with Rio and Shota using the carts. I think it's the familiar made us all very happy to move stones like the kids who are playing. In a moment of rest I smoke, because I'm a smoker then I squeeze myself for smoking. And we continue the work of until our lunch hour stop working. On this day there will be performances and games with the kids. Any Japanese students preparing for the show to be on the show. While preparing the show, I watch them exercise while playing guitar. Many Japanese bands that I like including ONE OK ROCK, Scandal, Baby Metal, SID, and much more. The song that I often play with the guitar one ok rock - wherever you are, I really like this song. Finally the evening show begins Andri becomes the MC and translator at the event. The children of asrama so the spirit of looking forward to the show and showing their show. The first show started is given an opportunity to children to boarding first, their energetic and spirit to display their dance. The kids are so funny, always smiling, making increasingly pleased with the activities of the IWC. The appearance of these children is very good. The Japanese students performances was very good. They sang and dance as well. I was really happy to watch this show. Once the gig was all over we continues game of cat and

mouse. During the game, the children so enthusiastic and they are very one of cat or mouse. Tonight we are very happy to play along, laughing, seeing the kids so happy when they play. As the time was up and the kids were already sleepy we ended the games. We are back to home stay to sleep.

The next day was Sunday, on 28th august, we went to church to prayer and we give some performances in front of audiences who were all from Blimbingsari. After church, we had to prepare for Japanese curry Party. Garuda group was doing cutting pork and cooking curry. After done, we prepared tables and seats for the kids and homestays' hosts. It was a quite hard work for us too, as we cooked for hundreds of people. But the hard work paid off as we saw smiles on their faces. The Curry Party was a success hit too.

In Monday on 29th august, It was a day that we went to school to teach Japanese. For me, it was my first time to teach Japanese to high schoolers. In fact, it was the first time to teach something to high schoolers. Their Japanese skills were really good. Studying while playing games is always a fun way to study. I think by playing while studying make more on the recall with student. I believe that full of games class would be a good. On the noon we ended the class and go back to asrama for lunch. We continued our work until afternoon we finished.

On the 30th August, there was unpleasant moment happened. It was when some people had to go to hospital in Denpasar as they were having problem with their health. Because of that, this day's work had to be postponed and everyone had a free time. Apparently some people had problems with their stomach but until now we don't exactly know what caused the problem. Everyone was worried about the people who were sick but

we prayed for their health and hoped that they would return back and continue the IWC.

In the 31st august, we continue our work moving stone and sand. Before we had lunch, information from japan the IWC 30th had to be canceled and all of the members were expected to return to Denpasar the very next day to get checked. We are very sad to hear the news, and this is our last day at Blimbingsari. Our appetite is gone and we still like to here with the kids. In the evening, we did the same performance as we did before and the kids were really happy. We wanted to make good memories with them, for the last time while we were still there.

In the morning 1st September we all so sad will be back to Denpasar. We are still want to stay hire. But we must go back to Denpasar to check up. As we arrived there, Japanese students get checked for their health. In the end, everyone was healthy and there were nothing to worry about more. They still looked happy and swam together too as if nothing happened. I am very happy for them.

On the very last day, we went to shopping mall and Tanah Lot for sightseeing. It was very fun to go together and we didn't feel that it was the last day. Then later on that evening, we said goodbye at Ngurah Rai International Airport.

This experience I will not forget, where can I learn to the Japanese language. I am feeling very thankful for Momoyama, for Senseis, for Japanese students, for Indonesian students, for the kids, for homestays' host, and every single person in Blimbingsari that I could not mention here, for giving me the chance and unforgettable experience I gain in this program. For the 30th IWC members thank a lot and I wait for the arrival all of you in Bali. Thank you !!!!

THE REPORT OF IWC 30 “いろいろお世話になりました”

Kadek Asti Sukreani



IWC (International Work Camp) is the cooperation between Momoyama Gakuin University and Widhya Asih Foundation) and this year is the 30th of IWC. This program held every year. And I am so lucky to be one of the IWC 30's member.

First, I would like to say thank you very much for all of the staffs of IWC 30 (Widhya Asih and Momoyama Gakuin University) for the chance. I am very happy because I could join the program. Honestly, I am not confidence with my Japanese. This is the first time for me to join the program directly with Japanese. First I thought that I can't communicate well with them, but my conception was wrong. I did it!

First day I met the student from Momoyama University, I felt so scary, but hour by hour we can talk each other and decided ourselves as a group. At the first day, I don't know my group, we never met before, and then my first friend from IWC 30 Yuuka Chan brought the paper of the group. Yatta, Garuda was my group. There were Hideki, Reiya, Nei, Susila, Haruna and Me. Hideki was our leader. All member of Garuda's group was really cared and helped each other.

In Blimbingsari I was stay with Haruna Chan at Mr. Swirya's family. He and his wife were really nice family. Every morning, they were served tea and snack for both of us.

They never complain with us. When we came back home so late, he is always waiting for us while watching Television. When I was sick, his wife made a Balinese medicine for me. One day, I want to come back again and visit them to say thank you very much. Haruna chan and I felt so thankful.

I am very happy when I was with Haruna. We were talking lot of things. She is taught me about Japanese and gave me a book. She is really care of me. Every night before we sleep, she always ask me “Asti chan, Atsui desukara, shawa- wo abite mo ii desuka?” She is so cute. She can speak English, so if Hideki, Reiya or Nei say something to me and I couldn't understand, she is always translate it for me. She is good friend, isn't it?

Joined this program make me felt like I am back home again after some years. When I was lived at Melaya Children's home, I just same with the children at Blimbingsari. I was really happy. I want to stay there for more longer with the children. Playing, eating, singing and taking selfie together. They are so smart and I am sure, they have big dream on their mind even they never talk about it. They are so enthusiastic when they talk with Japanese, not only that when we moved the stone and sands also. Take care my brothers and sisters at Blimbingsari, make your dream come true!

When I was in that program, I am not only work as teamwork when we moved the stone and sands but also I learnt how to cooked Japanese's food such as Curry rice. We divided as a group and Garuda's group should cut the fox. Not too easy but we did it! And now, I can cook the curry rice by myself.

And also for Ibu Miwa, “いろいろお世話になりました”. Thank you for your kindness when

I was in Blimbingsari. When I was sick, you're like my mother, take care of me. I can't say anything, but from the bottom of my heart, I would like to say thank you very much. One day, if there is a chance to meet you, I will visit you!

10 days join this program wasn't enough for me, I need more time to know each other. For me, this program not only for having fun, but also learning process. I learnt how to communicate with other people, how to understand other feeling. How make good teamwork. This program helps me to be more confidence and survive. And also from this program, I have many friends who can help me to improve my Japanese. Thank you for the students from Momoyama University who joined this program. It was an amazing chance that I ever had in my life so far.

This program is really good program, I hope that this program will be continue in the future, not only for this year. And if there is a chance for me, I will join again and do more than this year.

Once more, I would like to say thank you very much for an amazing experience.

Hanna Christmas Ngongo



IWC 30th (International Work Camp) is a good program for me. It was the first time I'm join this program and this program made me want to join again next year. I joined IWC 30th with the other Indonesia's student from

Dhyana Pura University and they are Asti, Deo, Dealy, Susila and Andri. With Saint Andrew's student, we lived together about more than a week in Blimbingsari and it's so fun!

In the first day, I met Saint Andrew's student in the Puri Sharon Hotel. It was confusing because I can't speak Japanese so I thought it will be difficult to speak with them. But, that feel disappeared when we have dinner together and I have a conversation with some of them. I am grateful because some of them can speak English a little, just same like me. So that night we have no problem because we don't sleep together.

In the second day, we went to Blimbingsari by car. Three cars. The student in two cars, and the teacher, Chaplain and the other old mans in a car and they went to money changer first, but we went to Blimbingsari. In this day I got new friend from Japanese's student. A woman. Her name is Yukka. I like Yukka because she is very openness so we can be good friend just a minute. I started to like the other Japanese's student to because they were so funny and made me can enjoy our journey by take photos together and spoke difficult in English but we enjoy that.

In the car we were talked each other and then we were fall asleep because Blimbingsari is so far place from Denpasar. When we were arrived, some of us felt sleepy but when we saw the Asrama's child, that feel was gone. We have lunch and then we discussed about our program to teach Japanese Program in the school. It was difficult because we have to discussed formal topics by English but we not good in English. So I thought it taken long time to understand the others. But, we can through that slowly.

In that day, we got our guest house family name, and our roommates. I was one guest

house with Yukka, Akari and Junna. Akari and Junna is not to close with me, but they good in English so it was not too difficult to have conversation with them. So some of Asrama's child taken us to our guest house family.

I love my guest house because the family was very kind and the house was very comfortable. I was a room with Yukka and Akari with Junna. The bedroom, bathroom, everything in that house were good. So we went to Asrama again and have dinner.

In the next days, we have celebrate IWC 30th Anniversary in the church. I was seated beside Miyu, a Japanese's student. By the way, she's my best friend too because I like her, and she's good in English. I told her about one of the performance. It was Angel Dance. It's GKPB's (Gereja Kristen Protestan di Bali) art. I don't know why, but I think Miyu really like that dance. I know it because I saw in her daily IWC's report.

In that night, we were dinner together with all Blimbingsari people and we ate Babi Guling I lived in Bali long time, so I love Babi Guling so much. It is one of my favorite food. But it was funny because some of Japanese's student can't eat that. I remember that me and Dearly (my Indonesia student friend) forced some of Japanese's student to eat Bab Guling.

Next day we were started to work! It is so fun in the first day we work because we all have good stamina. We work just a half day and then we did another activity. But next day, one of Japanese's student were sicked. A man. He is Teppei. It was sad because Teppei need to bring to the hospital so Undhira Staff drove him to Denpasar hospital. We that stay felt so sad because we Teppei separated from us.

Then we still work and work. We also

singing in the church in Sunday. I like the song so much. I remember the lyrics was "Amen Halleluya Amen Halleluya Amen Halleluya.. Amen. Haleluya." And we showed that with our hands up. It was fun because me and Indonesia's student actually don't understand the meaning of the song but we join them to sing in te church but it was okay and good. By the way in that day I saw Chaplain's guitar and I like that so much. It was unique and have good quality.

In the other day, we went to High School and we were teach students Japanese language. It was so funny when I saw the student difficult to understand the language that Japanese's student said. But it was okay because Japanese's and Indonesia's student work good together. In the school, we went to played games too. I thought the games actually very easy to the student but I was happy because the student can enjoy that.

Then we have a day that all of us cooked Curry to Guest House family and Asrama's child. I like the system we cooked because Japanese's student have good preparation for that, start from cutting the meat, vegetables and another else they have been delegating the work so everyone what they have to did that day.

When Curry has done, I tasted and MAMAMIA! It was very delicious for me! Thought it cooked it by myself but I they said they brought the Curry not coked from Japan so they didn't know it sell in Bali or not. And when Guest House family came, we served them and we were happy because they like it too. Asrama child were like it to. They ask more and more. My guest house said they ate Curry every year when Japanese's student cooked it for them so I know that cooking Curry is Yearly IWC's program.

It is my story about IWC 30th that I still remember. I still so many memories from IWC 30th that I didn't wrote here but the most important is I love IWC 30th and I miss all of them. By the way, thank you for give me chance to join with all of you.

Hello everyone ..

Ni Kadek Dearly Yuliantari



Be a lovely opportunity I felt back when following the IWC program for the second time, is not a coincidence that I could join with IWC 30th members but because of the opportunity I did not want to miss. It was nice to meet up with new friends from Osaka-Japan, in contrast to the IWC years ago. This year I could relieve my nervous when met with them, but I felt a little awkward because it is limited by language. It was not an obstacle for me to have a good relationship with them. Same with the previous year, we met in a hotel in Denpasar. We get together, get acquainted with each other, know each other so we became a family.

The night had passed, it was time to start our journey to a predetermined place, namely orphanage Widya Asih V Blimbingsari. During the journey I was trying to communicate with them, I was very surprised because some of them could speak to Indonesian very well. I am very happy how their enthusiasm to following the program this IWC. When it

reached the Blimbingsari, we were greeted warmly, especially children's orphanage was very excited to meet us. Our arrival was eagerly awaited by them, we played together, telling stories and a lot of things we did together. And then they with their pleasure dropped all IWC Members go to the guest house near Widhya Asih children home, I was very happy.

18 days is the time planned for us to stay with the children orphanage, but who would have thought what has been determined and planned was not going according to what is expected. We just passed the day together for 6 days, it feels short but we were able to make a beautiful memory together. We sleep at home resident, mother and father are very nice to us. They were friendly and consider us like her own children well as they always prepare breakfast to us. I get a sense of comfort that makes me excited to undergo any existing activities. Me and Michiru stay at the same home. The first time I met him we've got to be kidding until we stayed together. Michiru's been like my own sister, I am very lucky to have met him. I learned many things from him, really the experience I can not forget. Similarly perceived by the children of the orphanage, I see they always give their best smile to us. As their smile give encouragement to us.

The themes on the IWC this year are connected, as we have seen 30 years have formed a partnership. 30 years after the IWC program is running, certainly a lot of things that have been experienced. I hope this program continues to run forever. With programs like this, I am very grateful to be allowed to take part together with them. I had the opportunity to share knowledge and experiences with them. Many activities should

we do, our first day of work that is lifting sand and auxiliaries. Construction of a wall in the orphanage Blimbingsari do in contrast to the previous year. Indeed, there is a feeling tired when I have to work like that but over time those feelings go away when we mutually encourage one another. I really miss such memories, it was eager to repeat the story once we've been through. Time really flies, so the work was noticeably short. The next day we went to the church to celebrate 30 years of establishing kerjasamasa and continued in the orphanage Widhya Asih V Blimbingsari. I am very happy to be among them, come to see and celebrate the 30th IWC.

We also teach in senior high school, we were divided into 4 groups. Each group already has a program what will be taught in the classroom. The disciples are very eager to follow the Japanese language lessons that we provide. There are some among them who already understand the Japanese language as already familiar with hiragana, how to introduce yourself with Japanese language and say hello. Advances in technology have helped us in learning in particular. As long as we were in school, we're having trouble just that sometimes there are some things make us misunderstand. We are very grateful because everything should we pass with happy feelings. After we finished teaching, they are very eager to take pictures many student who want to take pictures with us. Once finished teaching us back again to Blimbingsari.

And the times goes very fast and finally we had to separated, we are all very sad when we must separated with Japanese students, I miss you so much guys, never say good bye, and you are all always will be my friend forever, don't forget me. See you again,

Domo Arigatogozaimasu.

第31回国際ワークキャンプ (インドネシア)参加のお勧め

第31回国際ワークキャンプ(インドネシア)の参加者を募集する予定です。

【このキャンプの特色】

国際ワークキャンプは、桃山学院創立100周年・大学開学25周年記念事業の一環として1987年以来実施している「アジアの人々の協働から学ぶ」プログラムです。

このプログラムの意義は、本学学生と現地学生で編成するキャンプ隊を、関係者の支援を基に、これまでの実践を継承しつつ、学生たちが協力し合って立案、計画、練習、実行して、バリ・プロテスタント・キリスト教会設立の児童養護施設の建設・設備整備・運営改善に協力することにあります。

また、このプログラムは、事前の学習と準備から始まります。現地では、児童養護施設の子どもたち、インドネシアの学生、施設・教会関係者、村の人々、ホームステイ先の方々との労働・交流などの様々な活動をしていきます。そして帰国後では、事後研修・報告書作成・報告会の開催などを行い、このプログラムを通して、学生たちは多くの経験を重ねていきます。観光客がほとんど行くことのないプリンビンサリというローカルな村において、現地の人々と触れ合いながら実生活の中で、本当の意味でのバリの歴史や文化に触れることのできる、総合的な体験型学習です。

【期間】2017年8月18日～9月4日の18日間(予定)

※国際情勢等の変化によっては中止・延期・期間の変更・期間の短縮もあり得ることを踏まえておいてください。

【キャンプ地】インドネシア・バリ州ジュンブラナ県ムラヤ郡プリンビンサリ村、ウディア・アシ(意味:愛と知恵の家)第2アスラマ(意味:児童養護施設)

【ワーク内容】プリンビンサリ村の児童養護施設整備工事等補助のボランティア等

【主催】桃山学院大学

【共催】バリ・プロテスタント・キリスト教会、ディアナ・プラ大学

【注意事項】金曜日5限にインドネシア語クラスやインドネシア文化クラスを開講しますので、スケジュールを空けておくことが必須となります。
履修登録の必要はありません

【単位認定】4単位認定されます。(共通自由科目「海外研修-国際ワークキャンプ」)

【参加自己負担金】【約150,000円の予定】

桃山学院教育後援会からの援助金3万円が援助されます。その他に日本学生支援機構より、奨学金支給の可能性(7万円)があります(前年度支給実績は12人中12人)。簡単な試験があります。

なお、為替レート、燃油サーチャージの変動等により参加自己負担金額が変更される場合があります。

※パスポート取得、予防接種等に関する費用(約3万円)、海外旅行保険代金は自己負担です。

キリスト教センター集会室で昼休みに行われる事前説明会にお越し下さい(4月8・9・11・12日頃を予定しています)。

ご質問等は……キリスト教センター内 チャペル事務室まで

国際ワークキャンプ報告書編集委員

南 秀 樹
高 岡 玲 矢
松 並 翔 太
井 方 優 花
山 本 陽 奈
前 平 朱 理
大 隣 光太郎
植 田 哲 平
河 本 寧
井 上 愛 琴
五十殿 詩 織
吉 木 美 友
藤 崎 優 華
木 村 純 菜
市 村 ひろみ
平 野 将 大
小 出 栞 奈
河 野 満 ちる
小 泉 涼

第30回 国際ワークキャンプ（インドネシア）報告書

発行日：2016年12月

発行：桃山学院大学 キリスト教センター

編集：国際ワークキャンプ実行委員会

〒594-1198

大阪府和泉市まなび野1番1号

TEL. 0725-54-3131（代）

印刷：和泉出版印刷株式会社

〒594-0083

大阪府和泉市池上町四丁目2番21号

TEL. 0725-45-2360（代）



桃山学院大学
St. Andrew's University